
灰羽

学無

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

灰羽

【Nコード】

N1661V

【作者名】

学無

【あらすじ】

笹本秋はふとしたきっかけから、人の幸運・不運の兆しが見えるようになった。

幸福になる人には、白い羽根。

不幸になる人には、黒い羽根。

また、普通の人には見えない片翼を持つ二人の少女、白井命斗と黒羽葵の出会いが彼女の人生に大きな転機をもたらした。

人の幸せは、彼女たちが与える白黒の羽根によって決まる。

そんな理不尽に振り回せながら、自分の存在意味を探していく。

プロローグ（前書き）

笹本秋はふとしたきっかけから、人の幸運・不運の兆しが見えるようになった。

幸福になる人には、白い羽根。

不幸になる人には、黒い羽根。

また、普通の人には見えない片翼を持つ二人の少女、白井命斗と黒羽葵の出会いが彼女の人生に大きな転機をもたらした。

人の幸せは、彼女たちが与える白黒の羽根によって決まる。

そんな理不尽に振り回せながら、自分の存在意味を探していく。

プロローグ

ある休みの日、連れがようやく休みが取れたと言うので、私は最近出来たばかりで、かねてから来たかったショッピングモールに遊びに来た。

正面から入ると一階から三階まで吹き抜けとなっていて、縦に横にと広がる展望は圧巻だった。さまざまなブランドの洋服店が立ち並ぶ二階きらびやかで、お菓子のような甘い匂いがどこからとも泣く漂ってきたり、玩具屋や本屋、雑貨屋など、ここにはないものはいんじゃないかと子供みたいにはしゃいでしまった。

そして人も多かった。子供と肩に乗せたり、手をつなぎあったりする親子。なかむつまじく話し込んでいる年の離れた女性たち。男一人女一人と言った組み合わせも多かったが、傍から見た力関係も千差万別でおかしかった。

そんないろんな顔をした人たちが、それぞれの時間を楽しんで、私の目の前を過ぎていく。それが少し胸の辺りに冷たい風を吹かせる。

私は人ごみがあまり好きではない。自分ひとりが取り残された気分になるから。

通勤時の駅前を切り取ったような喧騒は私を取り残して通り過ぎていく。一人が表情を明らめ、手を振った。けれどよく見れば、彼は私ではなくなたままた隣にいた彼女を見つめていた。

ほんのちよつとだけ上げた腕を、静かに下ろす。

どんなに人が集まっても、私は彼らの仲間でないと言う現実が胸の深く突き刺さる。

せめて隣にいてくれれば――と、連れは携帯片手にどこか消えた。会社から連絡があって、聞けば苦い顔で問題があったのだと。

連れは売り込みの営業マンで、プリンターといった事務用品から家具・家電、さらには健康食品から各種保険など……。依頼が

あれば何でも売り込むという会社に勤めていて、休日返上の当たり前、平日も朝から晩まで走り回っていると聞いている。

街でたまたま会社の社長にであったことがあったが、しゃれたシヤツが残念に伸びるくらいには恰幅がいい方だった。……さぞ、心が広いんだろう。

私と電話口の間で何度も泳がせて、見る見るうちに顔が青白くなって、額からは汗だらだらと流れ出す。かけなおすと電話を切ったかと思えば、ごめんと一言残して出口に歩いていった。

『いつか埋め合わせはするから』

と謝られても、いつになるかも分からない。でも私は微笑んで彼を見送った。

せっかくの休み。少しでも時間を無駄にしないよう、下調べもして、彼の負担も少なくなるように考えて。行く前から何度も計画を練って……。結局楽しむ相手がいなくなつて、やっぱり私は不貞腐れながらモールの中を歩き回った。

少しでも止まってしまえば、そのまま波にさらわれてしまう気がしたから。

けど、私はふと足を止めた。

目の前にいた一人の男の子が妙に気になったから。

本屋の店先、それも見本だろうと設置された棚の前。その子は熱のこもつてない目で、棚の一点を見つめていた。ぎざぎざとした髪で顔の両サイドを覆い、頬をラインを曖昧にする。それがずっと通っているようにも、線が細いようにも見えて。

中世的な顔立ちに、月明かりが映えるようにかがりが落ちていた。その横顔を一目見て、彼の生い立ちを理解してしまったような気がした。それは大げさだとしても、きつとこの子は私に似ている。

それだけは確信を持った。

足音を隠して、伸び始めた髪を揺らしながら歩み寄る。

「?私色の羽?……か」

「っ——!」

男の子が勢いよく振り返る。瞳の奥を揺らし、唇の端を引きつけていた。そして私の背後を見て、そのまま表情が氷付けになる。私の肩……、ふふ。さぞ大きな白い羽根が生えてることだろう。本当は息苦しいほど寂しくて。けど目に見えるそれは一般には到底受け入れられるものではない。結局、頼ってはいけなないと自分を戒めるような瞳。私の背後を見てその瞳は更に揺れを増す。それがひどく痛々しくて、同じくらい懐かしい温もりが込み上げる。

「大丈夫——」

私は穏やかに微笑み、膝を追って視線をその子に合わせる。

「君はまだ知らないだけ。……だからこれをあげる」

その子が見ていたものを同じ本を鞆から取り出して、不審そうな表情を無視して押し付けた。

『お前は悪くない』……なんて言葉は慰めですらない。

だから少しだけ節介を焼く。

昔の自分に、支えてくれた人が大勢いたように。

プロローグ（後書き）

誤字脱字、説明不足など、容赦なく突っ込んでください。

私は変化の乏しい、退屈なぐらいの日常がわりと好きだった。今も……好き。

幸運なんて自分には不相応だと思うし、そのせいで不運に落ちるというなら、私は波風立たない事に越したことはない。

決して高みを目指さず、ゆえに地に落ちることもない。

高校に進学してから早半年が過ぎた。進学したのは三流公立。いけるとこなんて腐るほどあったし、ここを受けるくらいなら県外を受験して玉碎する。そんな考えが主流だったらしい。

例えば駅一つ分東に行けば、制服がかわいいと人気の高校があった。……女子高だ。

私はここがいい。ここには私の居場所を作ってくれた人がいた。そしていつまでもそばで支えてくれる。おかげで少しは事故の記憶が薄れている気がした。

不器用で何もできない自分を、私は今でも疎ましい。

けど入学してすぐ生徒会長に捕まって、悲観的になってる暇がなかったし。教室で露骨に避けられることもなくて、雰囲気になじむよう促してくれる存在もできていった。

どうも……私の周りにはお節介が集まってくるようだ。

朝も早い廊下は人の気配が薄い。けれど香る秋に誘われて、時々生徒たちがクスクス笑っていた。

澄んだ陽だまりの中を一人廊下を歩いていると、いきなり後ろから押された。

「うおっ」

「おっはよ、アキ」

はつらつとした声は容赦なく私の態勢を崩す。変な悲鳴と、声高らかに笑ってもいた。

私は仏頂面で振り返る。そこには朝日よりまばゆい笑顔があった。

猫のようなまん丸い目、ニカッと笑みを浮かべる口元。肩口でそろえた髪は後ろでまとめ、ピンかなにかで上向きに留めていた。彼女の名前が現したような爽快な表情をしてる。

「陽子、朝から元気だな……」

げんなりとする私とは逆に、そいつは弾んだ声を上げる。

「だって、朝からアキにあえたからっ」

と、陽子は表情をほころばせ腕を絡めてくる……て、胸が当たってるから。

飽きない幼馴染を見て溜め息。それから思い出したようにあくび。本名は日野陽子^{ひのようこ}。小学校からの付き合いで、高校もさも当然のようと同じだった。

中学の時、周囲の暖かさを拒絶した私を、それでも見捨てなかった親友。自分が罵倒され傷つくのも省みず、いつも私をそばで支えてくれた。私の事をどこまでも一途に思ってくれる、今でも大切な存在だ。

陽子がいつもそばにいてくれることが嬉しくて、だからこそ素直になれなくて。

私は指で目元を拭って、振り向きざまに羽根を掠めとる。

「ん？ アキ、どこ行くの？ 教室逆だよ？」

「ちよっと、顔洗ってくる」

怪訝そうに呼び止める陽子に、私はあくびの余韻を残した声で返した。

「そっか」

ひらひら振った手を引っ込めて。握り締めて目を隠し、

「んじゃ、美顔をよりひきしめてきんしゃい！」

意地悪っぽく送り出す陽子に、聞かれないようにごめんとつぶやいた。

焦げたように変色する羽根を握りつぶす。人肉を焼いたような、嫌な臭いが鼻について離れない。

陽子は何もなかったかのように教室に入っていた。

昔、私がまだ小学四年生の頃、父さんの書斎で見つけた本があった。

人には三種類いて、それぞれ死神、天使、羽なしと仮に呼ぶ。筆者によれば人の吉凶には周期があるのだと。それらをつかさどるのは、人間が生まれ持っているエネルギーだ。つまるところ、幸運は身を削って生み出すもの。

やけに宗教的な言葉が並んで、数行読むごとに目を回していた。確かあの時、頭痛と知恵熱で半日寝込んだんだったつけ……。もしたら母さんに、

『アキは体が弱いんだから、無理するんだったら事前にお母さんに言ってっ』

とか無茶を言われた気がする。

結局、あの本に何がかかれてたなんて覚えてない。学術的だった気がするけど、著者が何を訴えたかったのか知らない。

天使は白い羽を片方に持ち、気まぐれに幸運を呼ぶ。

死神は黒い羽を片方に持ち、幸福すぎる人に不運を呼ぶ。

羽なしは羽をもたないただの人間。

そして天使や死神が関わった羽なしには印がつけられる。

天使が落とす、幸せの白い羽根。死神が汚す、負に落ちる黒い羽根。

白い羽根はその人に些細な幸福を呼ぶけれど、それは長く続くことはない。幸福が続いてしまえばその人は死に近づいてしまうから。そして私は知ってしまった。あの日、死を覚悟した私が生き残った代償。

不運の前には幸福がある。私にとってそれは変わらず続く日常だったというわけだ。心のそこから望み、無意識のうちに自分の命を削って幸運にしがみついていた。

白い羽根は小さな幸福を運んでいく。

黒い羽根が人を不運に突き落とす。
だったら、今の幸せは果たして、？ホンモノ？なのだろうか。

「——さん、ちょ——」

夢から覚めるよう前のように、ぼんやりとした女の声が聞こえた。
女の声は徐々に近づいてきてる……、けど私は、ずっと手を擦り合わせていた。

「笹本さん！」

「——！」

耳元で叫ぶ声に、はっとなって手を止めた。

女の声は明らかに、呆れたように頭を抱えていた。

「笹本さん……、あなた、何でこんな気持ちのいい朝から、親の敵のような険しい顔で手を洗ってるの？」

蛇口から噴き出す水が私の両手を包んでる。冬の立とうとするこの時期、けど水の冷たさは感じない。頭もぼんやりとしてて、特に左手の感覚がなかった。

「……いつ……」

じわりと熱さが皮膚を伝う。見れば肉が剥き出したように、左手が赤々と腫れていた。

何やってんだ、私……。確か顔を洗おうと洗い場に来て、蛇口をひねって。それで……

隣で大きい溜め息が聞こえた。

「なにやっての……、ほんと。人が少なかったのが幸いね。声かけるのが私じゃあなかったら、完全に通報されていたわよ」

「あ……、ああ、悪い」

私はおもむろに蛇口を捻って顔を上げた。

予想通りの顔が出迎えた。花が恥らうどころか、頭こうべを下げて敬つてしまうほどの顔が、今は疲れたふうに呆れている。けれどそれは、雲間の月明かりのようにみるものが吸い込まれるものだった。

細く整った眉にすつと通る鼻、薄く膨らむ唇。起伏に富んだ体のラインを、紺のブレザーと波打つレンガ色の髪が縁取る。

そして何より。彼女の背後には淡い朝日を吸い込みまばゆく光り輝く――真白の片翼。それは霞に映る幻影のようで、目を細める間に視界から消えてしまった。

「冷やした方がいいんじゃないの？」

『何があった』と訊くのではなく、私の手のことを気遣う。些細な気遣いが少しだけ嬉しかった。

「水だろうが空気だろうが、これじゃ染みるだけだろ。だったら水がもったいない」

「まあ、そうかもね」

私は左手に刺激しないようシャツで拭ってから、命斗に向き合った。少し布が当たるだけでも、じくじくと内側へと痛みが染みこんでくる。

「それにしても……、朝からお勤めご苦労なことだな、命斗」

「ええ……」

劳いの声に命斗は歯切れ悪く答えた。朝から巡回してることから、どうせまた生徒間の問題だろう。ろくでもないことだろうと考えていたが、反応を見て確信した。

もうすぐ秋も深まって、いろいろ行事が立て込しな。

この白為命斗しろゐめいとうはこの学校の生徒会長で、教師にも生徒にも支持されている。

特に、『美』であるとか『秀』を使った熟語は全てこいつを指す、といって過言ではなく、嫌味なほど欠点がない。各方面に秀でていて、物腰も柔らかか。分け隔てなくて……それが鼻に付かなくて。男女ともに好かれる美少女も珍しい。

「どうして、お前がこの高校にいるのか。いまだに訳が分からん」

「あら、そんなことどうでもいいでしょ？」

私の呟きに気を悪くするそぶりもなく、命斗は胸に手を当てそつと目を閉じた。

うつすらと目を開きこんなことを言う。まばゆい光を自ら発すように、どこまでも優しく、吐息に舞う羽根のように軽く。

「私がここで会長をしいてたから、あなたに会うことができた……その偶然に、私は感謝してるもの」

そして、恥じらいに頬を染めながら笑みを深くするのだ。

思わず見とれてしまった。嫉妬や劣情も放り出して、陽光をまとう彼女の微笑みに引き込まれていく。

——っ。こいつは……はああ。左手で顔を覆って、ようやく命斗から視線をはずす。

「お前は、その不自覚に誤解を振りまく癖をどうにかしてくれ。……私をたぶらかしたって何もでてこないからな」

険しい目で睨むと、透き通る指を口元にあてて、小さく笑う。

「あら、さんねん」

ころころと笑つてるところを見ると、少しは年が近く感じられた。

「でも、……そうね」

命斗の声からおふざけが消える。

目じりや口元に疲れが滲み出し、らしくない弱音が命斗の口からこぼれる。

「今はまだたいした問題じゃないけど、そのうち笹本さんにもお願いするかもしれない」

ブレザーの懷からケース取り出し、中の眼鏡をかけながら歩き出す。

「そのときは頼りにしてるから、左手お大事にね？」

手折られた花のようにしおらかに微笑んで、すっと脇を通り過ぎた。

私が振りかえる頃には、髪を一つにまとめて気合を入れた後姿があった。まばらな人通りにも、一人一人笑顔で挨拶していく。

「だから、……何で私にふるんだ、つつの……」

強めの溜め息が左手を直撃して——、

「いっつうう——」

痛みが神経にまでとどいて、私はその場で悶絶した。

教室に帰って見たら妙に陽子のテンションが高かった。何があったんだと訊いてみたら、本人はもったいぶるように口ごもられた。本人は押しても引いても無理っぽかったので、近くにいた百合香ゆりかに声をかけた。

聞けば、陽子の父親が今日から二日間休みらしい。理由は彼女の誕生日を祝うため。

それを聞いて、口の奥に少し苦いものが広がった。

陽子の誕生日は先週。しかも中間試験とかぶってろくに祝ってなかった。私の誕生日には中二の時を除いて家にまで来て祝ってくれたのに、私は何も返せていない気がしてならない。

けど、教室で踊り跳ねる陽子を見て少し安心する。

今日はアレして、明日はアレして。誕生日プレゼントは何で、半日デートして買って買ってもらんだとすでに夢心地だった。ほんとに見事な浮かれっぷり……

「そんなに嬉しいもの？ 父親が帰ってくるぐらいで、私なら付きまとわれてうざったいくらいなのに。私だったら、ささちゃんを喫茶店に誘ってっ、一時間くらいいくつろいで。それから夕日を見ながらこう言ってもらわ！ 『今日だけ、私はお前のものだよ』ってっ。それから一日の夢が消えないくらい濃厚な口付けを——」

百合香の冷め切った言い分ももっともだ。ただし、後半は聞かなかったことにする。

確かに陽子の跳ね回る姿は、事情を知らなければ異様だなど思った。本人も有頂天のあまり周囲との温度差を感じていないようだし。陽子の父親は残業や休日出勤が多くて家にいないことが多い。今は確か……プロジェクトリーダーを任されて、戦略の練って協力会社を回ったり社内調整をしたりしてる、だったか。

彼女が小学生の時もそうだったけど、ここ最近余計に親子の時

間は無いらしい。

それにあの人、できた人だからかなあ……

今年の夏休みにも少しだけ話したことがある。けどあの時は気後れして、ろくな会話をした覚えがない。せいぜい、「娘が世話になってる」「はいどうも」くらいだ。

姉さんと駅前に行った時、モバイルフォン片手に、スーツ姿の女性と一緒にそこを見つけて。ああ、陽子の父さんだと思っていたら、あっちも気付いて声をかけられた。

浅黒い肌にやわらかく皺を刻んで、Yシャツ姿がどこか紳士然として。Tシャツにジーンズだった私は肩を強張られて、声も裏返ってたっけ。

あの人、結婚して子供もいるんだよな……。毎晩バーで酒を飲み、一時の恋を嗜んでるという方が似合ってる。ていうか隣にいた綺麗な女性も、私の事を妬ましそうに睨んでいた気がするし……

——と、そんな一幕を思い出して溜め息をつく。

て、やけに視線を感じる……な。

とりあえず視線だけを上げると、らんらんと目を輝かせる女子たちと目が合った。二、三人は陽子を囲んで、天狗になった陽子が父親を美談を語ってる。

「それでそれでっ、躁太さん^{そうつた}って趣味とかあるの？ 好物とか。他にはええとっ……」

「ちょ、あんたがそれ聞いてもムーダ！ 笹本さん、どこに勤めるの？ 今度の休み——」

「うっわ、ライバル多っ。どうしようっ」

「一目でいいからあってみたい」
いつの間にか名前まで浸透してるし……。好きなんだなあ、そういうの。

「ささちゃんは狙っちゃ」

「お前は黙ってろ、百合香。……それに相手は既婚者だ」

胸元を開けて迫ってくる百合香を押し戻し、改めて黄色に色めく

女子たちを見た。

これ……誰が納めるんだろ……。ちらりと見た時計は、後五分くらいでホームルームが始まると告げてる。

「んなにいいのかよ？ 相手は単なるおっさんだろ？」

私の疑念が通じたのか、どこからか発せられた台詞に、一斉に殺気だった視線が振り返った。

教室の入り口か。部活終わりらしい数人いた。声の主は肩にかけた鞆を持ち直して、くつきりとして目鼻を嫌そうに顰めていた。汗に濡れたかがめの髪が、鋭い目に少しかかる。

「志刀くん、もてないからってひがまないでよ」

声の主たる志刀歩しとうあゆむに対して、嫌味ったらしく口元を歪めて誰かが言った。

「んじゃんじゃねえっての。お、俺はただ、倍も離れたやつに惹かれる理由がわからないってだけであって、別に日野の親父に嫉妬とかしてねえ！」

志刀も負けまいと声を張り上げていた。いかにも必死って感じで眉を吊り上げて、耳鳴りになるくらいうるさかった。

その隣で、男子が一人腕組みしながらうんうん頷く。

「そうそう。歩は単に、誰かさんが日野の父ちゃんかけえって言うのが嫌なんであって――」

「んだっ！ だから違うって言ってんだろ！ おお俺はな」

突然志刀は顔を真っ赤にして、ニヤニヤする男子に詰め寄る。

朝っぱらからテンション高いな。部活でミスでもして、いらいらしてんのか？

志刀歩は入学してからすぐにサッカー部に入った部活人間だ。長めの髪は毎日セットしてるくせに、部活終わるくらいには汗で濡れてへなってる。

「けど目鼻がはっきりとしていて、それなりに精悍としてるから、もてないってことも無いだろ？ なのに、何で浮ついた話がないんだあ？ ああ？」

「そ、そうゆんはもういいんだよ！ あんなのこりごりだっつの」
そういえば、一度だけ志刀に彼女がいたような……よく覚えてない。

「はっはー、相当きてんなー。それで何か、うまくいかないからってボールにやつあたしですか？」

「ちがうっつの！ 俺はっ、結婚してる相手と付き合うのはどうかって話をしてんだよ」

そう言い張る志刀は目をあらぬ方向を向けていた。ジドーッと疑わしい視線が集まる。

空気が重くなって、誰も口を開かない。

拉致があかず、何故か男連中の視線が私に集まった。やけに肌にまとわりつく視線だ。そーっと顔をよけてみた。……。

……視線は無言でついてくる。

しかたがなく私が代表して志刀につっこんだ。はあ……何で私が「あのな志刀、女子高生はダンディズムあふれる人に一度は憧れるもんだ。それに、躁太さんはこの連中が想像してるよりできた人だ。子供の憧れと恋心の区別くらいはつく」

あまつさえ相手の気持ちを見極めて、さりげなくその道を正してくれる。それくらいには分別のある人だ。高校生くらいなら軽くあしらわれて終わりだろう。

私の話を聞いていた志刀は、更に目を鋭くして睨んできた。……何が気に入らないんだ？ そういえば誰かが『日野の父ちゃんかっけええ』ののだどうか言ってるが……、それが関係するのだろうか。「それに躁太さんはできた人だと思うが、私はお前みたいに、気の置けない感じの方が好きだな。あの人相手だと気遅れして楽しめる気がしない」

こじつけくさく軽いフォローを加える。

すると、言った瞬間に教室の温度が変わった。何ていうか………：生暖かい。そして若干寒気が――

「ちょ、まま待てっ。いや、あのなっ、……だだ、から、おおおま

えが何て言おうが関係ねえってか、隙とか嫌いとかじゃなくて、あのな、お俺とお前はただの友達で、いきなりそんなこと……うおわ、どうすれば!？」

志刀まで壊れた……。顔を真っ赤にして、目は上下左右に外遊してる。何より呂律が回ってないせいで、言ってることがかなりちぐはぐだ。

「どうもこうも……、お前の好きにしろよ」

私たちが友達だなんて、今更確認することでもないだろうに……対して志刀は、「俺の好きにしろー!」と泡吹きながら叫んで、頭に手刀を食らっていた。

後ろから顔を出したのは西貴だった。すらりと背が高く、芝生みたいな短髪がさわやかだ。

「何か、今日の教室はあったけえのな。ついでに歩が壊れとるし……何したんだ? 笹本」

教室を見渡していた視線が私の所で止まる。

「そこで何で私のせいになるんだ」

何もしてないとふてくされると、西貴にしきやうじ宗治は歯を見せながら無邪気に笑った。

む。何だよ、その

「解ってますよ」的な笑い方は――。

……………

「ホームルームの時間だー、お前は一応座れっ!」

担任の声が教室に入ってきて、何人かが「へーい」とおざなりに返した。

私は狐につままれた気分になりながら、窓際の席に向かった。

隣に腰掛けた陽子は相変わらずで、私は自然と顔を窓の方に向ける。湿った吐息が窓を曇らせた。

今日は半日授業だった。

何でも、受験生たる三年生の特別講義をやるとかで一、二年の教室を使うらしい。ということをも命斗が言っていたなあ、とか考えていたら、教室内の人数も大分減っていた。

日はまだ高いのに、胸の辺りに冷たい風がつきささって。寂寥が身に帯びる。

父親とのデートにうきうきしてた陽子もう帰った。隣の席に触れても、人の温もりも残ってないように感じた。

……………私も、帰るか。

と鞆を持って立ち上がった時だ。近づいてくる気配に顔を上げてみれば、志刀と西貴が丁度歩いてきた所だった。

「笹本、一緒に帰ろうぜ」

声をかけてきたのは志刀の方だった。鞆を肩にかけて、鼻の頭を搔きながら。よく見れば少し顔が赤いような気もする。

私が「ああ」と答えると、くすぐられたように唇の端を少しだけ動かしていた。何かいいことでもあったのだろうか。朝はあんな怒ってたのに……変なやつ。

まあ、それはいいとして。

「西貴、部活は休みか？」

私は後ろに控えるように立っていた西貴に声をかけた。

「いや、部活は平常どおり。けど今日は、どこの部も暗黙の了解でさぼりだろ。受験生の御心を楽しげな後輩がじゃましちゃいけないからな？」

そう囁く西貴は意地の悪い顔をしていた。要するに、何かと理由をつけて半日遊びたいってことだろう。……いい意味でも悪い意味でも、高校生してるなあって思う。私なんて、家に帰って何時間寝れるだろうとかしか考えてなかった。

「ちょっと待てよ笹本、誘ったのは俺なのになんで宗治に確認すんだ」

自分が無視されて、少し目を吊り上げながら志刀が口を挟む。対する答えは単純明快だ。

ちよつとは可愛らしくなるよう、小首を傾げながら言ってみる。

「何でって、西貴の方がまじめだから？」

「そっか、そうだよなーって、おおいっ。宗治がまじめ……て、まるで俺が馬鹿で少々部活をサボったくらいどうでもいいような言い草じゃないか！」

「……………」

そこまでは言っていない。

「そこはだまんなよっ。それに残念な子を見るような目で見るなー！」

志刀はすでに少し涙目だった。少しいじったくらいでなよなよして、そんな揺れた顔が可笑しくて吹きだした。

「悪い悪いっ。ほら、行くぞ？」

意地悪っぽく唇の端をあげて、志刀の手を取った。

憤りや恥ずかしさで汗ばんだ志刀の手。大きく硬くて。けど、自分が何に寂しくなった忘れるくらいには温かった。

「さ、笹本っ、歩くの速ええって！」

志刀は慌てたように手を振り払う。その反動で志刀の体は前かがみになって、赤くなった顔が目の前にあった。……………。やっぱり、わりと綺麗な顔してるな、こいつ。髪が乱れてるのが少し惜しい。

整えてやろうと手を伸ばすと、志刀は弾かれたように身を引いた。

「さ、ささき行ってるからな」

誤魔化すように早足で先に行ってしまった。西貴もニヤニヤしながら後に続いた。脇を通り過ぎる時、もう一人誘うからとか言い残す。ああ、と適当に答えておいた。

二人の姿が見えなくなると、自然と溜め息が漏れた。

「さんねん。志刀がわたわた慌てるって、もっと見たかったのに」

肩をすくめて、鞆を持ち直す。

教室の入り口に差し掛かったところで、怪訝そうな声がかかった。
「あれ、ささちゃん。志刀君たちと帰るの？」

廊下の窓際で、待ち合わせでもしてるような様子の百合香がいた。
長い髪が体の前に伸びて、長い睫が節目がちに手元の携帯を見つめている。

「ああ、陽子は先に帰ったしな」

「そう」

ぱちんと携帯を閉じて、百合香がこちらを向いた。薄闇色の瞳が妖艶に微笑んで、私は吸い込まれるように目を奪われた。

「日野ちゃんが知ったら、怒り狂って、志刀君につかみかかるんじゃない？ アキに何をしたの、とか、泣かせるようなことしたら殺す、とか」

くすす、とからかうような声に、私は即座に頭を振った。

「いや、さすがにそれは」

——ないとは言い切れなかった。目元を引きつかせて、唇の端だけ吊り上げる陽子の姿は、なぜか容易に思い浮かぶ。

……まあ、それでも。泣きはらした顔で怒鳴り散らしていた、あの頃よりは意味合いも違う。

「笹本！、早く返ろうぜ」

「ああ、解ってる」

志刀の声に振り返り、百合香にも軽く手を振った。

「じゃあ、また明日な」

「うん。また明日」

少しは小走りで廊下を進む。

「はあ。いつまで待たせるのかしら……」

志刀や西貴に追いついた頃に、遠くからそんな溜め息が聞こえた。

志刀と西貴と、もう一人。六組の弓道部、朝麻と一緒に駅前をぶらぶら歩いた。

朝麻は髪や顎が長めで中性的、体格も華奢。ほっそりとした線は女と見間違いそうになる。

でも男は男だ。

男三人につれられた道草は、あまり色がない。初めにファーストフードを買って、かじりつきながらコンビニなんかを梯子する。雑誌読んで、商品棚をためつすがめつ、時々食べ物買って。

「よくこんなのを毎日やって飽きないもんだな……」

私が言えた義理でもないが、そんなことをぼやきながら一人ガールドレールに腰掛けていた。他の三人は目の前のコンビニの中。私人外の風に当たっていた。

日は傾き始めたばかりで、一日がまだ長いというように人も車もそれなりに多い。

街路樹を揺らす風は冷たく頬を撫で、そろそろブレザーを羽織るかって気持ちになった。

「何見てたんだ？」

コンビニから出てきた西貴が隣に腰掛ける。右手にはから揚げの袋。湯気が立つそれを、西貴はさっそく一つかぶりついた。

「別に何を見てたわけじゃあ——」

——ないと言いかけて、車道の向こうの中年に目がとまった。

恰幅がよくて、袖をまくり上げ肩には薄緑のたすき。両手でマイクを握りしめて。額の汗までは分らないが、声を高らかに街行く人たちに何事か問いかけていた。

ほとんどの人は顰めっ面。時々携帯を向けられているが、あまり友好的には見えない。

「あほひほ、むぐ……ふっと、自民の候補者だな」

「へえ、よく知ってるな」

私が隣を見上げると、西貴は一つ食べるかと袋を向ける。いやいいと断って、代わりにハンカチを取り出した。

口元を拭いてやると、西貴はさわやかに礼を言ってから続けた。

「あれだ、あぐ、……、れんかひと、れんぜんかひで、当選して、

んつく。動乱を駆け抜けたとか注目された人。まあでも今回はきちいだろってニュースで言ってたな」

袋の中をのぞいて、クシャっとつぶす。

指や唇に残った油を嘗めようとするので、またハンカチを使った。「センキュ。つか律儀だな、笹本って」

「口の周りは、気になりだしたら止まらないだろ？　だったらみっともないまねさせる前に、こっちでふき取ってやった方が早い。指はそのついで」

使った面を織り込んで、ハンカチをポケットにしまう。

その様子を見ていた西貴は歯を見せてはにかんだ。子供っぽい笑みに、こっちの方がむずかゆくなる。

赤くなりそうな顔を手で隠して、そのついでに演説者を見るでもなく見つめた。

「アオイ……？」

視界の端に、空に向かって伸びる闇色の羽が見えた気がして。ふとその名前が口からこぼれた。

あせる気持ちを抑えて周囲を見たが、歩く人たちの中にはいないし、路地の向こうまでは見えない。

「誰かいたのか？」

西貴が頭の後ろで腕組みしながら聞いて来る。

「いや、何でも……」

頭を振って、もう一度路地の先に目を凝らした。やっぱり誰もいない。

多分……、気のせいだ。死神を自称するやつは、あいっただけじゃあないしな。

ただ、私が見える世界に増えたものがあつた。

明るい色が占める街中で、間違い探しのように一点だけ黒く染まったもの。演説者の胸ポケットに不吉な黒い羽根がささっていた。

「—ただ、……堕ちるんだなとおもってな」

一心不乱な姿をあざ笑うように、あの人には不運が起きる。

私は黙祷するように両目を伏せた。体を奥から苦いものが染み出してくる。

「ん？ あ、ああ。まあ、そうだな。政党がアレだけ叩かれてりゃあ、議員だって巻き添えだ。……間違いなく、次の選挙では落ちるわ」

隣で目を細めていた西貴は気楽な声で言った。

見えないから言える事。けど、それでいいんだ。見えたって、手遅れなら今更できることもない。

だから私は一呼吸を前髪で隠して、身を翻す。丁度志刀の姿が右斜めくらいに見えた。

「志刀と朝麻、いつまでコンビ二にいる気なんだ？」

何気に店内に目を向ければ、成人コーナーの前を行き来する二人の学生の姿を見つけた。すっと、まぶたが重くなる。

「あいつら、外から見えてるってこと、気付いてないんだなあ」

長身のそいつは、風に吹き飛ばされそうな軽さで、くつくつと笑う。

三日後。政治家が献金問題でニュースに取り上げられたと、父さんが話してるのを聞いた。

1-3 (後書き)

第一章はここまでです

中学二年の夏、私はバスの中にいた。

宿題を早めに片付けて日がなだらけてた夏休みは、姉さんや母さんに「精気がない」を説教されたからだ。二人して毎日言うので、渋々と外出することにした。

熱いし、人ごみは嫌い。だからお盆がすぎて、帰宅ラッシュの終わりを狙って隣の街に出かけた。人は思ったよりも多くて、見るだけでも肩が下がった。

けれども、人が集まってるところを歩いていると、不思議と自分の足が弾んでいった。祭りの熱気と、日中の街中の熱気を取り違えたみたい、私の足は行くあてもなく人波の中を泳いでいった。行列の先に何があるのか見に行ったり、涼みに入った店で趣味じやない服を勧められたり、笑ってる親子三代を目で追ったりとかしてるうちに日が暮れた。

気付けば足は棒のようだった。もともと体力がないせいで立つてるのがやっと。

けど歩き続けて疲れた体とは裏腹に、心はまだそこら辺を漂ってるような、でもやっぱり疲れてるって感じだった。

おとなしく帰ろうと私はそのバスに乗った。

山間を通る路線バス。下手に電車にのって、三十分と立ちっぱなしなのよりましかなって、それだけの理由で。

バスにはおばさんおじさんの集団や、手をつなぎ合うカップル、受験を控えたって感じの学生とかいたが、二人掛けの席の半分くらいはまだ残っていた。

にわかには騒ぐバスの中で、一人だけ同じくらいの年の子がいた。年はおそらく中学生くらい。おそらくというのは目利きに自信がなかったから。

愁いう瞳は大人びていて、雪のようにきめ細かい肌も、黒くつや

のあるショートヘアも、そこらの人形よりきれいだった。私の体は、彼女の長い髪に囚われたかのように止まっていた。

動き出したバスに揺られるようにその隣に座ってしまっただけ、間近に迫ったきれいな顔は、もはや直視するのもはばかれるくらいだった。

服装は、自分で言うのもなんだが、男みtainなラフな感じ。けどそれらはぴっちり彼女の華奢な体軀をなぞって、触れたら壊れてしまいそうだった。

気まずい、というか恐れ多い。沈黙に耐えられず、あーうーとかみつともなく唸りながらどうにか声をかけてみると、年が近かったせいか、意外と話のかみ合った。

比較のおばさんおじさんの多い車内で、氷の彫刻のようにたたずむ女の子。けれども、ずっと目を細めるような笑みは、少しだけ子供じみたもので。雪解けを待つ山のように、次第に緊張もほどけていった。

それから、周囲が山間だけという単調なものに代わって。少女は急に黒い瞳を潤ませ、夜に吸い込まれてしまいそうな声で切り出した。

白い羽根のこと、黒い羽根のこと。幸運は人の命の代価であること。そして、自分が死神と呼ばれる役割を負っていること……

『私には白い羽根が見える。私は、それを黒く堕とさないといけないから……』

言ったそばから、闇に連れ込まれてしまうのではないかと心配するほど弱々しく。けれども黒く大きな瞳はまっすぐ私を見つめて、嘘ではないと訴えていた。

よく見れば、肩や腕も震えていて。凍えるように顔をこわばらせていた。

けれど私は疲れていたせいもあって、ろくに考えもめぐらず正直な感想を口にしていた。

『信じられないな』

私がぼんやりと答えた瞬間、ピクリと彼女が数ミリほど身を引いた。

二人の間のかすかなヒビ。その反応ひとつが答えだった

先ほどの笑い顔が嘘とは言わないまでも、彼女はどこかで、自分を押し殺してしまうのだろう。今の、雪に落ちる黒い影のような容姿は、そんな積み重ねの上に出来上がった副産物でしかない。

それなのに、私の言葉足らずは無意識のうちに彼女を傷つけた。

あるいはようやく信頼できると思った人間が、結局うわべしか見れない人だったと思って愕然としたのかもしれない。

やば、……多分彼女が受け取った意味とは違う。と私もあせった。とにかくフォローしないと！ 考えて、結局無骨な私には都合のいい台詞は見つけられない。だからせめて、彼女に言葉を伝えようとした。

『だったら、私は灰色でいい』

どんな慰めも励ましも届きそうにない彼女の心に、伸びた私の影が少しでも届くように。

『身に余る幸せなんかいらぬ。私は今の平凡・平坦な生活が続けばいい——』

暗闇の中で声を消して泣く、決して強くない女の子に私は精一杯微笑みかけた。

『だって平凡で平坦でも、こうして葵と話すことができた』

私の思いはどこまで届いただろう。

彼女は何も言わず消えて、私に付いていた羽根は黒くけがれたのだった。

私は基本的に、自分が見てないものを信じない。感想は個人ものだし、私の感性とは異なるものだ。例えば有名な映画だって、実際見たら駄作に思えることなんて少なくない。

けど、相手の感情や感想も否定しない。その人にとっては、それこそが真実だ。

いくら自分に受け入れがたい現実だとして、それは、他の誰かが否定していいものではないと思うから。

その考えは今も変わってない。たとえば私自身の行いだとしても、

……曲げられない。

「やっぱ、六組の黒羽くろはなんじゃねえの」

「さすがにな……、来週には準備にしなきゃいけねえのに」

そんな話し声が聞こえて私は教室を見回した。

今は昼休み。みんなパンや弁当を食べながら、他愛のないおしゃべりで盛り上がっていた。あちこちで机をくつつけて、肌寒さも忘れてるようだ。

「手が止まってるよ？ アキ」

隣から陽子に指摘されて、箸を口に運ぶ。……どこだろう。箸をくわえながら、さっきの会話を目で追っていた。

「けど『クロハネ』って、なんかネタっぽいよな。だって、あそこって元々」

あっちか……。視線を声のするほうに向けて。

いきなり目の前に陽子が現れた。猫のような目をつり上げて、鼻を膨らませて荒々しく息を吐き出している。

「アキっ、話聞いてるっ!」

「うおっ」

危うく箸を落とすところだった。

「き、聞いてるって」

降参と手を挙げながら答えながら、何の話だっけと考える。さつきから陽子が一人で話してた気がするんだけど。何だっけ……？

「……………」

「……ごめん。聞いてなかった」

無言の圧力を前にして、私は率直に折れた。陽子は溜め息混じりに修羅顔をひいてくれたけど、眉間の皺はいつそう深くなる。

「もう、アキったら、さつきから心ここにあらずって感じ。まあいいけど……、それでね——お父さんがひどいのよ」

と陽子はぐちぐちと話し始めた。

……そうだ。そういえば朝から躁太さんの悪口ばかり聞かされてる。

娘との約束を齟齬にするなんて信じられないとか、他に女作ったとか、会社つぶれちゃえとか……………ここ数日で躁太さんの株が下がる噂ばかりが広まっていた。発信元は実の娘の嫉妬。

つまり陽子があればこれ言うことは、事実無根だということ……二日前こそ、突然の仕事でデートが流れて気落ちしてたのに……女子って生き物こわ……

「落ち着け、陽子。躁太さんだって、最後まで上司に掛け合ってたんだろ？ 二日間は開けてくれて」

「アキは躁太に肩入れする気？」

いや、そうじゃないけど。私は歯切れ悪く言葉を切った。呼び方も変わってるし、陽子はそうとう気が立ってるようだ。

「だいたいさー、躁太は会えない日が多すぎて、半ば意識しないようにしてるの。なのになのに、帰ってくるなんてぬか喜びさせて、信じられる！ 娘がこんなに寂しがってるのに！」

「躁太さんへの執念はもう聞き飽きたよ」

ヒートアップする陽子に反比例して、私は冷ややかになっていた。そう。私は事情を知っていて、何も言わず羽根を掠めたのだから。今思えば、あの多忙な人が休みは取れたのは奇跡。白い羽根は見せた、ささやかな褒美だったんだ。いつも父親と会えず、寂しさに

耐えていた陽子の小さな願い……

「アキ………？ 大丈夫、顔色悪いけど」

視線が落ちたところに、勢いのそがれた声が掛かる。顔を上げれば陽子が眉毛を下げ、氣遣わしげに見つめていた。

私は慌てて暗い考えを振り払う。

「何でもない。何でもないからさ、そんな泣きそうな顔しないで」
それでも陽子は硬いものを飲み込むような顔になって、何か言いたげに口を開いては、拳を握るように押し黙る。それから口元だけ、無理やり笑った。

「父様のことは、ほんの冗談だから。アキまで気に病むことなんてないんからね」

そうイタズラっぽく言うと、陽子は箸をすっと伸ばして、

「あ、おい」

止める間もなく、私の弁当からミニバーグをぱくついた。

目を両目とも瞑って、小首を傾けながらじっくり吟味する。こくりと可愛らしく呑み込んでから、丸い目を開いてことさら明るい表情で感想を口にした。

「おいしい〜、これはアキの手作りだねっ」

私は目をしばたかせる。

「あ、ああ。そうだけど……、よく分かったな」

「だって、おばさんが作ったものより、アキの作った方が美味しいもん！」

「いや……、両手でガッツポーズしながら言われても………」

家庭の事情——母さんの気まぐれな性格のせい——で家事全般をやらされることが多いが、毎日の弁当まで作ってる訳ではない。割合は、……母さんの気分しだい。

昨日だって、母さんに夕飯の支度を押し付けられた。しかもカレー！。

『カレーなんて誰が作っても一緒でしょ』

なんて私が呆れながら言ったものだから、

『アキちゃんが作ったほうが美味しいんだもの!？』

とか頬を膨らまされて。ただでさえ小さい体を小さくして、横で野菜をちぎってた。

いや普通に考えておかしいだろ……。向こうは主婦暦二十年近く、こっちは家事手伝い暦七年くらいだ。何で本人からして負けを認めてんだ……

鬱蒼と溜め息を漏らしていたら、陽子は陽子でうっとり頬を染めていた。

「アキは、やっぱりいいお嫁さんになれるよね」

「一応、？誰の”お嫁さん”なのか、訊こうじゃないか」

私は眉間を皺寄せて陽子を睨み、それから――溜め息と一緒に肩から力を抜いた。

陽子は陽だまりのように笑っていた。それだけで十分。

「まったく、いい気なもんだ」

「笹本、ちょっといいか」

肩をすくめると同じタイミングで呼ばれて、視線だけを上げた。「今お弁当の途中」

無然と答えたのは陽子だった。わざと隔たりと作るような言い草に、声の主も眉毛を露骨に潜めた。お前には聞いてねえよ。と言いたいところをぐっとこらえている感じだ。

私は二人の険悪な様子に息をこぼしながら、闖入者、もとい志刀に向き直った。黒板の端のほうを一瞥してから、どこに行けばいいのかと尋ねる。

すると、志刀は切れ長の目を少し丸め、驚いたような顔になる。

「何だ、その反応……。いくら周囲の人とか学校のこととかに興味がないからって、自分が日直の日や日直がクラス委員長の次にかいっぱだというくらい知ってる。何か文句が？」

「いや、ねえけど……」

志刀はぐうの音も出ないって感じで、鼻の頭を掻いていた。

この学校では、日直は男女ペアで日に二人。今日は私と志刀が日

直で、朝から授業が終わるたびに黒板を消して、集めたプリント類を職員室に持っていった。日誌も朝担任から受け取って、放課後には書いて出さないといけない。

時々命斗に生徒会の雑務を手伝わされてるが、それは別の話。

「まあ、それなら話は早い、か。次の世界史なんだが、さっき職員室の前を通った時ちよつと準備を頼まれてな……メシ食い終わってんなら手伝ってほしかったんだが……」

慌てた様子で顛末を話した志刀は、そこで歯切れ悪く言葉を切り、視線を私の袂に向けた。私も釣られて視線を下にすると、丁度自分の弁当箱にがあった。

明らかに食べかけの弁当箱。白いご飯が半分以上残ってて、おかずも大体それくらい。

私の弁当を見て志刀は頷くと、あっさりきびすを返した。

「はあ、他を当たるわ。ここで無理強いしたって後味わりいし。――とすると誰に頼むか……誰か手伝ってくれそうなやつは、……うつわあ……、完全に視線はずしたぜ、あいつら……」

そういうさっぱりとしたところは、少しだけ男らしい。

志刀は頭为天辺を掻きながら、どうすっかなあって感じで教室を見回す。誰しも面倒なことをやりたくないのは、当然と言えば当然で。誰もが目を背けるのを見て、志刀は適当に指名しようとして。

その背中に一人、つぶやくように応じた。

「別に私なら構わんぞ」

弁当に蓋をしながら立ち上がる私に、

【は？】

とクラス中の連中が手を止めて振り返った。

全員、志刀や陽子までも口を半開きにして、『よりもよってお前が?』という感じで啞然としていて。クラスの連中が、私をどれだけ駄々草と見てるかが嫌でも判る。

……まあ、実際そのとおりではあるんだけど。

「けど、飯の途中だろ? 気持ち……まあ、嬉しいけど……、

あとで日野に何て嫌味言われるか分かったもんじゃねえし」

まだ信じられないといった表情の志刀。いつまでも私と陽子の間
を行きかう視線がじれったくて、近い方の腕を引く。

それ以上意気地ないことを言わぬよう、私はからかうような視線
を後ろに送った。

「ほら行くぞ。時間がもったいないし、ちょっと話したいこともあるんだ」

「へえ？ それ——って、や、待った待ったっ！ 分かったから腕
引っ張らないでくれっ、お落ち着けおお俺、何かのまちがいかも——
背後に殺気が異常！？ とにかく待ってくれっさもと！」

志刀は何故か、嬉しそうな顔で涙を浮かべる。私はそんなおかし
な顔に小さく笑いながら、教室を後にした。

世界史の準備は、一言で言えば『説明に使う資料を持ってくる』というもの。

とはいうものの、うちの学校には第一から第四まで物置き（備蓄倉庫）があつて、それぞれ用途も違ってくる。

判りやすいのは、グラウンドにあるプレハブ小屋みたいな第一倉庫と、保健室の上にある第三倉庫だ。片や体育に使う用具、片や薬品や包帯のストックが保管されてる。

後は第二倉庫と第三倉庫。ある棟こそ違うものの、形や広さ、柵の種類や数など、部屋の構成は全く同じ。主に第二倉庫には授業で使うもの、第三倉庫には学校の行事で扱うもの。というのが区分。

つまり私と志刀は、第二倉庫に向かつていた。一年の教室がある南棟から、職員室のある中央棟を跨ぎ、保健室のある北棟の四階に行く。という、第一を除いて最も遠い位置にある場所だ。

ちなみに保健室は北棟の一階、渡り廊下を向かつて右に折れた直後にある。

「な、なあ、笹本っ。あのさ……、さ、さっき教室で言つてたことなんだが、あーあれ、『二人で話したいこと』、ってなんなんだ」

中央棟の階段に差し当たる頃、志刀の緊張した風に声をかけてきた。なんか若干語弊があるようだが、……気にしないでいいか。私は軽く周囲を見渡す。

昼休みが折り返しに入り、渡り廊下や中庭に少し歩行者が出てきていた。

人が多いわけでもないし、別に人に聞かれて困るようなことでもない——訳でもないか。持っていく資料を探す間が暇だろうから、その間に聞こうと思つていたんだが……どうしようか。

少しの間悩んで、それから後ろを振り返って。骨格が剥き出すほど強張る志刀の表情を見て、唾然となった。

もったいぶるとこいつが窒息しそうだ。私は話を切り出すことにした。

切り出すといっても、ただ単に、引っかかった単語があったというだけの話だが。

「志刀は、『クロハネ』って知ってるか」

『クロハネ』といった瞬間、志刀は呆けた顔になった。

「『クロハネ』？　って、……ああ、『クロハネ』か。何でまた、あんなもんを？」

面白みのない話なのだろう。嫌というほどじゃないにしろ、あまり好きではないといった顔で志刀は聞き返してきた。

「いやさっき、教室でそんな単語を聞いたから、どんなもんかと気になっただけだ」

もつと言え、その前に六組の黒羽がどうかという会話が聞こえたからでもあるんだが。それは志刀に言う必要もないだろうし、言う気もなかった。

「あー、ちょっと待った。……うん、分かった。今度はちゃんと理解した。——何だ、道理でおかしいと思ったんだよな……笹本が俺に話とか、そんな都合いい話があるわけない」

「何か言ったか……？」

「いやっ、何でもない！　『クロハネ』だよな、『クロハネ』っ」

急に負け犬みたいに肩を落としたので首を傾げたのだが、志刀は弾かれたように顔を上げ声を荒げた。廊下にいた数人が振り返って、隣を歩く私までとばかり。ここぞとばかりに、適当に愛想よく笑って誤魔化していった。

……ほんとに大げさなやつだな。口には出さず、胸の奥でつぶやいた。

「笹本は『第三の噂』は知ってるのか？」

少し落ち着いた後、志刀はそんな前置きをした。

第三どころか第一、第二の噂も皆目見当が付かん。と言いかけて、そういえば入学して間もなく、いくつか怪談話を小耳にしたなあ、

化すためだったとか。

そして教師たちが第二倉庫に移した荷物の中に彼女の指が混じれ込んでいて、彼女はそれを死んでからも探している――

「まあ、確かに？第三？は使用頻度も少ないし、そのせいか教室の鍵を入れ替えた時にも存在を忘れられて、一つだけ鍵の保管場所が違うし――と、志刀、鍵くれ」

私が、どーでもいい裏話を披露しているうちに、目的の第二倉庫までたどり着いた。一見して一般の教室と見間違えるドアを前にして、私は志刀に手の平を向けた。

「ほらよ」

「サンキュ。……よし、開いた――で、それに倉庫の中も、物と埃でごったがえしてて、完全にカオスだしな。指の一本や二本くらい混ざっててもおかしくないって思ったんじゃないのか」

第三倉庫の用途は雑多にわたっていて。文化祭の成れの果てだとか、生徒会の会議資料だとか、部誌の余り、私物、カーテンの切れ端や暗幕、よく分からない小物など……さすがに壊れたピアノや人体模型なんかはなかったが。それほど広くもないし。

十数年前まではきちんとした区分はあったらしいと、確か命斗が言っていたつけ。

しかし、溜め息混じりで言ったのというのに、志刀は少しだけ顔を引きつらせていた。

「よくご存知で……。何でそこまで知ってんだよ……。もしかして肝試しのつくりが妙に手が込んだのって……て、いや？」

ぶつくさ言っていた志刀がいきなり首をかしげてきた。

「そいや夏休みの肝試しじゃあ、怪談をモチーフにしてたけど、笹本はあれには当日参加だったよな？」

「ああ、そうだな」

私は適当にうなづいておいた。

私の場合肝試しがあることを当日、しかも集まる時間寸前に聞かされたからな。まあ、事前に聞いていようがいまいが参加する気は

なかったと思うが。

「だったら何でそんなオチまで知ってんだ？ 俺は正直知らなかったし、あんま興味なかった。それに笹本ってそれ系に限らず興味ないだ、ですよ、……ね？」

志刀の声に振り返った私は、相当険悪な顔をしてたのだろう。もしくはひどく疲れきった顔。

志刀は私の顔を見るなり、言葉を切ってあらぬ方向に顔を退避させた。冷や汗が、志刀の綺麗な頬を伝う。

「命斗に付き合わされたんだ、梅雨明けくらい。『これから怪談の季節ね。毎年妙に浮き足立っちゃう生徒がいるから、今年はしっかりと裏づけをとって対処しないとね』とかこじつけられてな」

視線を部屋に戻しながら、溜め息にもならない沈んだ声で続けた。
『そんなもの風紀委員にやらせろ』

と文句言ったら、

『風紀は乱れを直すもの。事前に調査し、対策を打つのが、生徒会のあり方だと思わないかしら？』

と反対に説き伏せられてしまった。だからなぜ私に振る……生徒会役員でもないし。

はあ。確かあの頃は、私をしつこく巻き込もうとする命斗から、逃げるのを諦め始めてたんだったか……まったく、こんなことなら他の高校に入るべきだった。

「……で、だいぶ話が逸れたな。志刀、持っても探しながらでいいから『クロハネ』のこと教えてくれ」

「ああー、そういえばそんな話だったっけ……。オーケー。とりあえず持ってくるもんは、写真の資料と南ヨーロッパの地図、後は……」

二人で教師に頼まれたものを探しながら、志刀は話す『クロハネ』の噂を聞いた。

準備物を全部志刀が持ち、教室に帰るまで話は続いていた。

「——と、そんなことだ」

一息ついて、志刀は荷物を持ち直す。

「つまり、部活終わりの女子が？第三」の前を通った時に、大きく広がる翼を見た——と？」

「だいたい、そんなところ。後は、裂かれた布切れが廊下に落ちてたんだと。これから体育祭や文化祭の準備が始まるのに、ちっと不吉だなんて話」

志刀は滑る持ち物を落とさないよう、膝で支えるなどして苦闘していた。

まあ、何で部活終わりに第三倉庫の前を通ったのかとか、『第三の噂』と関係ないだろとか、些細な疑問はさりとて、

「胡散臭い」

私が半眼になると志刀も苦笑した。

「大方、部活で夜遅くなったからって、面白半分で？第三？に行つて、物音かなんかにびびって変なもの見たとか言っただろって、俺は思う。廊下の落ちてったという布きれも、すでに文化祭の準備を始めてる連中が落としたとか、そんなもんだろな」

体育祭は二週間後、文化祭は更にその二週間後。体育はもう体育祭用のそれに切り替わっていたし、文化祭の出し物を決めたのはもう一ヶ月以上も前の話だった。

「まあ、なんにしても、もう怪談って時期でもないからなあ」

一息つくように返しながら、脇に抱えた地図や昔の風景画の写しなどを持ち直す。

「やっぱり半分持つか？ 重いだろ」

「いい、いいって。大きさが中途半端で持ちにくいってだけだし、力仕事は男に任せてろって。伊達にサッカーで鍛えてねえからな」

そう胸を張って笑う志刀は、西貴までとは言わないまでも細い体をしている。筋肉があるというより、無駄な肉がないといった風貌だ。到底力があるとは思えない。

けど厚意は素直に受け取っておくことにした。

「それより鍵を職員室に頼むわ。持ってた後に返しに行くのって面倒だろ？ それに……俺が行ったら、また別の厄介を押し付けられそうな気がするし……」

さわやかなスポーツ少年という顔が、パシリをさせられる後輩みたいな、疲れたものに変わった。確かにこいつは頼みごとしやすそうな顔している。

それにむやみやたらと断ったりしない——まあ、そんな情に厚いところが、結構好きだった。

「分かった。じゃあ、そっちはよろしく」

「おう。任された」

私は中央棟の階段で志刀と分かれた。

秋の空気の中で、ほのかに熱を帯びる鍵を握り締め、階段を一階分降りていく。

一階の廊下に足を下ろす時、私は白昼に帳が落ちたような錯覚を受けた。

目の前を通り過ぎるは月の光を反射する黒く艶やかな河。熱をさう風が一瞬にして凍りつき、服の上から皮膚をさすような、圧倒的な冷たさが身に降りかかる。

その中をどこまでも無表情で、熱を忘れた瞳で、凜と背筋の伸びた女子学生が屹然と歩いていた。

彼女の周囲に一瞬だけ黒い羽根が舞い上がった。光を反射し、白く見えるほどの漆黒の片翼が背中から伸びていて、影が光に溶けるよう瞬く間に見えなくなる。

「一年の黒羽だ……、こんなとこで何してんだ」

「うっはあ、いつ見てもきれー。あれほんとに同じ女の子なの？」

「――ていうか、カッコいいって感じだよな。あゝ、付き合うならあんなのがいいよな。隣にただで自慢になる」

「止めとけ止めとけ。性格きついって噂だしよ、相手にされねえって。……だいいち、お前じゃつりあわねえって」

「あ、こっち向いた！　ねえねえ見た見た？　葵さんがこっち向いたよゝゝ。今日はぜつつつたいついてるっ」

廊下にいた生徒たちからそんな感嘆の声が上がった。彼女によって冷めた熱が戻ってくるように、その場の空気が淡く沸き立つ。

他にもいたな……、男女ともに目を引く奴。

「もっとも、こっちは――」

「あゝあ、いつ見ても生意気な顔ゝ。何あいつ、自分以外はカスだとしても言いたいのかしら？」

「ツチ。感じワリイ。無然としやがって、こっちまでテンションさがるつつの。ちょっと顔がいいからってさ――」

「さっさと行こうぜー。ったく、あんなのの何がいいのかわかんねえ」

命斗と違って、批判非難の声も少くない。

私は陰口を叩く連中に顔を顰めながら、一人ぼやく。

「だったらお前らは、葵の何を知ってるって言うんだ……」

バス事故の日に偶然出会い、気付いた頃には消えていた女の子。

雪のような白い肌に、エナメルのような長い黒髪。感情を削ぎとったようで、ひそやかに愁いを帯びる表情をした黒羽葵。

一度話をしただけの私が、彼女の全てを知るはずもなかった。

「そこで、調査が必要だと思ったわけだよ！ 分かるかい！ 笹本くん」

日も傾き、肌寒くなってきた教室にそんな熱弁が上がったのは、放課後のこと。

眼鏡に目を反射させて視線を隠し、私を挑発するように睨むのは須磨丈智すまたけともという男子生徒だ。コケタ頼のせいで輪郭は鋭く、まじめくさった中にオカルト的な雰囲気ふんぎの漂う奴だ。彼の後ろには、何気なく志刀と西貴の顔もあった。

対して私は、日誌に汚い字でデタラメなことを書いていた。今年度、学習計画なるもの、つまり今日一日の授業内容を書き終わったところ。

「――それで？」

私は胡乱な視線で説明を求めた。見てるだけで腹の立つ顔をした須磨にではなく、後ろで『面白そうだ』と顔に書いた二人に向けて。

「はっ。何度も言わせてくれるな。つまりだな」

「このオカルトマニアの思考回路が要検査なのは理解した。私が訊いてるのはその飛び火がこっちに來たことに対する釈明だ」

放課後になってすぐ、この三人が持ちかけたのは例の『クロハネ』の真相究明だった。

『我ら、不可思議事象研究団体――（オカルト研究会だどつつこむが無視された）――会長候補たるボクが、世に広まった『クロハネ』なんてふざけた噂を知らなくてどうする！ これは誰よりの深く、根を掘り返して調べねばならん！ そう天命が告げているううっ』

……だ、そうだ。なんでこんな秋恋しって時期にやるんだ。時期を考えろ、時期を。

「相変わらず、無味乾燥って感じだなあ、笹本は」
一蹴したのが効いたのか、眼鏡を押さえて黙った須磨に代わり、

のんきな声が間に入り込む。

「夏休みもそんな感じだったよな。ほら、お盆くらいに肝試しやっただろ？ あん時も、やる気がないっていうか、半目でさっきまで寝てたんじゃないかってくらい不機嫌だったよな」

「ああ、そうだな」

昼間の時も話に出たが、改まって指摘されて、あの日の事を思い出してしまった。

多分、今の顔がその時の顔だろう。苦笑いする西貴の顔が半分くらいしか見えん。

「おまえなあ。夏休みだからって、午後八時前に電話がかかってきて、いきなり学校に来说われて切られたあげく、五分後に家に電話の主が現れてパジャマのまままで連れ去られそうになったことがあるか？」

「いや、そんな愉快な経験はないな」

苦笑の形のまま、西貴の表情が左右にぶれた。それに溜め息で返す。

「そうだな」

ちなみに私はある。それが肝試し当日の話だ。呼び出したのは、隣でにこやかに微笑んでいる親友である。

訳が分からないまま、とりあえず着替えてついて行ったら学校に強制参集。

集まった全員が懐中電灯持参で待ち構えていて、聞けばこれから肝試しというじゃないか。それで陽子とヘタレと組まされて……。そのヘタレに逆ギレされてるわ、帰ろうとしたら踊り場で逃げてきた奴につきとばされるわ、おかげで足をくじくわ。そこへペアに逃げられた志刀が来て、よかった思い出なんて……

「だからな、笹本は——ん？ ！！ のわっ！ ど、どどした、笹本？ んなこええ顔でここっち睨んだりしてっ、おれなんかお、おこらすことしした、しましたか」

何を勘違いしたのか、志刀は私の顔を見るなりわたわた手を振る。

あーだこーだと訊いてもいない言い訳を並べて、しまいには両手で顔を守るようにしていた。

……はあ。なんか、急に顔から熱が引いていった。

「……忘れよ」

「うへ？ 何かいっー」

「何でもない！」

間拔けな声を遮って、私は志刀とは反対側を向いた。

「ふん。下らないな」

「バーカッ」

「……………」

「おまえ等までなんなんだっ！」

一人わめく志刀は無視して話を進めた。

「――で話を戻すが。だいたい、何で私が？行く？という、立体交差した結論がでたんだ？」

私は自分の目が徐々にすわっていくのを感じた。声もいつもより低い気がする。

それをなだめるように口を挟んだのは、隣に座る陽子だった。

「つまり、不思議な現象を超常現象として実証するのに、かなり現実的な見解を否定する必要がある訳で、そこで現実しか見ない、ひじょーに捻くれた性格のアキに白羽の矢が刺さったという訳ね」

志刀を冷たい目で見ていたと思えば、手の平を返したようにころころと笑う。

こういう、？私が参加する？ものに対する陽子は、^{アキ}精力的に参加させようとする。先の肝試しの例がいい例だ。

彼女いわく、リハビリ、だそうだ。高校に進学してからしばらくして、どこぞの会長みたいな言い分をさも当然のように言われた。

白羽の矢……。この場合だと使い方が正しい気がしないでもないな。

今でこそ、私は？普通？でいられている。そう思えてきた反面、いまだ陽子の目に映る自分が成長していないんじゃないかって思え

て、心の奥がぬかるむ。

「それにしても立体交差なあ……、交わってないよなそれって」

「上から見たら交わってるでしょ？　つまり須磨君たちの視線は上からで、アキの視点からは交わってないのに交わってるよう見える。っていう皮肉」

なにやら西貴と陽子が話し込んでいた。陽子に加わらないうちに、さっさと断るのも手かもしれない。そうと決まれば、暗い感傷を苦笑に変える。

「そもそも、怪談と呼ばれるものはだな。社会背景を持った風刺であつたり、時代とともにアレンジされていくといわれるが、本質的には――」

問題は、この卑屈そうな須磨をどう論破するかだ。

こいつ、言ってることはおかしいくせに頭はいい。テスト前になると男子たちはこぞってこいつに泣きつくくらいだ。加えて私の事をよく思っていない。

前回の中間テストの後、私の点数を聞いた――というか陽子たちと話してたのが聞こえたみたいだが、『納得いかないな！　次のテストではキミのその余裕な顔をへこませてやる！』とかいきなり宣戦布告された……。何だってんだ、平均八十は普通だろ。

ありがた〜い説法の前にして、私は手をこ招く。どうにもこいつを抑えられる気がしない……。姉さんの次くらいに。

須磨はなおも挑発的な言葉を重ねる。

「それとも、笹本クン。君は夜の学校が怖いのか？　そういえば夏も気乗りしていなかったな。はは、それはそれは。お化けのおの字も聞きたくないんじゃないのならしかたがない、普段は何事にも動じないという風だというのにな！　はっは！！」

煩わしい前髪を掻き揚げ、高らかに笑う須磨。勝手に私の弱点を見つけて、さぞ気分が肩部ったらしい。私は視線を日誌に戻しつつ、冷たい声で返した。

「きゃー、こわーい。ワタシ、ユウレイって駄目なのー。とくに、

怪談ってムリー」

人工音声の方がまだ感情表現が豊かだろうな……まあ、いいか。

えーと、掃除の評価ねえ……よくできました、と。後、何か特別書くことあったけ。

「キサツマー——オレが下手に出てたら、調子の乗りやがりくさって！ 何だその人を見下した態度は！ こっち見ろつつうのが聞こえてらっしゃらないのかよこのアマッ」

「お、落ち着けて！ 丈智！ 笹本が冷めたやつだってくらい知ってただろ！？」

騒がしいと思って顔を上げたら、般若かくやという顔をした須磨を志刀が羽交い絞めにして、額に汗掻きながら止めていた。血の気の多い連中だな……

「よく言うよ。小学生の時なんか、友達で集まって遊園地のお化け屋敷行ったら、男子たちが腰抜かす中を堂々と先頭歩いたりして……、あそこにスピーカがあるとか、鏡が張ってるとか、お勤めごころうさまってお化け役の人にあいさつしたりとか、余裕あったくせに」

「へえ、それはそれは……。なんかつか、想像ができるのが……うん……」

隣では隣で、勝手に昔話を暴露され、西貴が渋い顔になった。すごい温度差……ていうか、ひねてた頃の話はやめてくれ、恥ずかしいから。

私は溜め息に乗じて脳に酸素を送り、まじめな声で須磨に問いかける。

「だからな、何で私なんだって聞いてんだ、須磨。行くなら志刀や西貴とか、乗り気の奴だけ連れて行けばいいだろ？」

そして、不出来な結果に対する不完全燃焼も自分らで処理してくれ。

離してくれ。とすっかり冷めた様子の戻ったのを見て志刀が拘束を解く。須磨は軽く肩のコリをほぐすと、親指と薬指をフレームに

当て眼鏡の位置を直した。

薄っぺらい口から出てきたのは、やはりというべきか、傲慢な言い草だった。

「――ふん。だからさっきから言ってるだろ？　ボクらは、そこに怪奇がある、ただそれだけでその原因を調査・解明する義務を追っている」と

同じ理屈を繰り返す須磨の言葉を、私は遮った。

「そんな一般論っぽく着飾った理由はどうでもいい、と言っている」
レンズの反射で顔半分を隠していた須磨は、私の追及に言葉を失った。しんと静けさが広がっていく。私の周囲に集まった面子が、教室に残っていた生徒が啞然と息を潜めたかのように、冷たい風が胸の底をさらっていく。

夕焼けにやや遠い空は、ゆっくりと雲を流していった。

「――つく。何でもいいだろ」

突如として須磨は顔を窓の方にそらし、悔しそうにそれだけ言った。

その横顔に映るのは好奇心でも、憤怒でもなく。憤りというか、下げたくもない頭を下げるような何か。

何らかの事情を知ってるだろう志刀と西貴も、そんな須磨を見るだけで何も言わない。

駄目だな……と思いつつ、ついつい私は口を開いてしまう。

「……はあ。分かった」

左手に持っていたシャーペンを机に転がす。

「で？　何時に集まればいいんだ？」

隣で様子を見守っていた陽子が、くすぐったそうに目を細めていた。

集合は八時。須磨は低いトーンで告げた。

部下や先走り組（文化祭の準備）はもちろん、教師たちも帰った後の方がやりやすいからだとか。それについて私も異論を挟む気はなかった。

全員いったん家に帰り、夕飯や風呂まで普段どおり過ごした。

案の定、女二人には中学生のようなテンションで絡まれた。

「なにになにアキ、逢引？ 夜の街で家までお持ち帰りだったり！
？ うっわ先こされちゃった？ で、相手って、——ああっ、志刀君ね」

「おろおろろ、アキちゃんが知らないうちに遠くに」

姉さんや母さんは、二人ともせっかくの美形がふやけていた。

「あんたらは自分の娘をなんだと思ってるんだ……」

『可愛いオモチャ』

即答だった……やるせない。

それから友人と遊びにいくだけと説明するだけで、私はぐったりと疲れてしまった。

ダラダラテレビを見ていたら七時半くらいになって、そろそろかと腰を上げる。

二階に上がって私の部屋へ。風呂上りで着ていたパジャマを脱ぎ、簡素なTシャツを被る。下は少し考えて、結局大きめのパンツを穿く。夜も更けて肌寒そうだと思い一枚上に羽織った。

下に降りると姉さんが少し残念といった顔をした。ほっというて、と口には出さず、代わりに惘然とした声で、

「行ってきます」

と挨拶した。姉さんは残念がる表情のまま、私を見送る。

「いってらっしゃい」

呆れた声を背に受けて、私は家を出た。

私の家は、駅前から一本二本と裏道に入った所の住宅街にある。おかげで煌びやかな街の明かりとは縁遠く、真下を照らす街灯だけがわずかばかりの明るみを作るのみ。

「思いのほか寒いな……」

誰に言うでもなく呟いて、少し早足になって初めの突き当りを左へ折れていった。

学校までは大体一五分ほど。行き先は駅前の一歩手前という感じ。これが他の高校だったら更に駅まで行って、五分十分と電車に揺られ。という感じになっていたんだろう。電車のドアに寄りかかる自分を想像して、街灯で出来た自分の影が伸びた気がした。

学校に着いたのは十分前。白く浮かび上がった校舎の時計が合ってるのか怪しいが、多分大きな間違いはないだろう。

校舎が見えてきて、今更ながら門が閉まっている可能性が浮かんた。正門を乗り越えるか、それともグラウンドのフェンスを越えるか。どっちにしろ乗り越えるのかと、嫌気が差しながら正門まで歩いていく。

すると門は右側が開いているようだった。

「私が最後なのかもしれないな……」

集合は玄関前ということだったので、北棟の方に回る。

先に来ていたのは須磨と西貴。志刀の姿はと探していると、西貴がニヤついた様子でまだ来てないと告げた。

西貴は私の驚く顔を見て軽く笑ったが、須磨は開口一番『遅い』と激昂した。

西貴たちに陽子は来ない旨を話してうちにて志刀も来て、須磨は同じことを言った。こいつ、それを言うただけ一番に来たとかじゃないよな……シニカルに笑う須磨を見て、ひそかに眉を寄せる。

「これで全員だな」

四人集まったところで、黒いコートを羽織った須磨が切り出す。話は簡単だ。これから校舎に勝手に入って、二手に分かれて散策

した後、怪談についてつかめたことを報告しあう。それだけのことだ。

私は説明の虚ろに聞き流しながら長方の建物を見上げた。

暗がりに立ち並ぶ北棟の側面が、これから起こるそれらを明示するかのように不気味に切り取られていた――とは思えず。これからこの中を歩き回るのかと、今からやる気がそがれていった。

「あのさ……ひ、日野はこないのか？」

こわごわとした声が聞こえたと思ってみれば、近くで志刀が身を縮めていた。背後霊を探すように視線を右往左往させる。そういえば志刀には言っていなかったな。

「ああ」

陽子は中学も一緒だったし、家の位置も比較的近く、そのため一緒に帰ることも多い。

今日も学祭が近いのだ、体育会で私の有志が見られるのだ、そんな話をしながら帰っていると陽子の携帯が鳴った。最近ぱっと出てきて、もう聞かなくなったラブソング。

『とう、さま？』

相手は躁太さんらしい。呆れた顔で笑う私の手前、陽子は渋い顔で携帯を開く。

最初は声を低くしていた陽子も、話が進むうちに目を大きくして、それから弾む声で笑っていた。

『なんだか父様が帰ってくるみたい。無理を押して残業だけは避けたんって』

夕飯だけでも一緒に、という愛情の深さに私は素直に良かったなと安堵を漏らした。

陽子は躁太さんとこの集まりを天秤にかけて悩んだが、私が、

『せっかくだから躁太さんに甘えてやれ』

って言ったら、後髪を引かれるような顔をしたが、

『うんわかった、今回はパスする』

最後にふっくらとした口元は、残念、とからかうように言った。

そんな説明をしてやると、志刀は重々しい溜め息を漏らした。やつれた感じの表情で、顔色もそれほどよくはなく。それでも疲れを隠すように苦笑した。

放課後の時は何でもなかったのに……夜の学校はそんなに怖いのだろうか。だったら、陽子の伝言は言わない方がいいかもな。

『そうだアキ、志刀君に伝えといてね?』

夕日前の、赤黒い空を背にして、

『私は、行けないから』

志刀に忠告を残す陽子の目は、決して父の帰宅に浮かれてはいなかった。

「笹本、その格好じゃあ寒いだろ。家に戻って、上着を着てきた方が良くないか? 俺らは家まで距離あるし、何なら自転車貸してやろうか?」

私が自分の腕を抱いていると、須磨を打ち合わせをしていた西貴が近づいてきた。

西貴の格好はジーンズに、ボコボコとしたこげ茶色のジャケット。ジャケットの袖が短く見えるのは、そういうデザインなのか、単純にこいつの背が高いのか。どちらにしろ、少し大げさな感じがした。「大丈夫だよ。私は基本心が冷め切ってるから、体表面はあったかいんだ」

ほら証拠に。と私は左手を差し向けた。

西貴は私の手を取ってみて、それから納得したように頷いた。頷かれると少し複雑な気分だ……

「それで、予定は決まったのか?」

「ああ、だいたいな」

首をかしげると、西貴はいつもの笑みを浮かべた。

それから二つの懐中電灯と、四つ折りの紙を手渡される。……紙

? 何を書いてあるんだ、と疑問に思いつつ紙を開いた。

紙は全部で三枚あって、書かれていたのは――建物の絵、……見取り図か?

「上から順番に北棟、中央棟、南棟。で、赤で塗ってあるところが怪談の的になってる場所。怪談は裏庭のやつもあるけど、それは夏休み同様、無視の方向で。俺と須磨は南から回るから、笹本は歩を連れて北から回ってくれ」

「ああ……て、ちょっと待て。このチェックポイント、南の方が多くないか？　これだと、例の『クロハネ』を回るのは……私たちに……」

もしかしくなくても私に押しつける気だと気付いて、西貴が歩いてきた方向を睨む。

「須磨、お前発信のくせして、どうしてお前自身が回らないんだ？」
私は無駄だと思いながら須磨に聞いたです。

「ふん。その理由はすでに言ったはずだ。やはり、日野君の方が物分りがいい」

やはりというべきか、返ってきたのはトゲのある言い草で、肩を透かす須磨のコート姿があった。

「ボクが行っても仕方がないだろう？　ボクはどうしても怪奇現象に偏った見方をする。冷静な解釈をするために、君を呼んだのだからな」

嫌味っぽく唇を歪めながら、芸もなく同じ言い訳を言う。こいつは何も言う気がないらしい。今もこうして私を逆なでする。そんな安い挑発に私が乗るとでも思ってるのだろうか。

私は臆面なく意地を貫く姿に嘆息し、話題を変えることにした。
「それで、これからどうすんだ？　横に回って、渡り廊下から入って、……けど、さすがに校舎へ入るドアや、教室の鍵は掛かってるだろ」

すると、須磨は眼鏡の奥に嫌味な色をたたえて、優越感を滲ませるように鼻で笑った。

「当然、正面から入るに決まってる」

須磨が手を持ち上げると、甲高い、金属が擦れる音が付随する。昇降口のガラス戸を慣れた手つきで開け、にやりとほくそえんで

振り返る。

今、理解した。こいつ、常習犯だ。

「さあ、これが北側の鍵だ。いったん職員室に行って、教師がいなか確かめる。それから別行動だっ、いいな！」

眼鏡が白く浮かび上がるほど張り切る須磨に続きながら、後で没収だなど冷たく目を伏せた。

月明かりはなく、懐中電灯の頼りない円に照らされるしかない廊下。

昼間の喧騒が脳に焼きつく分、冷たく闇へ延びる一本道が、不可視の寒気を髣髴とさせる。今この空間には、雨の日のように二人の上履きがキュツキュと音を響かせる――

……なんて、脳内で勝手に盛り上げてみたが。やっぱり私には、校舎は校舎にしか見えない。無機質に並ぶ教室なんて、そろそろ見飽きてきたものだ。

そんなすすんでいる私とは対照的に、志刀はそわそわと落ち着きがなかった。

「夏の時にも思わなかったけど、夜の学校って結構雰囲気ないか？」
頼りない光に劣らず情けない志刀の声。

「それは夏とは違って肌寒いからだ。肌が感じる寒さを、霊的な寒気を混同してる証拠。そのせいで、周囲の暗闇も意味あり気に見える。幽霊屋敷とかだって、まずは設定とかその場の雰囲気作りから入るだろ？ それと同じ」

私は呆れたふうに言ったものだ。顔を見てないから正確には解らないが、隣からいくばくか緊張が抜けたようだった。

喉の奥で笑うような声が廊下に追加されて、暗闇も少しは薄くなった気がした。

「じゃ、いっちょいきますかっ、なっ？」

「ああ、さっさと終わらせて、帰って寝る」

無駄に勢いをつけて、私たちが回るのは北棟の二つと、例の『クロハネ』。

手始めに四階美術準備室の『腕を食いちぎる真実の口』、そして二階空き教室の『午後九時の会議』を回ることにした。

結論から言えば、どちらとも収穫と呼べるものは一切なかった。

強いてあげるならば、鍵が多すぎて探すのが面倒だったことと、二つ目の空き教室に入った瞬間、奇怪な文様の入った寝袋が所狭しにあって言葉を失ったくらいだろうか。

某地上絵やピラミッド、幾何学模様、そんなものどこで売ってんだと溜め息も出ない。

自己主張極まりないそれらを、私は無言で窓から捨てた。全部。背後では、志刀が生霊でも見てしまったかのように顔色が闇に溶け込んでいた。

そして今は北棟から中央棟に向かう最中だ。

「はあ、やっぱろくなものないなあ。知れば知るほど、興ざめって言うか、何つうんだっけ、こういうの」

目が暗闇に慣れてきたのか、懐中電灯もつけず志刀が廊下を先行する。さっきまでは微妙な距離をとっていたというのに、それも今はいつもにも増して近かった。

「それよか、『お前も手伝え』って冷めた感じで命令した——い、いやなんでもないです、はいっ」

こいつの中での私の性別は、果たしてどっちなんだろうか。考えてみると、気が楽なような重たいような……よく判らない。

「幽霊の正体見たり、枯れ尾花……だったか」

私がそんなことわざを引き出すと、志刀は『そんな言い方があったんだな』とか、子供みたいに笑っていた。あまりにもものんきな態度に、さっきまでのびびりはなんだったんだと鼻を鳴らした。

そんな不遜な態度に出る私にも、志刀は笑みを絶やさない。

「けど、意外だったよ。笹本が参加してくるなんてさ。俺や宗治はなんだかんだ言ってお人よしっつか、ノリがいい方だから解るけどよー、笹本って目立つのが嫌いっつか、人の事どうでもいいって感じに見えるしさ」

無邪気な笑い声に乗せて、志刀が今更のようにぼやく。志刀たちの方から誘ってきたってくせに、ひどい言われようだ。

「何だ、不服か？」

私が険悪に睨みあげても、志刀の笑顔は崩れない。それどころか、わざとらしく視線を外すような、からかう余裕まであって、いまいち張り合いがなかった。

そのうち一人で鼻歌を歌い始めて、もう勝手にしろと私は窓の方に視線を向けた。

時々澄んだ風が葉音を響かせるのに、肝心の木々は闇に同化して、目を凝らさなければ見分けることが出来ない。まるで私たちの方が、ぼつんと取り残されたような気分になって。景色はどこまでも一色で。けど、こんな？見えないもの？が不安を煽るなんて、理解できない。

自分を取り残されて怖いのは、変化が見えてしまうから。いつも見ていたはずの景色が、突然――

「そういえばさ、」

沈みかけた思考を、志刀の間延びした声が救い上げた。ほんと……、どうして無意識な時だけ、タイミングがいい奴なんだ。

「なに？」

薄闇で表情まで見えないと思いながら、顔を背けたままで聞き返した。

「ほんとに今更で……、でもまあ、こんな機会でもないと思う機会がねえって思うんだけどさ」

志刀はやたらと歯切れが悪かった。態度は曖昧で、不透明。次の言葉を言ってしまうえば私が傷つくとも思っているのだろうか。

私の中の何かが、その暗さを増した。二人の距離が暗闇のせいではつかめない。

けど次の瞬間、その感傷が勘違いだと気付かされた。

「お前ってさ、何でそんな男口調なんだ？」

志刀は気まずそうに顔を歪めて、そんなくだらないことを聞いてきた。

私は思わず噴き出して。久方ぶりに声を出した笑いは、さすがにしく闇を晴らしていった。

「んなに笑うことかよ！ お、俺は、何つうか、深い訳とかあるんじゃないかってきいつかって、だってさ……お前、——のにさ」

「はは、悪いって」

謝りながら、目元の拭う。息を整えると、それこそ肩に背負っていたものが羽を生やして飛んでいったように思えた。

「深刻ぶって何を言うかと思ってさ……志刀には言ってなかったんだなーって。そう考えるとなんか笑えてきて、くふふ……」

もう半年は付き合っているというのにな。と、また笑う。私の口調の事なんて、陽子は当然として、命斗も西貴も百合香も、何なら須磨だって知ってるはずだ。

志刀が半ば本気で怒ったように睨んできて、私は視線を外しながら笑いの潮が引くのを待った。

別に愉快なものでもないが、散策にも飽きたことだし、丁度いいか。

「あまり面白いものじゃあないぞ」

そう前置きすると、目の前の顔からおふざけの色が消えた。表情を引き締めた志刀が瞳の中に映りこんで、私も笑みを苦笑の形に変えた。

「昔さ——といっても小学生の時だけどさ」

また小学生かと思つて、苦笑が深くなつた。今思い出しても笑えない。

それでも志刀は目に強い光を灯していて。頬を引き締めたまっすぐすぎる表情に、私の頬が不思議と緩んでいった。

「そのころさ、私は自分に向けられる『可愛い』って褒め言葉が、どうにも信じられなかったんだ」

うちにはすでに『可愛い』と呼ばれる人たちがいた。童顔で、私とさえ姉妹に見られる母と、中学の頃からドクモの勧誘やスカウトを、月に十数回は断つていた姉。

二人とも、系統が違ふとはいえ非の打ち所のない美人だ。そんな人たちの身近にいて、自分の容姿に自身を持てるやつがいたらすごいと思う。

……実際私は、自分が『可愛い』なんて思えなかった。

「小学生とはいえさ、周囲の大人の反応って敏感だったんだよ。口そろえて『可愛い』なんていうけど、それってほんとに私を見てるのか、てな感じに考えてた。子供だから可愛いってってるのかとか、隣にいる姉や、いつまでも若い母さんの面影を、ありもしない私の中に見てるんじゃないかって、私は卑屈に思うようになったんだ」

ある意味、この時すでに、『自分の目に映らないもの』を信じてなかったのかもしれない。

私はまず髪を切った。背中に伸びた黒髪は、姉の小さい頃に似ていたから。

でも駄目だった。『長い髪も可愛かったのにね』と子供のいたずらを見るような目で言われた。

次に言葉遣いを変えた。クラスメイトの男子とつるむようにして、態度も性格も、ざっくりとしたものにした。もともとずぼらな私に

は気が楽だったが、——これも駄目。

他にもいろいろした。目つきを鋭くしたり、母が買ってくる可愛い服を全部捨てたり、見せ付けるように傷をつけたり泥だらけにしたり……ほんと子供っぽい反抗期だ。

けど、そこまで徹底すれば少しは効果もあった。

隣近所の奥様たちも、学校の先生も、『私がぐれた』とか『気が変になった』とか噂して、将来を心配するようになった。私を露骨に避けて、自分のとこの子供が同じようにならないかと陰口を漏らすようにもなった。

いつだったか、リビングのテーブルに病院の案内状が置きっぱなしになってるのを見て、私の中のむなしさはさらに深くなった。

「でも結局さ。無駄だった。私のやってたこと全部、無駄」

私は、純粹に私を見てほしかっただけ。そのせいで懷疑心が抑えきれなくなつて、周囲の大人たちに反抗したつてだけの、本当につまらない話。

「だってさ、そんな存在って案外近くにいるもんだ。クラスの友達や、それこそ母さんや姉さん。みんな、私が無理して自分を変えようとしても、以前と変わらなかった。またバカやってんなって、軽く笑い飛ばして。今日は何して遊ぶかなんてしゃべりあって……なんかさ、ほんと、馬鹿らしくなった」

姉さんは私が雑に切った髪を、手が掛かる子ねとぼやきながらそろえてくれた。母さんなんか、自分の娘が精神障害者扱いされたのに、『お医者さん紹介されちゃったっ』って。まるでお見合い相手でも紹介されたみたいになつてた。

「家族や友達も、誰も私が悪いと責めたりしなかった。勝手にやきもち焼いて、癪癪おこしてたっていうのにな。むしろ『今度は何するんだ』、って、笑いながら訊かれたよ」

本当に見かえしたかった二人の態度が変わらなくて。無理して反抗するのはもう止めた。

「だってさ、そんなことしなくたって、私を認めてくれるやつらが

いるから」

無性に鼻の頭が痒くなって、照れ隠しに笑った。

つい最近まで、そんな自分の根幹にあった当たり前を忘れていた。気付かせてくれたのは、……言うまでもないことだ。

「おかげ様で、男扱いも女扱いも受けるようになって。言葉遣いや目つきの悪さも残ってこの有様。性格は……多分、素でこんななんだろうと思う。くふ、笑えるでしょ？」

私は最後に、自分に呆れるよう弱く笑った。

「笑わねえ」

けれど志刀は私を一途に見つめて、重々しい声で一蹴した。体の心からあふれるような強い光に、私は彼の精悍な顔を啞然と見つめていた。

二年前、夕焼けと暗闇の境目から連れ出した陽子の、冷たくこわばった手のように。志刀の瞳はまっすぐ私の中心をうがっていた。

その視線が——赤くなって逸れた。

「な、なんつうかさ……笑えねえよ。笹本は笹本だし。た、確かに小学生が何言っちゃってんだって思うし……、けどそんなこといったら俺なんか毎日ボール蹴ってればいいなんて、のんきなもんだっ
たし……。だ、だから……、笹本はバカじゃあねえって言うか、可愛いだけじゃないというか」

目の前にあったのはいつも通りの、しどろもどろな情けない顔で相変わらず、何が言いたいのか要領は得ないのに、思いが伝わるというか。安堵が心に響いてくる。

私は今度こそ、素直に笑みを浮かべた。

「ありがとう」

お、おう。と志刀はこっちも見ずに頷いていた。

細めた目に映るのは、耳まで赤くなっただけ志刀と、廊下の先に黒く浮かぶ——

「——悪い、志刀っ。先に行くっ」

言うより早く、私は志刀を押しつけて走り出した。

向かうのは中央棟。手に持っていたものがいつの間にか離れていき、床を打つ反響が背後に聞こえた。

「お、おい、どこ行くんだ！ そっちにな——」

声が聞こえたが、頭には入ってこなかった。

前にも後ろにも闇が満ち、自分の足音だけが不気味に私を包み込む。

「一瞬だけ、っ……見えた」

白い側面しか見えない校舎の内側、闇でさえ同化できない深い闇色。中央棟の端——そこあるのは第三倉庫！

息が乱れる。高まる緊張と、荒い息が全くかみ合わない。無酸素状態の脳が焦りばかりを募らせる。廊下の端まで走って、壁に手を当てながらどうにか体重を支える。

「ど、こ……、いな、い……のか、」

上下に伸びる階段があるが、誰もいない。異常なほどの汗が額と滴り、けど体を沸騰させるほどの熱が一向に冷めなかった。周囲の闇が、刃のように私の皮膚に突き刺さる。

下と上。先を見えないほど深い黒。視界に靄が掛かる。わいわいとした話し声。楽しい余韻を残した夕暮れの山道——何度空気を吸っても、私の中に吸収されない。

自分の意識が遠のいた。ふらふらと感覚が浮遊して、上下が反転

「笹本！！」

「————っ」

闇に飲み込まれる寸前だった。私を呼ぶ声がして、私はとつさに壁に手を付いた。膝が嫌な音を発したが、どうにか傾ぐ体の勢いは止まった。

「どうしたんだ！ いきなり走り出したと思ったら、ふらふらと倒

れそうに――て、顔色真っ青じゃねえか！　ほら俺の肩使えっ、それよりどっかで休んだ方が……」

矢継ぎ早に氣遣う声をかけてくる。それが志刀だと気付くのに数秒掛かった。

意識はまだ体に定着してなくて、相変わらず吸った空気は私に届かない。けど、志刀の不安げにゆがんだ顔を見て、私は無理に笑みの形を作った。

「だい、丈夫だ。少しめまいがしただけで、これくらい少し休めば」「大丈夫なわけねえだろっ！！！！」

「ひう――」

志刀の怒気は空気を振動させた。私を支えていたものまで吹き飛ばして。身は縮こまり、両膝は笑い出す。もう無理だと全身が訴えてくる。声すら出すことができなかった。

涙で濡れた瞳で、こわごとと志刀の顔をうかがった。けどすぐにそらしてしまう。

志刀は本気で怒っていた。切れ長の目を吊り上げて、奥歯を万力で噛み締めながら、強健のような表情で私を睨んでいた。

「――」

そして、私の顔を認めた瞬間、そらされた。

それを、私は知っている。中学の頃、私を侮蔑するクラスメイトに牙をむいた陽子と同じ。自業自得だと諦める私のことを思って、心がささくれても止められない熱さ。

傷口のように熱くなって、痛い。私がまた、傷つけてしまった……私が、またっ。

「……悪い、怒鳴るつもりは……なかったんだ。俺はただっ、笹本の様子が心配でっ。……いきなり飛び出した時も張り詰めた顔だったし、追いついてみたら階段の方をうつろに見つめて、顔色もおかしかったし、そしたら急に倒れて……」

志刀の声が急速に冷めていく。しゅんと俯きながら、高まった熱の断片を涼出で握りつぶして。――私の小さな胸が締め付けられる。

「悪いのは、私だ。お前が謝ることじゃない」
相手の顔をまともに見ることすら出来ない。

「……心配してくれてありがとな、志刀」

ありきたりな言葉しか私には思いつかなくて、それでも、それしか言える言葉がなくて。せめて相手の思いに報いるよう、精一杯の気持ちを込めて志刀にぶつけた。

「な——ば、バカ、んな今にも泣きそうな顔であやまんなよ。俺は友人として心配したってだけで、そんなの当然ていうか……なんつうか………だーっつ、なんか、泣きそうなやつの方が大人びてるのがむかつく」

照れ隠しのように声を荒げて、こんな時まで素直じゃない志刀。

私は胸の奥に染み入る暖かさに、『ありがとう』と繰り返した。

「はは、ごめん」

「お、おう。……はああ。とりあえず散策は中止だな。……悪かったな、変な思いさせて。丈智には俺から言っておく……実は言うとお前を誘ったのって俺らが言い出したんだ。だったら笹本を呼んだらいんじゃないかねえかって。あいつはそんなこと頼めるかってつっぱねただけど、そこを半ば強引にな」

須磨が下げたくもない頭を下げた理由は、志刀と西貴の推薦だったのか。けど、それを聞いて余計に解らなくなる。何で私だったんだってことが、だ。

須磨は調査だと言い張り、切り出した背景を話す気はない様子だった。義理の厚い志刀に訊いても無駄だろう。

歩けるか、とそっと私の腕を包み込む手は、滲む汗の不快さが気にならないほど。

……暖かった。

志刀は結局何も聞かなかった。怒鳴り声を聞きつけた須磨や西貴にも、

「怖かったんだよ、ほっとけ！」

と乱暴に言い張った。

それから志刀が須磨に詰め寄って、どうやら何か話とまとめたらしい。須磨も苦い顔をしていたから、あいつ自身、何も収穫がなかったのかもしれない。

お互いに収穫もなく。ただ歩き回って疲れただけの、捨てられてたゴミが腐って臭いが異次元だったのだ。ただの愚痴大会となりかけた帰り道。

駅の方角に向かう三人から離れる私に、志刀が追従してきた。

「送ってく」

無然とも神妙とも聞こえる声でそれだけ言って、私たちは西貴たちと別れた。

帰る道すがらは、行きよりも闇が深く。無駄に澄んだ空気のおかげで、星明かりがまぶしいくらいだった。

無言で無音。志刀は上着のポケットに手を突っ込み、私は俯いて自分の影を追っていた。

「『クロハネ』の被害者ってさ、丈智の知り合いだったんだよ」

やがてぽてっと落ちた志刀の声は、夜の風より無機質だった。

「一年先輩で、丈智の幼馴染の女子。なんつうか、とろいっていうが不器用で、その癖責任感が強すぎて、丈智もいつか失敗するんじゃないかって気が気じゃなかったとか」

何の話だよ。私は暗い瞳で隣を見つめた。けどそこに志刀の目はなくて、彼はそのまま続けた。しばらく考えて、それが私を誘った理由につながるんだと気付いた。

「彼女、その日は学祭の時に着る衣装のサンプル作ってて、あれこ

れやってるうちに布もなくなっただとさ。――で、部活で毎晩のように居残ってた丈智のどこに来て、？第三？の合鍵を借りたんだ。あそこならあまった布切れの一つや二つはあるだろうからって」

シヤリ。ポケットに突っ込んだ鍵が、自己主張するように鳴った気がした。須磨から没収した鍵だ。その彼女とやらも、須磨にこれを借りに来た。そして――

「『クロハネ』に襲われた」

感情もなく志刀は言い切った。私は無意識のうちに鍵をボトムの上から握り締めていた。

「なんでも黒く長い髪に病氣的なほど白い顔した女だったらしい。長い髪を乱暴に振り回し、だらりとたれた手にカッター持って、『お前のせいだ』って奇声を上げて彼女に襲い掛かってきた。……彼女も逃げたけど、途中でこけて追いつかれて……」

手に持っていたカッターで切りつけられた。

まあ、たまたま通りかかった白為会長が一喝したおかげで、どうにか太ももを軽く切るぐらいですんだらしいけど。と志刀は、やるせないといった感じで付け足した。

……たまたま、……ね。私は急にきな臭いものを感じて、顔を顰める。

志刀の独白のような一人事が続く。

「んで、六組の黒羽がまんま『クロハネ』って噂が――」

不意に出てきた単語に私は奥歯を噛んだ。

……黒羽。その名前が志刀の口から出てきたことが妙に悲しかった。

「俺はんなこと、これっぽっちも信じちゃいねえけど。俺はあいつを嫌いになれるほど、あいつのことしらねえし」

「え？」

驚いて見上げた私に、志刀は困ったように鼻を掻いて。

「は、話戻すけどよ。俺はさ、周囲から見て感じワリイからって、その先を見ようとしなのが納得いかねってか……言えない、って

理由とかあるんなら、俺はそいつが言い出すまで待っていてえの……だから黒羽のことを悪く言うの——て、違うからな。俺は別に黒羽が好きとかじゃなくてだな、ただ人として、あのな！」

いきなり志刀があせったように顔を近づけた。

「っぷ、ははっ」

不細工に否定する志刀の姿に、不謹慎にも私は少し笑ってしまった。志刀も、つりあがっていた目元をわずかに緩める。それから落ち着いた声で、話を戻した。

「けどもし仮に、黒羽が『クロハネ』だって言うんだったら、きつと笹本なら穩便に済ませられるんじゃないかって思ってた……さ。その、あれだ、入学式の時にお前がいきなり黒羽に話しかけたって聞いたことあったし、白為会長や百合香みたいな一癖者と気取りなく話せてるの、お前くらいだし……その辺、信頼してっから。それにっ……お前と黒羽って、なんかる、類ともみないな、感じな気がして……それで、丈智に話を聞いた時に笹本を誘ったんだ」

不意に聞かされた理由。胸を動かされるとともに、冷たく貫かれる。まるであの時見た黒い羽を、遠回りに肯定された気がしたから。「……丈智はさ、ただけじめをつけたかっただけなんだと思う。何も出来なかった自分が許せなくて、せめて彼女を切りつけた子に、……素直に謝ってほしいってさ。だから」

志刀が振り返る気配。私も引かれるように志刀を見上げた。

「——悪いのは、俺なんだ」

決意をたたえた瞳。長い前髪が月明かりに照らされて儚さを増した表情。

「いや、お前は、」

——悪くない。ととっさに否定して、けど言うことは出来なかった。それが自分の荷を軽くするためだけの、表面的な慰めでしかない。と私は思うから。

言葉が喉の奥に詰まって、悔しい思いが募る。志刀は表情一つ変えず、私の返答を待つ。

「――あ、――っ――」

何か言おうとして、結局一步引いてしまう。

慰めも同情も言えない、惨めに俯く頭にそっと手が置かれた。撫でるでもなく、ぽんぽんと叩くでもなく。優しく触れるように志刀の温もりが、冷え切った髪に伝わってきた。

それから志刀は、黒色が占める空を見上げ、まるで水面に映つても取れない月への憧れに、区切りをつけるかのように口を開いた。

「……まったく、何で俺の周囲には、言っちゃえば楽なことを黙り込むやつが多いのかね――ほんと。……けどまつ、知っちゃったからには、俺には無視できねえの。性格上」

からからと肩をすくめながら笑う志刀を見上げ、ようやく声が形になった。

「難儀な、……性格、だな……」

ようやく出てきた嫌味に。お前がな。と呆れたように笑われた。

志刀はどこまでもまっすぐで、私はどこまでも内側に渦巻いている。

本来なら、どうあっても交わることのない二人――、っ。私は一瞬にして表情が凍った。志刀にばれないよう、最低限に視線移動で自分の体を見回す。

そして、暗闇に映える白い羽根がないことに安堵してしまった。

「今日は悪かった。また学校で」

さよならと告げる志刀の声。見上げた時には背中を向けていた。振り返ることもなく、まるで今日はここまでと割り切ったようにあっさりと帰っていく。

私は、私の周囲に残る温もりの中で立ちつくしていた。

「私はまた、……何も言えない」

哀愁に尾を引かれながら踵を返す。家まではまだ距離がある。

家の門が見えてきても、私は振り返らなかった。

この温もりが、白い羽根が見せた幻想だと知るのが怖いから。

家に帰ってきて。母さんと姉さんというヤジ馬に最後の気力も奪われて。私は久しぶりに、二年前の事故を夢に見てしまった。
今の歪んだ私になった、始まりの日の夢を。

3-5 (後書き)

これにて第三章が終わりです。

葵は本当に？クロハネ？なのか！！

第四章に続く。。

——バスが転落した。

一瞬体が浮かび、すぐに重力が戻ってくる。重力と浮力の間に押しつぶされながら、上下は何度も入れ替わり、あちこちと体をぶつけるうちに意識も失った。

けど私の意識は急に覚醒した。車内を埋め尽くしていた阿鼻叫喚が止み、代わりにまとわりつくような生温かい闇に包まれていて。

その中に赤と白と……茶色と、黄色と、何かと何かと……

なに、……これ。理解が追いつかない——いや、理解したくない！けど、徐々に薄闇に慣れてきた目は、はっきりとそれらがなんであるかを理解した。

力の抜けた腕、骨がむき出しの何かっ。きれいなピンク色がどす黒い油で淀んでいて。人の皮膚を焼いたようなひどい臭いに、むせかえり胃の中のものがこみあげる。

えずく私の後ろから何か頬に触れた。陶器のように冷たい手が、顔を両側から押さえ、視線を目の前の惨状からそらせないようにする。私はなすすべなく、それらを見つめるしかない。

いや、見たくない！……いやっ。違う！私は何もしてな——

『私には白い羽根が見える』

雪を思わせる、もろくも冷たい少女の声が響いて、首筋に冷たいものが走る。目をつぶり視覚からの情報はなくなったが、腕や足へと触れる生温かく、ぬめりけのある何かの感触が生々しく這い上がってくる。

こわごとと目を開けて、私はそれを直視してしまった。

私の周囲を囲み、まるで生存者にたかるゾンビのようにはいつくばる、乗客だった者たちを。肉の断面があらわになり、折れた腕の骨を杖みたいにして、ゆっくり、ゆっくりと私の体を上ってくる。皮膚の半分がただれ、むき出しになった目玉が、私を見て笑ってい

た。

私は動けなかった。足がすくんで、背筋が泡立って。ただ腐臭漂う吐息が近づいてくるのを、身を縮めて耐えるしかなかった。

そして、わずかな逃げ道さえ奪うように、背中をやわらかいものが包んだ。

【――許さない――】

耳元でささやかれた声。小刻みに揺れる視線を向けると、雪のような肌や、闇よりも暗い髪まで血で染めた葵と目があった。葵は光の消えた目で、私ではなく、もっと左、……下を見ていた。

私はその視線を目で追って、震えながら左手を持ちあげた。妙に柔らない物が零れ落ちていき、滴れ落ちる血の中から黒い羽根が現れた。

血のりを押し固めたように黒い羽根は、しかし灰のようにもろく崩れていく。

はっとなって私は顔を正面に向ける。葵は、いつの間にか人垣の向こうにいて。鉤物的な瞳で、私を見下ろしていた。

【ワタシハ、オマエヲ、ユルサナイ】

まわりつく生温かさで私の全身は覆われた。

朝……。私は洗面台の鏡に立って、思わず笑ってしまった。振り返っても鏡はなかった。

唇は青く萎んでいて、三日吐き続けたように頬がこけている。汗で張り付いた髪が余計に歪な形を作っていた。クマで青黒く落ち窪んだ目元も、乾いた土のような肌も、自殺した少女のようである。

「はは、人相ってここまで変わるんだ、あはは」

呆れてるのに、目の前の少女はてんで笑わない。乾いた笑い声もすぐに萎んでいった。

「はは、……は、…………。……ほんと、どこの三流ホラーだよ……」

夢の内容を思い出して、胸の辺りを握り締めた。体が、……痙攣するように震えた。

二年前の事故のことは……正直ぼんやりとしか覚えていない。葵が無言でバスを降りてからは、日中の疲れからうとうとしてて、気付いた時には地面の上だった。周囲には木が生い茂っていて、雑草交じりの地面が硬くて冷たくて。そのくせ、下になってる部分がじんわりと熱い。とにかく全身がけだるくて、冬場の寝起きみたいに現実がぼんやりとしていた。

どこからか、うめき声が聞こえた。同じように投げ出された母親らしき人が、動かない子供を抱いて何事か嘆いている。かろうじて動ける人が、自分も血だらけだというのに、他のけが人を励ましていた。

私も……何かするべきだろうか。そう考えて、けど意識とは裏腹に手足がてことして動かない。

そんな折に黒い羽根を見つけたのだ。伸びていた腕の先、少し指を動かせば触れられそうな位置に、暗闇に溶けることない黒い羽根があった。

その羽根に、悲しげな瞳をした葵の姿が重なった。私は半ば反射的に羽根に手を伸ばし、羽根は触れる前に灰のように散っていった。葵の愁い顔も一緒になって消えた。

その光景を見た瞬間、『ああ、このまま死ぬんだな』と思った。

聞こえていた声が、見えていた母親が急に遠くなった。私は多分……最後まで苦笑を浮かべていた。

「『私は、それを黒く墮とさないといけないから』……だったか……」

現在の私が、葵の言葉を反芻する。あの時私は、どうして葵が今にも泣きそうな顔で、辛い役目のことを言ったのか、本当に理解しなかった。

「幸せの後には不運がやってきて、人が味わえる幸せの量は決まっている。幸せとは山を登るようなものだから、いつかは力尽きるし、……上った後は……ひたすらに下っていくしかない……だったかな」

昔読んだ本の内容だ。今の私なら、筆者の絶望も理解できる気がする。

この世界には三種類の役目がある。幸せを呼ぶ天使と、不幸を招く死神と、そして――

「……………忘れた……」

ふと出てきた一文を、けれど私は頭を振って消す。

私は幸せだった。自分を認めてくれる、？笹本秋？としてみられる人たちに恵まれていた私は、平凡な？イマ？以上の幸せはなかった。それがいつの間にか当然になって、いつからか奇跡になっていたことに気付くことが出来なかった。私は無心で坂道を駆け上っていた。

「葵はどんな気持ちで、私の羽根を見ていたんだろう……な」

何も知らず自分の話を聞いている相手を、のんきにうとうとする女子中学生を、これから墮とす相手としての私を、……葵はどんな思いで見えていたのだろう。

私は一生分の幸せをすでに享受していたのだ。葵がそれを知覚で

きていたかまでは判らないけど、私の身に何かしらの不運が起くる事は嫌ほど解っていた。もしかしたら、もう二度と会う気もなかったのかもしれない。自分の役目を語ったのも、警告のためだったのかもしれない。

走馬灯のような思考が駆け抜けて、私は、せめても、他の人の命が救われることを祈った。乗客も、葵も、私に巻き込まれたただけだ。私は……十分に幸せだった。未練もない。

けど、神ってやつはどこまでも残酷だった。

「ほんと………、なんで、………いきて、んだろな……」

人の気配が、深い闇と油の匂いに飲み込まれていく。静寂に包まれそうな中で、助けてを呼び続ける声は多かった。待てど待てど来ない救助の手を、生にしがみついて、必死に手を伸ばす人たちはいた。徐々に弱くなるそれらを見捨てて――その全ての始まりを作った私だけが、すぐに生きることをあきらめた私が、生きている。

「………私が、……私がっ」

胸を力いっぱい握り締める。喉が締め付けられて、呼吸が乱れだす。

私のせいで二十人以上が死んだ。なのに私を責める声はない。マスコミや遺族や専門家は、対応の遅れた救助隊やバス会社を責め立てた。家族を返せと喚き散らし、葬式に参列した私には同情や哀れみを向けて。家族の死を背負って生きてくれと願う人もいた。

誰も知らない。誰にも見えない。白い羽根も黒い羽根も、そこら中に溢れてて、なのに平気な顔して笑ったり、怒ったり、泣いたり、悲しんだり……。

私には、？イマ？がとてつもなく歪に見えた。

鏡に映る顔は、肉をそぎ落としたようにやつれていた。口の端がだらしなく引きつっている。

「……はは。ははは、駄目……だな。また、姉さんや陽子を泣かせてしまう……」

目の前にいたのは、二年前となんら代わりのない私の姿だった。

蛇口を捻り、何度も水を顔にこすり付けて、どうにか赤みだけを取り戻す。それから、母さんたちが起きてくる前に家を出た。ドアを開けた途端にあふれ出す朝日が妙にまぶしく、朝の冴えきった空気が痛いくらいだった。

自分を影を追うようにして歩いていると、最初の曲がり角の辺りで、思いつきり背中と叩かれた。反応が遅れてる間に弾むような陽子の声が聞こえた。

「おっはよ、アキ！ って、どうしたの、アキっ？ 顔色悪いよ？ 夜、眠れなかったの？ うわっ、目なんて両目とも真っ赤じゃない！ 何があったの、昨日のことっ、私の忠告無視した志刀くんに襲われたとか!？」

陽子は矢継ぎ早に言って私の頬をはさむ。心配そうに見つめてきた。

「……………何もないし、志刀にそんな度胸もない」

陽子の勢いに押されながらも、私は力なく首を振った。

「ただ……、肌寒い風が少し目にしみただけ」

自分の腕を抱き寄せながら、風に身が凍えたようにふるまった。

陽子は頬に触れていた手を離し、少し距離を置いてうつむいた。

「ふーん。そっか、……うん、そう。今日は冷え込んでるもんねっ」

陽子は蠟燭の火のように萎んでいく声を、どうにか最後だけ明るくする。

今朝の夢のせいもあって、はにかむ陽子が泣いているように見えた。私の思い込みや身勝手に傷つけて、揺れる瞳で私を心配そうに見つめていた二年前。私は苦い気持ちになって、陽子から視線を外した。

まもなく、人の温もりをやけに近くから感じた。驚いて視線を向けたら、陽子が自分の頭を私の胸のあたりにつけ、身を寄せていた。「……なに、やってんだ」

「アキで暖をとってるのっ。だって、代謝のいいアキが寒いっていうんだもの。だから、じょーじんの代謝たる私は、カイロの代わり

にこうしてアキにくつついてるの！ は〜あったか〜い」

頬をゆるめるような声で言うので、私は目を丸くした。

けど、陽子はそれさえお見通しというふうに、急に冷め切った声で続ける。

「アキの心が冷たい間は、……何も聞かないよ。けど、ほっときもないって、あの時誓ったから。誰がアキを否定しようとも、アキのやってることが間違っても、私はこうして、アキのそばを離れない」

心がささくれるような激しい熱さじゃなく、音もなく燃え続ける想い。

「アキが拒絶したって、もう二度と離れてやんない。……これは、私の決意だから」

あの事故から、私はただただ自分の幸せが怖かった。怪我や後遺症を氣遣う声を、慰めてくれるのクラスメイトを、私はことごとく拒絶していった。自分の無知が生んだ罪を、そのまま受け入れられるのが耐えられなかった。

そして、最後まで私を守っていた陽子までも拒絶した。

『いいかげんにしてくれっ！ 何が目的なんだ！ どうして私なんかに構って、そうぬけぬけと笑ってられる！！ そうやって、孤立してみじめな私への同情に浸って、自分がいい子なんだと、酔い溺れてるだけだろうがっっ！』

陽子は私を思っただけでクラスメイトに牙をむき、私に構うせいでクラスから浮くようになった。日に日に無理して笑うようになって、そんな陽子を見たくないと思いをそのまま垂れ流した。

それが余計に陽子を傷つけると解っていたのに、私はそうするか自分を保てなかったから。

『……止めてくれ。もううんざりなんだっ、これ以上私に関わるな！ 迷惑なんだ！！！！』

うとまれるのは私一人でいい。憎まれるものも私だけで十分だ。あの悲惨な事故のきっかけを作ったんだ。私は到底許される人間じ

やない。

……そう妄信して、直面している現実からも逃げていた。

でも陽子は、今ここにいる。私からこぼれたボロを追ってきて。私は振り切ることができなかった。

『大丈夫。私は、ここにいるから……』

屋上に向かう階段、その行き止まり。窓から差し込む茜色も届かなくて、暗闇と淡い陽だまりの境目に立つ私を、陽子がそっと抱き寄せて言った。

『私は、もう二度と、アキから離れたりしない……絶対、しないから』

私は最後まで弱音の一つも言えなかった。陽子は何も聞かないと知りながら、その芯の強さに甘えて、私は嗚咽を噛み締めながら泣きじゃくった。陽子はそんな私を、いつまでもやさしく包んでくれた。

自分が傷つくより、身勝手な私を支えることを選んでしまった。

「……………ばーか」

秋の冷たい風が目にしみて、私は顔を背けて目をこすった。

「アキだけには言われたくない」

ふてくされるように言い返した後、陽子は昨日の事を一方的に話し始めた。母親が腕によりをかけて料理したこと。陽子も手伝って、ついでに躁太さんまで乗り出してきたこと。それで一体誰のお祝いだったって笑ったことも。躁太さんが買ったプレゼントが、既に母親経由で渡されてて、それを知らない本人が慌てふためくのを二人して意地悪く見てたとか。

ほんと誰のためなのか、ことさら明るい声で。どこにでもある家族的一幕があたかもこの世のすべてだというかのように、陽子はくすぐったそうに話し続けた。

校門に付くころには、目のはれも少しは引いていて。

「おっはよ、アキ！」

「ああ、おはよう」

そんなバカなやり取りも、周囲の奇異な視線に構わずやっていた。

昇降口では志刀がいつも以上に爽やかに挨拶してきた。正直志刀も昨日の今日で顔を合わせずらいだろうと思っていたが、陽子と犬を食わないケンカを続ける志刀には昨日のわだかまりはないように見えた。

それどころか志刀はいつになく余裕の表情で、途中目が合うと、

「恨まれ役は買ってやる」

と言わんばかりに、昨夜見たような苦笑を返してきた。

そして教室に付くなり今度は須磨が一喝した。怒り心頭に発するという真っ赤な顔で、我々の活動を冒涇したあの何だのという意味が分からない文句を並べていく。

私が無言で脇を抜けると、鼻を鳴らすだけでそれ以上は何も言うてこなかった。

休み時間になるたび、陽子が私に笑いかけ、百合香が上目遣いでよってきて。「……近い」と押し返してるうちに、いつの間にか志刀や西貴が近くにいて。志刀と陽子・百合香が腹の探り合いをするように対峙する……。西貴は飄々とした顔で、目が合うとはにかむばかりだった。

まるで私だけが昨日の事を覚えてるような、当たり前前の景色が目の前にあって。

いつもより華やかな団欒の中で、私一人大きな影に覆われてるような気分だった。

昨日と同じようで、違う日々は、強くなってきた風のように止まることなく過ぎていく。体育祭まであと一週間を切ろうかという時期になって、部活組が休み時間や放課後の練習に打ち明ける日も多くなった。

その間『クロハネ』は、特に大きな噂もなく、けれど下火にもな

らない。体育祭をさぼりたい奴の言い訳に使われたり、その場の冗談的に使われるくらいには浸透していた。

単語自体を聞く機会が多いというのに、具体的には全く見えてこない。まるで誰かが規制してるかのよう。そう、あるいは、

「命斗が……？　けど、理由がない。それに、……だったら、もっと騒がれてもおかしくないしな……」

生徒会が網を張ってるなら、それだけで話のネタになる。命斗は容姿だけでなく注目の的だから、盛んな学生たちの口に戸を立てることはほぼ不可能だ。

もっとも、私が気にしすぎてただけなのかもしれない。クラスメイトも、違う学年の生徒も、目先の祭に向けてやる気全開。もともと熱血が性にあわない私が一步引くほど盛り上がっていて、『クロハネ』はぼやけていつてるようにも思えるのだ。

「ねえ、黒羽さんって——」

どこから聞こえた声に、私の足が反射的に止まった。

黒羽、……黒い羽、夜の校舎、クロ……ハネ？　心臓の動きが激しくなっていく。

「リレーとか出てくれないかな」

「あ、わかる」。黒羽さん、足速そうだし。……でも、なんか近づきがたいよね。目つききついし、そっけない感じだし……。私たちが頼んで聞いてくれるかどうか……」

「誰か説得してくれないかなー？」

後にく和やかな会話を聞いて、喉に詰まっていた息を吐き出す。首の裏が張り詰めていて、呼吸するたびに体の熱を失っていくように、私はしばらく動けなかった。

「ささちゃん——？」

焦点の定まらない視界の中で、百合香が前のめりに私を覗き込んできた。

「どうしたの、顔色悪いわよ？ 保健室でも行く？」

百合香は肉厚の唇を吊り上げた。パッチリとした瞳が蠱惑的に細められ、私を誘うように微笑む。

「いや、エンリョしとくよ」

私は苦笑で答えたが、どうにも頬が硬くて、疲れた感じになった。百合香なら、ここぞとばかりに『弱ってる今が——なんでもないわっ。それより顔色悪いわ、私とっ、一緒に保健室へ！』とか鼻息を荒くするかと思ったが、歪む唇を若干緩め、胸の谷間に手をあてがうにとどまった。こいつにもTPOの概念はあったらしい。

「遠慮は必要ないわよ。私とささちゃんとの仲じゃない？ 絹一つまとわれない姿で、二人よりそって、上の唇に濃厚なキスをして、それからそれから……」

……前言撤回。声のトーンこそおとなしいが、百合香が自分の妄想にもだえていた。

「百合香——、それ以上百合っ子してたら彼氏泣くよ——？」

廊下の先で、けらけらと笑う声に百合香は不機嫌を隠すことなく振り返った。

「あんなのドーデもいいのよ！ 男なんていくらでもいるし。それにあれはデート引っ掛けて、気前の安売りするしかキョーミないのよ。そのくせ、あっちから誘っておいで、待ち合わせの十分後に平然とした顔ってどういう神経してるのよっ。ありえないわっ」

いつか待ちぼうけにでもあったのだろうか。百合香は立腹な様子で、私から離れて声の主の方に小走りしていった。

背中に流れる艶やかな髪を揺らすほど、男は最低だと毒を吐きながら、百合香はどんどん先に行く。途中一度だけ、後ろを振り返った。それも、横を向いたついでとばかりのもの。

光の消えた黒い瞳が一瞥して、不敵な笑みを残す。

私は胸のうちを見抜かれたような気分になって、とっさに胸を押えた。

「……………励まされ、たの、……かな？」

「さあね」

啞然と漏らした独り言に、いつの間にか近くにいる陽子が軽く応じた。

「それより、次は美術室だよっ。ほら行った行った！　ただでさえアキはマイペース甚だしいんだから、さっさと行くよ」

陽子は私の腕を抱き寄せるようにしながら、先々歩いていく。

「いやっ、あのな、いきなり引っ張るなって」

「もんどーむっようっ！」

窓から差し込む光がごとき陽子の姿に、私は彼女に見えないように歯を噛み締めた。

デッサンで裸体を描きたいと、退場を食らった一名をよそに授業は終了し、昼をはさんだ五時間目は体育だった。

体育祭に向けてクラスメイト達が活気づくのを、私は木陰に座って見つめていた。私は大丈夫だと主張したけど、なぜか陽子、志刀、百合香他多数がそれを押し切られた形だ。

『小学校のころなんて、週に三回は保健室にいたんだから、無理は禁物！』

とは陽子の言い分。本当のことだけに、強く反論もできなかった。「もう自分の要領くらい把握してるよ……。それに、本当は体でも動かしてたいんだけどな」

遠くで右往左往するクラスメイトたちを見ながら溜め息をつく。

私一人影に沈んでいくような、そんな隔たりを感じた。

数日たっても疑問は消化できない。むしろ時間が進むにつれて、気分は晴れるどころか沈んでいく。志刀たちと学校に伸びこんだ夜、私が見た黒い羽は、間違いなく死神と呼ばれるものの象徴だった。そして私の知る死神は一人だけ。

結局『クロハネ』の手がかりはなかったが、用もない生徒がどうして？第三？の周囲をうろついているのか。……理由がない。志刀や西貴によれば、『クロハネ』の影響か、放課後遅くまで残る生徒も少なくなってるらしいな。

「『クロハネ』は本当に、葵……だったのかな……？」

違うというのは簡単だ。私が見たのは羽のような何かだったから。けど、本当に葵だとして、私に何ができるわけでもない。志刀は私ならどうにかなるような言い草だったが……それは買いかぶりすぎというものだ。

一人膝を抱えて、思考は堂々巡りし始める。病的な白い顔、黒い羽のような髪、命斗が関わってるという事実……それにふと耳にした噂。

「……ん？　けど、最近は葵がどうのって話を聞かないな」

そこまできて違和感に気がついた。そもそも私は須磨たちに付き合ったのは、葵がこの件に関わってる、という懸念を晴らしたかったからじゃないのか？　今日小耳にはさんだのも、結局のところ葵が体育祭に参加してくれるかどうか、だった。

「だったら、……これでよかった、のか……？」

確かに須磨の様子が気がかりだったが、きっかけに過ぎない気がする。

私は葵が『クロハネ』じゃない確信が欲しかっただけ。そして、実際にも葵が『クロハネ』だと卑下する生徒は見かけない。なら、私は心配するようなことは何も……私が首突っ込むことは何もない。

『私には白い羽根が見える。私は、それを黒く堕とさないといけな
いから……』

けどなぜか、二年前の葵の顔がよみがえる。

「なにがどうなってるんだ……」

自分の気持ちが解らない。『クロハネ』は実在して、須磨の知り合いを襲った。先日見かけた葵は半年前声をかけたときのまま、凜とした背筋で一人影を背負っているように見えた。周囲を突き放して、けど私の知る葵は他人を傷つけるようなやつじゃない。だというのに、私は葵が『クロハネ』でないと確証を持ってない。

それが……許せないのか……？

考えれば考えるほど、こんがらがる思考の中、私は一人の男子が目にとまった。

「……須磨は、何か分かったのかな」

リレーの練習をしている須磨は、冷めきった目で前の走者を見据えていた。

あいつは、知り合いを『クロハネ』に襲われて、それを防げなかった責任を取りたがっているらしかった。

けど須磨は、数日前からずっと大人しかった。私何が見たのか、あるいは何かあったか問い詰めるでもなく、自分で調べてるそぶりもない。それどころか私に不遜な態度を表すことすらなくなった。宿題とか、授業中の質問に対する答えとか、それこそ毎日のように言われた嫌味もぱったりとやんでる。

教室には平然として、私との距離だけが二ヶ月くらい逆戻った感じだった。須磨の変化だけが、当たり前になった日常の中で唯一違う……わけ、……でもないか。

「……自分勝手だな、私」

その、嫌味ったらしいほどの須磨がおとなしくなった原因も、自分が靄も感じている原因も結局は――

と考え込んでいるうちに、須磨の元へ志刀は歩み寄っていった。眼鏡をかけなおす須磨に、志刀が何か話しかけ、須磨が神妙に頷く――と、

「アキ、やっぱり顔色悪いよ。それも最近、ずっと……。具合、悪

いなら、……保健室行こ？」

目の前に陽子の顔が現れて、私は慌てて俯いた。もう遅いとは思ったが、陽子には暗い表情は見られたくて、両手で表情を揉んで顔を上げる。

「ううん。一人体を動かしていないから少し寒いだけ。……だから、平気。だいたい陽子は心配しすぎなんだって」

「それはアキは、自分を大事にしなさすぎ……まあ、今更だけど」
陽子は溜め息をつく。ちょうど今来たところなのか、頬が上気していて、額や首筋には汗が浮かんでいる。息も少し上がっていた。眉間に皺を寄せているのは、しかし、疲労感が原因じゃないだろう。

「疲れたあ、私もアキみたくサボってようかな」

陽子はわざとらしく愚痴って、勢い付けて私の横に——というよりも、半分くらい私を押しつけて座った。

「……ちよ、あのなあ陽子。私を見学にしたのはいったい誰だよ？」
頭をおさえる私をよそに、陽子は寄り添うように肩に頬を乗せてきた。目まで閉じて、早くも吐息を細くし始める。練習で汗ばむ陽子の体は熱くて、ずっしりとした存在感が肩からのしかかっていた。汗で黒の濃くなった前髪が風にちらちら揺れ、ずっと目を閉じた表情をより健やかで。私はそんな陽子を見て何も言えなくなっ、代わりに溜め息をついた。

「聞く耳は持たないですか……、まったく……」

寝呆けてるはずの隣がかすかに反応する。私は結滞だと思いがら、気付かないフリをした。

何も訊かず、何も言わず。だけど離れたりしない、と陽子は私に寄り添ったままだった。それがとてもありがたくて、どうしようもなく後ろめたかった。

「……ありがと」

だからふがいなさを謝る代わりに、感謝の気持ちを呟いて目をつぶった。

更衣室で着替えて、少し急ぎ足ながら教室に向かう。

「あつつ〜、結構きついんですけど」

「アツコは飛ばしすぎ、あんなの適当にならしとけば、後は男子がやってくれるのに」

「そうそうっ、西貴くんとか村上くんとかカッコ良かった〜、もう、何ていうの、額に汗かく姿が、きゃ〜」

「はいはい、熱いしだるいんだから。テンション無駄にあげんなー、うざい」

雑談に花を咲かせる女子に中。ふとスカートが揺れてると陽子が指摘した。

「アキ、携帯なってるんじゃない？」

「え、……ああ、うん」

言われて気づいて、今だに慣れない手つきで携帯を開く。

送り主は、……命斗だった。

「あれ、会長のメアドなんていつ手に入れたの？」

「ああ……、うっかり携帯を持ってることがばれたときにな、……嬉々として勝手に入れられた」

すご。とか、うらやましい。とかいう黄色い声が聞こえる中、私は眉を寄せた。

命斗が私を呼びつける時は、大抵用事を押しつけてくる。今の時期なら体育祭、文化祭関係だろうが、頭の中には先日の命斗の疲れた笑みと、夜の闇の中に見た黒い羽……『そのうちお願いするかも』という不吉な言葉が心臓を締め付ける。

いざメールを開き、……眉間のしわが三センチくらい深くなった気がした。

『先日発見された大量の寝袋について』

という文で始まるメールは、ダラダラとした報告書がつづられていた。早朝大量の寝袋がグラントに捨ててあって、どう対処した

かというもの。パソコンで打ったものらしく、改行もデタラメだった。

「……て、何で表示が命斗になってんだ……？」

知らず呟いて……身構えていた肩から力が抜けていった。

意図の分からないメールに目が鋭くなった頃、最後の文章が目に入った。

『今日の放課後、生徒会室に来てね（＞人＜）』

「……………はあ？」

どこからそんな話が出て来たのかわからず、私は思わず足を止めてしまった。後ろを歩いてた子が背中につかって、私は慌てて道を譲る。

「わ、悪い」

「いーよ。いつも間をはずしてるもんね、あっきーは」

その子は髪を三つあみにしながら、あははと笑って自分の席に歩いていった。

私はいつから『あっきー』って呼ばれるように……でなく。私は目を凝らしてもう一度メールを読み直し——半分くらい読んでやめた。

「授業始めんぞー。おらおら、何で男子どものほうが席についてないんだよ！」

教師のやる気があるようなないような声が聞こえて、遅れるようにチャイムも鳴る。

私はもやもやしたものを抱えたまま着席した。

放課後になっても、結局命斗からのメールには返事しなかった。

文句を言っても無駄なことをこの半年で学んだ。いつものように渋谷と生徒会室に出頭する。陽子や志刀が怪訝そうにしたけど、命斗の名前を出したら妙に納得していた。

「しょーじき、気が進まないな……」

どうせ体育会の準備かなんかだろうと思いながら、向かう足は重かった。

それで、いざ南棟四階の生徒会室に来てみると、

「だれも、いないじゃないか……」

はあ、と溜め息をつく。

南側と西側が窓に面する部屋は、傾き始めた日によって光が満ちていた。入口そばの受付みたいな長い机の上に閉じたノートパソコンがあるだけで、向かって左側に広がる空間にも久しく人のいた気配がない。奥にある命斗の机も、手前の低いテーブルや向かい合うソファ어도淡く黄金色に染まっていた。

それらに目を細めてから、私はスカートのポケットから携帯を取り出した。几帳面な命斗のこと、きっと何か事情があるなら連絡もしてるだろうと思ったからだ。

「……あった、……し」

受信時刻と今の時間を見て愕然とする。メールが来たのは十分前で、完全な無駄骨という訳だ。私はソファアに腰かけながらメールを開き、そのまま横に倒れこむ。

「都合が悪くなったので、生徒会の手伝いはまた今度頼みます……、ね……、だったら最初から呼ぶなっつーの」

私は携帯をぶら下げるように腕で顔を覆った。

「まぶし……」

西から差し込む陽光に照らされて、チリが目の前でちらちらと揺

れる。それが私の内側にうごめくものまで、洗い流してくれてるような感じがして、どうせならこのまま霧散してしまえばいいのにと投げやりなことを思った。

「何やってんだろ……、いや……何もしてないのか………サイテ
ー」

ぼやけていく視界の中、私は少し自虐的になった。

自分で見たものしか信じないとか、他人の趣向を認めるとか。適当なことを自負して、私はまた見えてるものから逃げている。夜の学校で見た黒い羽からも、須磨からも、『クロハネ』からも、祭に向けてはしゃぐ日常からも。

目の前に広がるものに、私はただ手を伸ばす勇気すらもてないでいた。伸ばして触れることでそれが壊れてしまおうとか、曖昧な恐怖を言い訳にして身をすくませている。

「志刀のこと、……いえない、なあ……」

ははと弱々しく笑う口からこぼれたのは、志刀の名前だった。

私を送っていった夜、あいつは悪いのは自分だと言った。自分がよかれと思って提案して、実際にやったのが間違っていた、とあいつは謝ってきた。私が何を思って、傷ついたかも聞かないで。言わない私を責めるではなくて、言えない私を許容してくれた。

それで、次の日にはけろっとしていた。私が変わるふうを考え込まないよう……陽子のように、志刀もまたしたたかで、優しすぎる。

だから私は志刀や陽子に甘えて、今にしがみついている。知らないフリを続けていた。

「さいてー、だ」

陽子の気遣いも、須磨のよそよそしさも多分、——いや絶対私が招いたことだ。だから、私がまず歩きださなきゃ、何も終わらないし、始まらない。

そこまで自覚していて、私はしばらく無気力のままソファに寝そべっていた。

視界が濡れたようにぼやけて、意識も次第に薄れていく。

見えてきたのはいつかのバスの光景だった。わいわいとした老人たちの集団、二人だけの世界に落ちるカップル、子供の寝顔に目を細める母親……。秋の紅葉のような柔らかな旅の終わり。隣に座っていた少女が無言でいなくなり、そしてその後は――

「……………」

何度か寝返りして落ちそうになったところ、私を包む日が遮られた感じがして、その続きを打ち切られた。うすぼけた視界に、だんだんと部屋の光景が戻ってくる。目の前に大きな人影があった。

「誰か、……命斗でも、……戻ってきた……？」

大きな影は私の声に体ごと振り返る。

「お、起きた――な。――っ、――長補佐っ。んなところでサボってもいいのかよ？」

飄々とした男子の声がはっきりと聞こえるまで、数秒かかった。

ニヤニヤとした雰囲気醸し出された声は、けれど鼻に付くという感じではなく、今の楽しんでいるという明るさに満ちたものだ。

腕を少しどけ、日の光に焼かれながらも目を凝らす。

「にし、貴……？ 何で、……お前がここに？」

その先には――すらりと背が高い影に浮かぶ、はにかんだ顔と芝生のような短髪がいた。

立冬。陽子という唯一の支えすら拒絶して、私は嘲笑と侮蔑されるだけの存在に成り下がっていた。もうクラスでは死神だの、？中女テロリスト"だの呼ばれるようになり、遠巻きな白い視線はいつでもこびりついていた。

味方は、もういない。全部私自身が遠ざけた。同時にこれでよかったのだと思う。私と一緒にいると、また壊れてしまうのだから。「朱樹^{あけき}ならいねえぞ。あいつら、あんたが本氣にくるかどうか、笑いたいだけだからな」

理科室の途に手をかけたところで後ろから声がかかった。鼻で笑うような男の声だ。

朱樹とは私を理科室によんだ女子生徒の名前。今まで散々罵倒してたことを謝りたいとか、そんな理由だった。私が振り向きもしないでいると、男は呆れたように続けた。

「ほら、向かいの四階。自習室があんだろ？ そっからだとそこ、障害物もなんもないからさ、あいつらそこに集まって」

「――知ってるよ」

お節介以外の何物でもない声を、私は一蹴した。そんなこと解ってる。といった方が正確かもしれない。見てもいないのに、そいつは肩をすくめた気がした。

「だったらどーして、んな律儀に来てんだよ？ 相手いねえの解ってんのにさ」

私は初めて声の主の方を振り返った。相手の言い草がどうにも嫌だったから。

ただでさえ目つきの悪い顔をしかめて、きつと相手を睨む。果たして、そこには西貴宗治という変わり者が窓枠に体重を預けていて、私が振り向くと何もなかったようににはにかむ。

ひどく人懐っこそうな笑み。けど私には底の見えない笑みに思え

て、本能的に怒りや嫌悪が浮かんできた。

西貴宗治は、歯を見せたまま『わるいわるい』と腰低く謝った。
なら、それで終わりだと、私はいつもどおり視線を背けようとして――

「何であんたは、そんな苦しそうなんだ？」

戻しかけた目が開く。頬の筋肉が引きつって、私は壊れた機械のように再び西貴宗治を見た。

西貴宗治は私を見ていなかった。開いた窓にそらした上体を乗せて、まぶしそうに手を庇にしながら空を見ていた。うつろな声色で溜め息をつく。

「どうして、そう……思うんだ」

声がかすれている。心臓がきゅうつと縮小したように思えた。西貴宗治は、無頓着なのか、私の動揺にも気付いてないのか口元をへらへらとつり上げる。

「どーして、ってそりゃ単なる置き換えだ、よっと」

西貴宗治が勢いつけて態勢を戻したので私は慌てて視線を落とした。

「仮に俺があんたの立場だったとしたら、どう思うんだろうな、てな。……まあ、俺の場合、クラスメイトから罵倒されたくらいだったら、へらへら笑ってる気がしないでもないがな」

ひどく一人心地な口調だった。落ちていく夕日と一緒に、愚痴を少しずつくような淡い言い草が、何故か胸に突き刺さった。言葉の続きにおびえるように、私の心はさらに縮んでいく。

「けど、だからわかんねーの」

西貴宗治の視線が強く、そして冷たくなる。

「……なんであんたは、そんな『この世の地獄を見て』るような、すさんだってか、痛ましげな目をしてんだろうなって」

私は背筋が凍った。声色は変わらないし、口元だってにやけたまま。

しかしこいつは、他のやつらとは違うものが見ているように語る。

「あんたは、何が怖いんだ？」

私は西貴宗治が何を見ているのか怖くなった。それも今日が初めてではない。

何を、どこまで、こいつは知っている？ そうさ。私が怖いのは……教室で孤立することでも、いじめの的になることでもない。陽子の時みたいにな、また私のせいで人を傷つけること、……人との関係を、私が壊してしまうこと。

……けど、そんなことよりもっと単純に――

「おまえに何が解るんだ……」

私は低く探りを入れた。

「周囲から親しまれて、信頼も厚くて、……私みたいな害虫にもへらへら話しかけても、クラスに受け止められるお前に、私の何が解る」

私の詰問に、彼はあっけらかんと答えた。「わかんねえ」と。

「俺はあんたじゃねえ。あんたの気持ちや考え方はあんたにしかわっかんねえよ。……いったろ、俺はただキョーミがあんの。俺がこんな打ち込んでる『楽しい』学校生活が、あんたにはどう映ってるのか」

『俺は馬鹿みたいに変化のない学校生活が割と好きなんだ。だから何であんたは、そんな暗い顔してんのか興味あってさ』

西貴宗治が、私に構い始めたころの言葉が浮かんだ。

私はこいつの言葉を裏を噛みしめるように、俯いてしまった。

「確かにさ、学校の関係を軽視はしない。しねえけど、こんな学校なんて狭い世界が全てだなんて妄信もしない。だってそうだろう？確かにこの街には高・中あわせて片手くらいしかねえけど、全国で見れば、同じような施設は数百とある。それに、駅前顔出せば、信じられないくらいの人で埋め尽くされてるしさ」

こいつは他のやつらとは違う。

「親と子供がまともに話できんなら、年の差なんてある程度はどうにでもなる。今が苦しいなら、『イマ』の外側に行く手だってあるんだ。なのにあんたは、今の状態に固執してるようにみえんだよ。わざと周囲を拒絶して、自分に白い目や嫌悪の矛先を向けさせて、苦しいくせに、今の状況に閉じこもってる。今の状況が本気で嫌ならさっき言ったみたいに、気分を変えて街に出てみればいいし、感心されねえかもだけど、家族だけの世界に閉じこもるか、親に相談して転校したっていい。そうやって新しい関け――」

こいつはどこまでも中立で。クラスメイトのように、私の意固地に辟易するでも、悲劇のヒロインぶってると侮蔑するでもなく。陽子のように、自分も身の振り方も考えず守りに掛かるでもない。

だからこそ、残忍だ。

「じゃねえと、つまらないでしょっ、んな」

「お前に何が解るっつ！！！」

私は突然西貴宗治の声を遮った。思いのほか大きな声が出て、肩はいからせながら西貴宗治の顔を睨んだ。

「わかんねえよ」

と西貴宗治は肩をすくめて、三度引き下がる。

「……………」

こいつは、掛け値なしで私を見ているのだ。恐怖に震える人に向ける同情も、いつまでも過去にとらわれる人に向ける嘲りもなく。

今ここにいる『笹本秋』という人格を見据えようとしている。

私に客観的な価値を与えようとする。

「まったく、難儀なやつだな、あんたって。人間、自分から話さなきゃ、何にも始まらないって」

先日こいつは言った。価値観があおうがあわまいが、互いに主張をぶつけ合うのが、心の底から楽しいんだと。

『だってそうだろ。毎日そいつらの違った一面が見えてき、あきねえってか、自分にはない考えを知れるのって面白いだろ？ だから、

俺は今充実してんの』

「私は、……いない」

私はそうやって、幸せに無頓着だったせいで、墮ちる兆しが見えなかった。山を登り切れば、後は落ちるだけというのに。私は長い上り坂を平坦だと思い込んで、下り坂に足を取られた。

「お前も、私に関わると後悔するぞ」

私は自分の無自覚のせいで、乗り合わせた人全員を道連れにしたのだから。

「おお、こわ。さすが『中女テロスト』さんは、雰囲気が違うな」
すこむ私に対して、西貴宗治は晴れやかな空のように、からからを吹き出した。どこかの掲示板で炎上した、私を揶揄する言葉まで持ち出して。

「けど生憎、俺はまだ後悔したことなかったりして」

「おっ、西貴。ちょうどいいところに、なあそんなところで何してんだ？」

彼を呼ぶ声がして、西貴宗治は窓の方に身を翻した。

「散歩。んで、どうかしたか？」

「いやな、今、帰りのジュース掛けて、佐久和たちと勝負してんだけどよ、暇なら助っ人してくんねえか。負けそうなんだって」

「おう、わかった。今そっち行くわ」

相手のお願いに、西貴宗治は軽快に二つ返事だった。

それから、あげたままの腕を軽く振って、独り言のようにぼやきながら歩き出す。

「ちゅーこくはした。じゃあな、笹本さん」

西貴は一度も振り返ることなく歩き去っていった。

「にし、貴……？ 何で、……お前がここに？」

私が困惑したまま口を開くと、相変わらず歯を見せて笑う西貴は、何でもないことのように話す。

「いやま、外をランニングしてるとき、下から笹本が生徒会室なんかにいるのが見えたから、何してんだって気になってさ」

「いやそうじゃなく……、部活は、部活はどうしたんだよ。それか体育祭の練習、は……？ とうかここ四階だろ、私はさっきまでソファで寝てたのに、下から見えるわけが」

「バスケットも練習もさぼり、つか生徒会室って一回入ってみたかったんだ。興味あったからさ」

『何であんたは、そんな暗い顔してんのか興味あってさ』

不意に昔の記憶がよみがえって、私は表情を濁した。

「本当に何しに」

「そーいや、あのおっさん捕まったんだってな。献金問題とか、いまいちよくわかんねえけどって親父や母さんがぼやいてた」

私は言いかけた言葉を喉に詰まらせる。西貴に悪気はないのかもしれないが、今の私には最悪の話題だった。

「ほら、この前駅前で演説してたおっさん」

「あ、ああ……らしいな。うちも父さんがニュース見て驚いてた」

「ついてねえよな」

うそぶく西貴は、曇る私の顔をまるで見ようもしない。窓から外の様子を眺めて、ランニング中の仲間を見つけたのか適当に手を振ったりしていた。こいつは、……二年前もこんな感じだった。自分本位というか、薄っぺらいというか。

底が見えなくて、時々どうしようもなく怖くなる。

そつと腕を戻した。飄々とした西貴に背を押され、たたらを踏まないように手を握りしめる。

「気づいてねえの？」

落ち着いた声が続ける。私は「何が？」とは言わなかった。西貴がどこまで見えているか、私には判らなくて、口にした瞬間脆く崩れていくのが怖いから。

何が……崩れるというのだろうか。

さっきまで頬に当たっていた西日がなくなって、急に部屋の中が肌寒くなった気がした。

「はあ……、お前らってさ、見ててもどかしんだよ。しょーじき、見てらんねえつつの」

西貴は何か諦めるように溜め息をついて、私の方を振り返った。残光がまばゆく、影になる西貴の輪郭を曖昧に浮かび上がらせていた。

西貴の表情は、いつになく引き締まっている。つりあがった目が私だけに注がれる。

「あんた《……》はまた、昔みたいに閉じこもるのか？」

感情をそぎ落とした簡素な声。西貴は睨むでも、悼むでもなく、無感動に私を見ていた。

「お前は基本冷めてるけどさ、何だかんだいって案外中心にいるんだ。歩や日野が……まあ、あいつらは露骨だけどさ……、河内^{かない}や丈智とか他の連中もこぞって輪作って、かごめかごめってさ、お前は中心でうずくまってやがる。周囲が気になって神経尖らせてんのにお前自身は輪に加わろうとしない。ほんとは解ってんだろ？ 変わってないのはどっちなのか」

百合香や須磨の名前まで出てきて、私は腕の下で奥歯を噛み締めた。どこまでも中立で、誰よりもゆがみ泣く私を見続ける西貴の言葉は、胸深くに突き刺さる。

「お前自身がどう思ってるかは知らんけど、お前の不器用で引っ込み思案の優しさはさ、ちゃんと周囲に届いてる。だから、誰もお前

を責めたりも、せかしもしない」

私はそうじゃないと首を振った。

「そんなんじゃない、……ない。私は、ただ……」

蚊の泣くような弱々しい反論は、途中で噛み潰れてしまった。私は優しくなんかない。私は弱虫なだけ。人から嫌われるのが怖くて自分から壁を作って、変化が怖いから曖昧な返事を繰り返す。

私は、昔壊してしまったから……

正直に打ち明けたら、西貴ならどう反応するだろう。歯を見せて冗談だと笑うか、それとも今まで見たことないくらい剣呑な顔になるか。

どちらにしても、西貴が相手なら傷が浅いのもかもしれない。そんなふうに考えてしまう自分もいて。私は震えるほど手を握り締める。

「………判らないんだ」

噛み締めた歯の隙間から、ようやく私はそれだけ答えた。

羽根を黒くされたものはみんな不運に落ちる。財布落としたとか、靴の紐が切れたとか、そんな些細なものもあれば、その人の大事に至るようなものもある。あるいは、白い羽根が生んだ幸福の代償に命を落とすことだってある………自分以外を巻き込んで。

けど、そんなものは所詮程度の違いに過ぎない。本当に怖いのは、「判らないんだ、……何が私で、何が私じゃないのか……」

壊れるから怖いんじゃない。いつ《・・》壊れるか判らないから、怖いんだ。

今までの『当たり前』は本物なのか。逆境の選挙で連勝したことが、それとも今まで献金問題が明るみにならなかったことが、あくまで白い羽根が見せた幸福なのかどうなのか。それとも自身の行いのよさだったのか。……本人でさえ判らない。

終わりは確実に、無情にやってくる。私はまた、無意識のうちに壊してしまうんじゃないか。周囲の人を、親友を、家族を……本当になくしたくない人たちまで巻き込んで。また私だけ、日常を平然と過ごしているかもしれない。

「そんなのは、もう……………耐えられない、んだ」

「……………」

結論だけの言葉に、西貴も押し黙る。

【ありがとうございますましたっ！！】

今日の練習に感謝をする合唱が、どこか遠くから流浪してきた。
男くさい後ろ髪を引かれるように、西貴は視線を外へと向ける。

「丈智はさ、とっつきにくいところだらけだけどよ、笹本の事は本気で心配してる。ホントは、あの日何があったのか聞いただしたいのに、しない。あいつ言ってたわ、自分が不甲斐ないばかりにまた友人を傷つけて、我を通すわけには行かない。だから自分には笹本に詰め寄る資格はない、だと。志刀や日野だって似たようなものだ。誰かさんがあまりにも暗い顔してっから、自分の意思まで曲げて、影ではすげえ悔しがってるの。自分は情けないってさ……。けど誰かさんは何も言わないから、俺らはできるだけ？いつも？を守るしかできない」

西貴が沈み始めた空の向こうに向かって、何か一人呟いていた。

……須磨が私を気遣ってしてるなんて思いもしなかった。

「だからよ、判らないなんて、寂しいこと言うなって。俺らはお前がお前だから集まってんだぜ？」

西貴は、夕陽のように弱々しくはにかんだ。

「——ちがう。ちがうんだっ！私を、そんな出来た人間みたいに言うな！」

私は、冷めたフリをしてるだけだ。傷つくのが嫌で、傷ついて俯く姿を見られたくなくて、片意地張ってるだけ。そうやって今にしがみついて、平凡であることがどれだけ幸福かも知らずっ、私は……私は、自分勝手に塞ぎこんでいるだけなんだ！

「葵も、陽子もっ、志刀も須磨も悪くないっ！悪いのは、あいつらが自分を責める原因は全てっ、私なんだよ！！私さえいなければ

ばっ」

乱暴に振り払った左腕が、何かに収まった。細くて角ばっていて、けど力強く私の腕を受け止めたもの。

泣きはらすように熱い目が見たのは、困惑顔で見つめる西貴だった。

「ほら、届いた……だろ？」

「あ……、……………」

私は握りしめられた腕を振り払えなかった。はにかむ西貴の表情が、茜色の光が重なって、ひどく繊細な細工物に見えた。カッコいい……と無意識に呟いて、不意に志刀の顔がよぎった。

「少し、意地が悪かったか？」

掴んだ腕をそっとおろしながら西貴は笑う。

「……まあけど、笹本って見た目以上に頑固っぽいからな。俺みたいな、粹ぎりぎりくらいなやつの方が気楽だろと思ってさ」

私は今更ながら、頬を朱にして顔をそらした。な、なんなんだ、このもやもやした感覚は……。……そうか、子供みたいな癩癩を見られたからか……。多分、そうだ。それで西貴に訳の解らない八つ当たりを……

「……わ」

「と、こんなとこであやまんなよ？ 俺はただ、見てらんねえから口出ししただけ。ちゅーこくはした。それ以上は突っ込むきも、背負い込む気もない。そんな面倒な役は他の誰かさんに任せるわ」

ひらひらと手を振って、心からの謝罪に先手を打たれた。西貴を嫌味っぽく目を細めて最後だけ、中立を保ってるふりをする。

そんなことされて、どの面下げて謝ればいいって言うんだ……。ほんと、私って駄目人間だ。周囲のやつらの心配を煽るばかりで……。お節介ばかりなんだよ、私の周りは。

「ありがと……。お前には面倒な役を買わせたな」

だから、器用貧乏な優しさに私は礼を返した。

「たまにはいいんさ。志刀や日野は過保護すぎっから……。それに」

西貴はそこで言葉を切って、何かを期待する視線を向けてきた。無知な子供みたいに、雄飛をバックにして無邪気に微笑みかけてくる。お前がこれから何するんだと、好奇心旺盛な顔だ。私は無然とするのを忘れず、西貴から顔をそらした。

何をするか決まれば、あとは決意が鈍る前に行動するだけ。自分が原因だというなら、私が動かなければ何も始まらない。

どうやら、西貴たちのことを偉そうに言えないくらいには、私は苦勞性らしい。

「そーいや、もう一つ気になることあんだよな」

次の行動を決めた私を見て安心したのか、西貴が力を抜いた声で話しかけてきた。私も何の気なしに、「なんだ？」と先を促した。

「この前、歩とはよろしくやっちゃったわけ？」

「……………。ノーコメント」

「はは、やっぱりな」

西貴はなにやら楽しげに声色を緩めていた。

というか、陽子といいこいつといい、志刀と私がどうにかなるとでも考えてんのか？ 志刀はただ情に熱いから、沈んだ私に気をかけてくれたってだけで。それに私がそんな対象になるのかさえ、最近疑問に――

「まったく何やってんだか。肝試しの時なんか、暗い教室んなかで二人寄り添って、バカッフルよろしく二人だけの世界に浸ってたってのにな」

西貴の一言に、呆然と思考が飛んで。私はソファから飛び上がって、顔を真っ赤にしながら叫んだ。

「――っあ、な、なんで、それを！ てかつ、二人の世界なんかおちてない！ ああ、あれは足をくじいた私を志刀が気遣ったのことで、廊下とか階段だと誰が来るかわからないし、不用意に足引つかけられたら、あ、あれだからって教室にいただけ…………。で、何となくお互いに気まずくて、…………けど人肌って結構暖かいし、もともと眠気はあったからついうとうと……………」

言い訳も段々としどろもどろになる。だいたい、もとはといえば志刀の相方が階段でぶつかってきたせいで足くじいて、教室で休もうってことになったんだ。まあ、だからといって志刀を責めるわけでもないし、志刀が妙に優しいから言葉に甘えて肩貸してもらって…………だから、他意は別にない…………気づいたら志刀にすぎるようにして寝てたのだって…………不、不可抗力ってやつでっ。…………あー、もう

っ、顔が熱い。

顔のほてりを手で押さえながら、さぞ意気地の悪い顔をしてるであろう西貴を一瞥する。すると西貴は、憎たらしいほどやさしく微笑んでやがった。

「何かいいたそうだな？」

「別に？」

声を低くして睨んでも、西貴は含み笑いでとぼける。からからと、前歯を見せる人懐っこい顔を、今は思いつきり殴ってやりたかった。「お前ら見てっと飽きないなあ、と思ってさ」

西貴は降参とばかりに手のひらを見せて、けど顔のにやけはそのままに笑う。

どこか子供じみた爽やかな笑い声が、淡い夕焼けの中に響いていく。つられて私も少しだけ口角が上がった。

「くれぐれも、陽子には言うなよ」

「手遅れだな。あの時、日野は俺の隣で歯ぎしりしてたから」

冗談っぽく言う口調とは対照的に、私は陰鬱な溜め息を漏らした。だから、志刀と犬猿としてるのか。妙に納得。

けど、胸に渦巻いていた暗雲はいつの間にか霧散していた。

5-4 (後書き)

五章終了です。

物語りもクライマックスに・・

『この世界には三種類の役目がある。幸せを呼ぶ天使と、不幸を招く死神と、そして——私のような灰色の存在。』

前の者たちは、ある時から羽根を見つけ、自分の役目を自覚する。幸せを呼ぶ天使は、慈悲深い心で、報われようと苦心する人に白い羽根をつける。されど、自身の羽根を見る事はあたわず。

不幸を招く死神は、心押し殺し、幸福に命を縮める白い羽根を黒く染め上げる。されど、自身の羽根を見る事はあたわず。

彼らは自分の役目の結末を知りながら、それを放棄する事は出来ず、いつか傷つく。

ならば、私に何が出来ようか。

私に出来る事は、ただ羽根を見ることだけ。

天使が自身の慈悲が裏返るのを苦しむも、死神が自身の手で人を貶めること悼むも、私は見ることにしか出来ない。半分しかかの者らの心を分かち合えない。

だから苦しい。目の前で、誰に言うことも出来ない業を抱える人たちに、私は無力だ。

私は——どこまでいっても中途半端だ。伸ばした手は、虚しく空を切る。

せめて私が出会ったかの者たちが、一時でも恍惚と笑っていてほしいと願う』

そう記した人がいた。

対して私の周囲には、お節介なほどの友人たちがいて。私が中心にいるんだと、責任だけは丸投げ。ほんとは私なんか、過去にびくびくと怯えているだけだというのに、不器用な優しさというやつを期待してくる。

けど、だからこそ。私はその作者のように愕然としていられない。私は見えてしまったものを守りたいと、手を伸ばしたのだから。

それは紛れもない私の想い。

日はすっかりと落ちて、夜の帳に満ちた中庭。

「探し物かい、お嬢さん」

人の輪郭も闇に溶け、たれそれと問う時間帯は過ぎ去ったが、私は確信を持って声をかけた。

果たして、華奢な影は硬直するように身動きを止めた。

月明かりを吸ったように白い肌、大河の影のように広がる黒髪。

……そして、青みがかった闇になんか染まらない、片方だけの漆黒の翼。

瞳の黒を疑うほどの漆黒が上下にゆれ、滲むように消えていった。黒羽葵。命斗と並び、この高校で右に立つものがない美女。

「どうして、秋がここにいる」

葵が、私がいることに驚いたにもかかわらず、氷のように冷たく言葉をつなぐ。

「生徒会の手伝いですっかり遅くなってしまったんだ。それで適当に歩いていたら、忘れものを取りに来たみたいな子を見つけてね。

私でよければ探し物を手伝おうかと思ったわけだ」

とっさにとぼけてみたが、黒く冷め切った瞳が油断なく私を射抜いていた。

にらむだけで熱が引き、凍り付いてしまうような冷たい視線に、私は下手なごまかし通用しないと悟った。頭を振って、薄ら笑いも消す。

「解った。単刀直入に訊く——お前こそ何しているんだ？」

私の剣呑に言った問いかけにも、葵は微動だにしない。ただ、月明かりで白く反射する瞳がじっと私の事を見つめていた。私の一拳手一投足をけん制するように、油断ない視線で睨む。黒い尾のような髪だけが、夜風の中で所帯なさげに揺れていた。

「秋には……関係のないこと」

糸を張り詰めた琴のような、涼やかに響く葵の声が私を拒絶する。私にはそれが、割れたガラス片で脅しをかけるような危うさに思えた。

「関係するかどうかなんて問題じゃあない。今私がどうするかだ」
一瞬だけ、葵の冷え切った瞳に強い光がともった。

「私は確かめると決め」

「貴女には関係ないっ。これ以上、私に関わって貴女が傷つく――」
激流のように声を荒げ、すぐに言葉に詰まる。葵は顔をそらして黒髪で表情を隠した。

二年前、自分の存在に震えていた少女の顔が重なった。

葵は『クロハネ』ではない。今度こそ確信した。

こいつには意図的に他人を傷つけることなんて出来ない。葵がするのは……他人の傷まで背負って生きていくことだけ。

『私は周りを不幸にしてしまう。それは私の役割で、他の人に見えもしない。けど、私には見える。幸せそうなその人の白い羽根を黒く染めるところも、黒い羽根がその人に不幸を与えてしまうという事実も……全部。なのに私は平然と生きている』

薄氷一枚隔てて、ようやく凜とした姿を保つ少女の独白を今更思い出した。

陽子や家族が支えてくれた二年間を、いやそれ以上に確かな現実を葵は一人で耐え続けている。一度思い込むと私はほっとけなくて、こりもせず彼女に手の伸ばした。

「ばーか、私は昔も今も――」

彼女を覆う影に踏み込んだ瞬間だった。

ガシャン。いきなりガラスが割れたような小高い破裂音が、私の言葉を遮った。

「な、こんどは――てなっ、ちよっ、葵！」

なんごとかと視線を上に向けた瞬間に、葵は校舎に向かって一直線に駆け出していた。完全に不意を疲れて、私は呆然と暗闇に手を伸ばすことしかできなかった。

不吉な音の後には、何も続かなかった。静寂が手に取れそうなほど埋まっていた。

ぽつりと取り残された腕を引いて、そのまま髪をかきむしる。頭の中では解決してないもろもろが再び暴れだしていた。

「ああ、もうっ。どいつもこいつも……、事前に一言くらい言っただけっつの！」

内側から込み上げる不安や嫌な予感を、行き当たりな怒りで塗りつぶして。私は葵が向かった先、不自然なほど白く縁取りされた中央棟へ走った。

葵の華奢な体は思いのほか素早く、私が階段についた時には姿を見失っていた。そこにそびえるは奥の見えない闇だけ。

「くそ、はやいっ」

短く悪態をついて、階段を駆け上がる。溝に足を突っ込んだように、一段上がっていくほどに体の動きが鈍くなっていく気がした。それでも私は、闇の中を一人走っていく。

三階廊下に葵を見つけた時には息も相当上がっていた。

葵は第三倉庫の前に立っていた。冷たい視線をまっすぐ倉庫の中に向けて、まるで静止画のように止まっている。

「葵、どうし、た、って……いうん、だ……？」

葵に歩み寄ろうとした足が止まった。廊下の温度が奪われたように寒気が足元に迫る。

不意に、背筋があわ立つような不安を真横から感じた。

恐る恐る顔を向けると、第三倉庫のドアが開いていた。覗いているのはのっぺりとした闇。まるで見合った相手を飲み込むように、窓の近くだけがうっすら白かった。

「……………」

思わずたじろぐ私に対して、葵は物怖じした様子もなく中に入っていく。

「つつ、葵、待ってっ」

私も慌てて葵の後を追った。

暗闇に包まれて、始めに見えたのはアルミ製の骨組みだった。

ない……？ 違和感に気付いて振り返る。アルミ製の棚には、わずかばかりにものが端に寄せられてるだけで、昔見たダンボールや冊子類が全てなくなっていた。確かここは生徒会関係の資料や文化祭で展示されたものとかがあったはずだ。

「——誰………かい？」

急に立ち止まる葵にぶつかりかけて、私は思案を止めて前を向いた。

うつすら明るい奥に一人、立っていた。薄く唇を上げ、まるで月の光を浴びていたかのように上向きの顔が透けるように白く。女とおぼしきそいつを覆う髪は、エナメル線でできているかのように、わずかな光の中でちらちらと光っていた。

ほんとに、人……なのか？ 初めに感じたのはそんな不気味さだった。

「誰……？ 白為さんじゃ、……ない、よね」

女の声や振り返る表情は希薄で、体の線は曖昧に闇に溶けている。……まるで人間味がない。私は華奢な立ち姿に、言葉に出来ない不安に襲われた。

全体的に線が細く、制服からのぞく手や足は病的なまでに白くて、黒く長い髪が彼女の動きにあわせて広が――

「あ、もしかしてアキッ」

女が完全に振り返った！

私は彼女の表情を見て、肩をはねあげ思わずあとずさる。けど地面が柔らかくて、足を取られて態勢を崩した。視線を落とすと、細切れになった何かがちらかっていた。白く薄いものがあれば、布キレのようなものもある。

カッターの刃が、窓から差し込む光を反射する。

「もうっ、今時手紙とか私びっくりしちゃった。でも、アキくんから話があるっていうから、もう嬉しくって、私ずっと待ってたのっ！ アキはいつくるのかな、まだ来ないのかなーって、髪とか袖の端とかずっと整えてね、ずっと待ってたんだよ、アキ？」

息を呑む私を前に、待ちわびた恋人を迎えるように、彼女は弾んだ声を上げる。

……女は決して笑ってはいない。

際限なく見開いた目が焦点を失ったように瞳を揺れていて、薄い唇は赤々と歪んでいる。だらりと両手をたらし、まるでカラクリ人形のような、記号的でぎこちない微笑みがゆっくりと近づいてくる。歩きたびに黒い髪が左右にゆれ、そのたびに白い光が垣間見えた。

彼女がクロハネだと、体が理解する。怖い……私は身の危険を感じて震えた。

「矢島空はここに来ない」
やじまあき

おののく私ではなく、透き通るアルトの声が彼女を迎えた。決して好意的ではない、冷たく簡素な声に、眼前の女は歩みをとめた。

私はそれが葵の声だと気付くのに一瞬遅れた。

「――、葵っ、なにをっ」

我に返って、慌てて口をはさんだが一步遅い。私の声も、伸ばしかけた左手も、葵は後ろ手で制して、一步女に近づく。

「貴女を呼び出したのは私。私が全ての原因。私が貴女の白い羽根しろいふくを堕とした」

葵は何を言っている……？ 縮み上がった理性が追いつかない。

原因は葵？ 相手は誰？ あれは……誰……？

私の目の前で女から表情が暗転した。開かれていた目は閉じ、上がった口角は下がって、白い肌が闇に飲み込まれる。冷めた鉄のような、無感情な瞳が葵を見るでもなく見詰めていて……その奥の方に稲光のような怪しい瞬きが――

「私が貴女から」

散らばった紙切れが音を立てて、強い白光が弧を描きながら葵に迫る！

「ばかつ、よけろ！」

恐怖に縫い付けられた体は、はじかれるように動いた。

私は踏み出すより早く上半身を投げ出し、細い肩から前側に腕を回す。それから体重を後ろに引いて、葵を倒すように無理やり引き寄せた。

葵の体は思ってた以上に軽くて、私は抱きとめるようにして後ろに倒れた。

「――いつ」

勢い余って床に腰を打ちつけた。女二人分を受けとめた痛みは、喉元まで込み上げて一瞬息が詰まって。空気の塊を吐き出すと、全身が心臓にでもなったかのように、ぼんやりとした熱が体を覆うように振動し始めた。

「葵っ、平気か……？」

「……………」

葵は私の腕の中で呆然と前を見ているようだった。女の姿はどこにも見えない……。消えた……と考えるのは甘いか。私はとにかく葵の様子を確認しようと態勢を起こし――不意に鉄の臭いが鼻を掠める！

私は身を乗り出して、やや乱暴に葵の頬や体を触っていく。ガラスのように滑り、触れた先から壊れてしまいそうな細い体だった。人形のような黒い瞳がじっと私を見つめる。

……、とりあえず怪我はなさそうだった。私は安心して、急に体から力が抜けていった。少し神経が鋭敏すぎたのかもしれない。私が溜め息をつくのに合わせるように、背後で物音が響いた。

「どこ……？」

濡れたようなさびしい女の声が、部屋の奥から聞こえた。

私は荒い呼吸をとめて振り返る。目の前にある暗闇は密度を増したようで、しかし、人の気配を飲み込んだように気味悪く静かだった。

「ここはどこ……、アキは？ いないっ。……だれよ？ ミナコ……」

……、サツキ、リョウ、シンナ……あいつらが、アキを奪ったの？ 私とアキが付き合うのを、笑って祝福する振りしてっ、ああした方がいい、こうしたほうがいいって、私があれこれ思い悩んでるのをほくそえんで！！ あざ笑って！ 影から馬鹿にしたいだけでしょうっ」

女は呪詛のように感情を振り回して、私は言葉が出なかった。まるで言葉の一つ一つが、私の体を締め上げるように、息が詰まる。「彼が長い髪モデルの話で盛り上がっていたから髪も伸ばした……。派手めが、好きだって言うから化粧だって毎日少しずつ勉強して……、恥ずかしかったけどデートの時は露出の多い服を着た！ 学校でだって、部活で苦悩してる彼の少しでも役に立とうと、毎日のようにお弁当を作ったり、かげながら応援したり、こっそりと励ましメールを送ったり……私はっ、彼のために何でもした！ 彼が求める彼女になるために努力したっ！！ 彼だって、けなげに支える私を愛でた瞳で見つめてくれてた！！ 彼が望むから！ 私は、……私はっ、……」

あふれ出す感情を、どうにか片手で覆うようにして。荒々しく吐き出す吐息は、もはや理性すら飛んでいて。

「なのにつ、アキは、どこにいるのおお！！」

絹を引き裂くような叫び声に呼応して、部屋中の空気が震えた。長い髪が、黒い翼のように広がり、完全に光を遮った。床に積もる

切れ端に何度か足を取られ、幽鬼のようにゆらゆらとあちこちに体をぶつける。

そんな危うい彼女は、急に何かに気づいたように顔を上げた。表情はつき物が取れたように明るく、けどうつろな瞳が何かを探すようにあやしく光る。

「そうか、あいつ」

視線がまっすぐ入り口の方に向けられた。仇を見るような、血走った目。

「私に生意気言ったあの女が、アキをかくまってるんだ。そうよ……私とアキがこんなに幸せだから、疎ましく思っ、私とアキを引き裂いて、私から何もかも奪ってっ」

目の奥の光が、稲妻のような激しいものになる。喉がひりひりと痛み出した。

「死ねばいい……。みんな死ねばいいのよ！ 何もいらぬ。私はアキだけでいい！ 私を拒むものも、あざ笑うものも、同情してる振りして私を馬鹿にするあいつらも、死ねばいい！！ 私はアキがいればいいのっ。私とアキの中に入ってくるものは、全てっ、邪魔なのよ！！ もう私たちの幸せを、邪魔しないでよ！」

女が言葉を発するたび、胸の奥が疼く。古傷というにも新しい、鮮烈なまでに生々しい傷が、どくどくと痛み出す。内側から込み上げる息苦しさに、私は平衡感覚まで失いそうだった。

一度壊れてしまって、何もかも拒絶するしか自分を保てない。向けられる好意にも、差しのべられる手の暖かさにも気付けず。ただ、今にも壊れそうな自分を守るために……

「……………いや……………」

今更、自分の体が震えてることに気付いた。

女は壊れた人形のように体を折りながら、乱暴に腕を振った。壁際の棚にぶつけても、窓枠に手を取られても、体中の骨から奇妙な音を立てても一切構うことなく。触れるもの全てを傷つけて、自分の負った傷を隠してしまおうとする。

髪の間へのぞいた、激しい光が不気味な何かに置き換わった。

狂い踊る黒髪は、まさしくクロハネ。……いや、そんな怪談に便乗したような生易しいものではない。もっと生々しくて、醜い……壊れてしまった人の姿！ 腕を折られ、中身を垂れ流して、私の生をむさぼるように這い上がろうと迫る。

……違う。それは夢。彼女を壊したのは私じゃない！ 私はっ、何も！ 視線をそのままに奥歯を思い切り噛み締めた。ジワリと鉄の臭いが舌に当たる。

「全部、お前のせい。お前さえいなければ、私は、私たちはっ！！！」

暗闇が振動する。動け、動けよ私の足！ けど無常にも、女はまっすぐ私のほうに向かって歩み寄ってくる。私は目をそらすことすら忘れていた。

「そうよ……、そうよ、そうよそうよそうヨそうヨそうよソウよ！！！」

黄色ががった歯を剥き出しにして、獲物を見る獣のように顔の皮膚が引き破れんほどに表情を尖らせる。

「お前が壊したの……だから——」

ひどく静かな声に、時間がやけにゆっくり流れていく。

「才前ダケハ、許サ、ナイ！」

女とも言えない声に、一瞬にして喉は引きつった。

フラッシュバックする事故の光景。生温かい闇に佇んで、血みどろな一人の少女が寂しげに見つめてくる。雪のような白い肌も、エナメルのように黒い髪も赤黒い血で染まり、うつろな視線で私を見据える――夢の中の葵が私を責めるように、

「――アキ！」

――くいと引っ張られて、私ははたと下を見た。葵が、黒い目で痛ましそうに見つめていた……そう、葵だ。今にも泣きそうなほど瞳を揺らして、けど袖を引く力は軽かった。葵の背中にある羽が、闇に溶けてしまうように消えた。

それを見て、私は急に現実に取り戻された。

雑然とした闇の中で踊る女は酔いしれるように笑っていて、葵のことを侮蔑していた。

狂おしいほど相手を想って、けど純粋な願いすら信じられなくなった。恨むべき相手を見失い、身近なものに当たって自分を保つしかできなくて。目の前の少女が愁いにかげりを落としていることにすら気がつかない。

こいつが、自分が悪いのだとじっと耐え忍ぶ姿を、見ようともしない。

握りしめた左手に、熱さが宿る。

「……えに、何が……るっていうんだ」

ひとりでに感情が漏れだしていく。

一度恐怖に縮み上がった体は、手足が痙攣するほど冷たくなって。無理やり押し込まれたバネが元に戻ろうとするように、芯まで冷め切った体の奥底に熱いものが灯る。

恐怖で縮み上がった体は、別の理由から震えていた。

「お前なんて、お前なんて存在しなければっ」

「お前は、こいつの何が解るって言うんだっ!!」

女の罵倒を、私は内側から湧き立つ熱さそのままに遮った。握りしめた左手が激しく鼓動して、高ぶった感情を更にあおる。

「お前は何を知ってる？ 葵がどうして他人を寄せ付けないのか、どうしていつも一人凜と背を伸ばしてるのか……どうして能面のように表情を消して、何を背負って今ここにいるのか、お前が何もかも知ってて、それでもこいつを否定してるのか？」

内側を占める熱に対して、私の声は氷のように冷めきっていた。女が初めて人間っぽく愕然としていた。構わず私は、乱暴に手を横に振った。

「嫌なことを全部他人に押し付けて……、見たくない現実から逃げるお前に何が解る!! 妄想じみた自己嫌悪にとらわれて、自分が抱くものまで見えなくなったお前につ、自分のせいで他人が傷つけ、深く関わることに怯え続けるこいつの何が解るんだ!!」

事故は自分のせいだと責めながら、失った命の重さに耐えきれなくて、ベッドの上で一人泣くしかなかった。これ以上誰かを傷付けないよう、周囲を拒絶することしかできなかった! 必死に背筋を伸ばすことなぞ、私には想像できないほど苦しい。

ふつふつと込み上げる熱さ。血液が垂れ流れるように体が熱くなり、煮えたぎった金属のような、どろりとあふれてくる感情をむき出しにしてそいつを睨んだ。

「彼が求めた? だから自分を変えた? は、笑わせるな! 求めたのはお前だろうがっ。彼に好かれる私、彼女である私、彼女として尽くす私っ! 彼女として、友人から嫉妬されるほど努力するけなげな自分っ!! ……すべてお前が望んだ姿だっ、彼の為と主観を入れ替えて、結局自分の為だろうが! 彼女でいないと、彼の特別じゃないと不安で、無理して嘘をつき続け、すれ違いにもふたをして見ないようにしてきたっ。あまつさえ誤魔化すために彼を言い訳にして、狂おしいほど愛が自分だけのじゃないと願ってるだけじゃないのか!」

私は結局、傷つけまいといいながら自分を守っていた。理屈をつけて、自分の行為を肯定してっ、私は陽子や友人達との関係が壊れるのが怖かったただけなんだ。壊れるくらいなら、壊せばいい。ないものは失わない、向けられる侮蔑にもすぐ慣れる。そう自分に嘘をつき続けた。

「いい加減、現実を見ろよ」

目の前の女は、私の叫びに圧倒されて、壁際まで引きさがる。白い頬が、よりやせ細ったように見えた。

「お前に声をかけたやつらは、本当にお前をあざ笑っていたのか？ 本当にお前と馬鹿にしたのか？」

悪いかどうかを決めるのは自分だ。周囲がどんなに暖かくても、優しく慰めても、本人が悪いと思い込んでいれば、それは責め苦と変わらない。

だから、『お前は悪くない』なんて言葉は意味がない。

「貴女に……何が……」

「何も解るか」

私ははつきりと言った。

「漠然と触れ合う想いだけじゃあ、人は動けないんだよ。自分から何も言わないで、気持ちなんて伝わるだけないだろうが、……ばか」何も言わないからと、言えないからと否定していいものではないけど。相手の優しさに甘えるだけでは駄目。言いたいことがあるなら、正直に言わなければ意味がない。

闇に取り残されたように女は立ち尽くす。際限なく見開かれた目に怒りと真逆の感情が浮かんでいた。まるで、押しこめていた不安や恐怖が表情に現れていくように、彼女はゆっくりと唇を震わせた。「はは、なにそれ、……何なのよ……意味わかんない、私が……悪い？ こんなにアキを思っ苦しいのがいけないこと？ はは、おかしい。そんなのないわよ……」

女は、気が抜けたように足元がふらついた。壁に手をついてどうにか堪えると、左手で髪を掻き揚げながら顔を覆い、ゆっくり口角

を上向きに引きつらせていく。

「私はアキのそばにいられば良かった。教室だと飄々と軽口言うくせに、二人きりだと何もいえない彼が好きだった。手作り弁当一つで子供みたいに喜ぶ彼が、自分の時間まで削って部のために走り回る彼が……かっこよかった。だから励ましたかったのに、メールしたり、デートして気分を入れ替えようとしたり……それがいけなかったの？ 私は別に振り返ってほしいわけじゃあないの」

零れだす言葉はどれも傷だらけで、どんどん彼女の体を暗闇へと追いやっていく。

「アナタは言った。私が彼女の何を知ってるかって……けど、そんなもの、アナタにだって言えること。なら、アナタに私の何が理解つていうの!？」

女の髪が再び、黒い羽根のように広がる。

「そうよね、……そう！ アナタこそ私の、いえ、私とアキの事なんて何も知らないじゃない。私がどれほどアキを愛していて、アキが離れられないほど私に依存していたか！ 私はアキのことを一年前から知ってるっ。やる気のない先輩の下で、いつも歯を食いしばりながら努力してる彼をつ。そんな孤高な彼の支えになりたくて、私はこの一年間をささげたの！ それがあなたに解るとでもいうのっっ!! そうっ、そうよ。アナタは結局、私の表面だけ見て、ただ憐れんでいるだけじゃない!! あんたなんか人の気持ちがかかるわけない！」

女は何かを探すように入口の方を一瞥し、すぐに私を正面に捉えた。

「そんなわけの解らないものを背負ったあんたが——同じ人間でいいはずない！」

再び私を睨む女は、瞳に先のような激しい光を灯していた。狂いきった瞳が、今度は真正面から私を睨みつけた。弓のように引き絞った瞳に憎悪を押し詰めて、私たちがいる方向を睨んだ。だらりと垂れた腕の先に、白い白刃が牙を剥く。

「私は幸せだった。アキが隣にいただけで、恥ずかしそうに笑いかけてくれるだけでっ、アキがおずおずと手をつないでくれるだけで充分だった！ 甲子園に行くって、大げさに夢を語ってくれるのも、私を気にかけてくれる優しさも、様子を見に来た私にも気付かず練習する直向さも！ 全部好きだった！！ はにかむ彼の笑みがくすぐったくて、アキがいてくれるだけで私は満足だったのに！ アキには私が必要で、私にはアキしかいなかったのに！！」

私は静かにそれを聴いていた。体から湧き出した熱に追い出されたかのように、何もかも空っぽになった気分だった。

驚くほど、冷静な頭で、私は薄闇の向こうを見据えた。

「それを向ける先のは、私ではないだろ？」

女がはっとなる。

暗がりでもはっきりとわかるほど、驚愕し、わなわなと唇を揺らす。私は最後に辛辣な言葉を投げた。

「私が背負うのは醜い過去の私だけだ。お前は、自分の気持ちから、逃げるべきではなかったんだ。純真な部分も、醜悪な部分も抱えて、お前は前を向いてなきゃいけなかったんだっ」

「うるさい！！ 全部全部全部、お前のせいなんでしょう！ 自分のことを棚にあげて、えらそうにお説教しないでっ」

まとりつく想いと振り落とすように、女は髪を乱して体をくねらせる。

「お前が、責任、……とってよ」

追い詰められ、許しを高揚に濡れた目で女は見ていた。ずっと腰を落とした。

「お前なんて死ねばいいのよ！」

先までとは違い、今度は――狙いを定めてくる。

「そうかもな」

白い刃を向けられてるというのに、私は情けない顔で笑っていた。
「アキ……？」

葵をかばってやれるほど私は体力にも動体視力にも自信はない。

……護身術は姉のせいでみっちりしみついているが、暗闇でまともに使えるとは思えない。

だったら。私は左手を盾にするように構える。痛そうだなと、心終えそうになりながら、静かに覚悟を決める。相手の出方だけに集中する。

女の細い体が、一步踏み出そうとした。その瞬間。

部屋の中がパツと明るくなって、後ろから誰かが手を打ち鳴らした。

「その辺にしてくれないかしら？」
桐森^{きりもり}さん。これ以上は、さすが

に生徒会でもかばいきれないから」

物腰柔らかく、けれど芯の通った声。睨み合う場に不釣り合いな、優雅で、自信ではなく自負からくる凜とした響きに、私も桐森と呼ばれた女もしばらく目を点にした。

かつかつと、靴音が聞こえそうなほど確かな足取りで、そいつは私と桐森の間に立ちふさがった。

雄々しい真白の翼が私をかばうように広がる。ふわりと甘い匂いが鼻腔につき、尾を引く亜麻色の髪が悠然とたなびく。

「笹本さん、ご協力ありがと。……ここからは生徒会長である私が請け負います」

再び目を焼くような後光をまとった命斗が肩越しに笑いかけた。た。

やわらかそうな長髪を簡単に束ねて、下半分がフレームのダテ眼鏡をかけて。寒いのかブレザーの上に白いコートまで羽織っている。闇を裂いた純白が、こいつにはぴったりだなと、私は茫然としていた。

「会、ちょう……?」

桐森の瞳に迷いがちらつく。こちらに向けられたカッターの刃が細かく揺れていた。

「どう、して……どうして会長まで、私の……邪魔、を」

わなわなと震える唇が、信じられないと訴えかける。私たちを罵倒し尽くした威勢が、見る見るうちに崩れて形を失っていく。

「会長まで、私をあざ笑ってた……の……? 相談ならいつでも乗るって、この前も、今日だってっ! 親身になって私の話を聞いてくれたのに、あれも、小馬鹿にしてたっていうの!」

桐森の悲痛な叫びが空しく響く。命斗は痛ましげに目の端を下げながら、誤解だと淡く笑みかけたようだった。

「いいえ、……それらを踏まえて、彼に来てもらったの。……入ってきて?」

濡れた声が、私たちの後ろにいる誰かにかけられる。間をおかず、

消沈した男の声が入ってきた。

「ああ。迷惑掛けたな、白為。それと……そっちの子もな」
「——っ!!」

私の背後に現れた足音に、桐森が暗闇でも判るほど驚愕した。足音は一途にと近づいてきて、やがて私や葵、命斗さえも過ぎ去って桐森の前に立った。

浅黒く焼けた首筋、肩甲骨が張り出したたくましい背中。見たことない人だった。

「アキっ、……どうし、て……」

「おいおい。さっきまでは何で俺がいなんだって、可愛らしく叫んでいたのに、それはないだろうよ」

アキと呼ばれたその人は、口調こそ昼間のように飄々としていたが、声は窓の外と同じくらい暗かった。桐森も焦りの色を濃くした。桐森が信じられないものを見るような目で、一歩二歩とあとずさる。「——、ちがっ、ちがうの……私はっ、ただアキに振り向いてほしくて」

「……………」

たどたどしく身をくねらせる桐森に対して、その人は、そつと手を伸ばした。剥き出しのカッターナイフの刃を握りしめ、『うぐ』と痛みをこらえる。赤い血がやけに滑らかに手首に伝っていく。

「っ——アキ、」

「悪かった」

声の低い謝罪に、桐森は息を詰まらせる。今にも泣き出しそうな顔で、その人の顔と、止め通り泣く流れてく血を交互に見つめる。けど、その人はへらへらと笑うように、桐森からカッターナイフを取り上げて、床に捨てた。

「アキ、手っ」

「はは、んな泣きそうな顔すんな。大したことはない。俺ピッチャーでもないしな。それよか……、お前の方だ。俺が言えないばかりに負わせちゃったお前の傷の方が、重症だ。ほんとに悪いと思って

る」

アキ……多分矢島アキは少しだけ声色の和らげて、それから命斗の方を一瞥した。

「白為、悪いが……」

「ええ、どうぞ。私はもとより部外者ですから？ 二人の間に割って入るつもりは一切ありません。それに男のやせ我慢に付き合うくらいには寛容だと思うわよ？」

からかうような命斗の視線を、矢島先輩は苦い顔で受け止めて。小さく「悪いな」と謝ると桐森の手をとって半ば強引に引っ張っていった。

両目ともにまるくして、足元もおぼつかない桐森。そんな少女に戻った彼女を、矢島先輩の角ばった大きな手がしっかり握ってるのが、二人が脇を通り過ぎる時に見えた。

二人が廊下の影に消えるのを見送って。

「はあ、これで一つやかみ事も終わりね。本当に、これから忙しく――」

足がぐらついて、命斗の小言も白くぼやけた視界の向こうに聞こえた。

「アキ!？」「笹本さんっ!？」

膝から崩れた私は、上から下からと、命斗と葵に支えられていて。どうにか倒れなったものの、二人はまるで死体でも見たかのように青ざめた顔をしていた。

「はは、緊張が解けたら、なんか一気に疲れが……」

6－6（後書き）

6章完！

二人分の支えがあっても、ずるずると膝が落ちた。そのまま床にへたり込む。やけに自分の呼吸音が大きくて、首筋や額にぼやっとした熱の塊が浮かんでいたり、手の先なんかまだ軽く痙攣していた。ああ、これが腰砕けってやつなんだなあ。とか、焦点の定まらない意識の中で思った。

「はあ、倒れるなら倒れると、直前でもいいから言ってくれないかしら？　じゃないと、笹本さんなら無言のうちにどこかへ隠れて、そのまま動けなくなっていそうだから」

「……無茶言うな」

茶化す命斗に私は無然となって答えた。けど、二人がいてくれて良かったと思う。

「というか、お前は私のことを、そこら辺の野良猫か何かと勘違いしてないか？」

「おなか減ったらすり寄ってくるのもいるし、その点でいえば野良の方がまだ可愛げがあるかしらね」

私が下から睨みあげると、命斗顎に人差し指を当てて、どこ吹く風とそんなふうに取り返す。相手を誘うような意地の悪いほほ笑みに、私は呆れた溜め息を漏らしながら、少しだけ体のコリが解けた気分になった。

ふと、何か忘れてる……と思っていたら、隣でまっすぐな黒髪がすっと立ち上がるところだった。

「アキ、保健室」

葵が短く言って、手を差し伸べる。

「いや、軽い立ちくらみみたいなのだから。もうだいぶ呼吸も楽になったし、そんな気にすることでもないよ」

すぐに頭を横に振ったが、葵は手をとって少し強引に私を立ち上がらせた。

「いいから。……。会長、後をよろしくお願いします」

「ええ、任せておいて」

腰に手を当てた命斗が、しょうがないわねとばかりに溜め息をつき、

「——て少し待ちなさいっ、これを一人で片づけ、ろ……。もういいじゃない……。はあ、まったく……。誰か来てくれるかしら……。？」

一人打ちひしがれるのを、私は廊下の薄闇の中、葵に腕を引っ張られながら聞いていた。

左の甲を握った葵の手が、妙に熱かった気がした。

「左手の甲、怪我してる。おそらく私をかばった時」

保健室に向かっている時に、葵が早口気味に言った。

一方の私は、葵の冷たい手に包まれてるからか、いまいち手の痛みが伝わってこなかった。

てっきり桐森たちがいるかなとか思ってたけど、保健室の鍵は閉まっていて、須磨から没収した鍵を使って中に入った。

電気をつけ、葵をベッドに座らせて。甲を覆っていた葵の手が離れると、確か人差し指のあたりから斜めに赤々とした傷があって、押さえつけられてたおかげで血がにじんでいた。

「……………痛い。……………」

冷たい風にあおられて、じくじくと神経を刺激するような痛みも、どこか空々しかった。一端意識すると、手の感覚全て持ってたかてるほど痛い。よく平然としてるな、私……と、ついマジマジと傷口を見てしまい、右手顔の半分を押さえて薬品の棚に向かった。

消毒と、絆創膏……じゃあ足りないか、えーとガーゼとテープと……包帯は大げさかな。……まあ、とりあえず、っと。両手に抱えたもろもろを持って葵がいるベッドに向かう。

葵は身じろぎもなくベッドの端に腰掛けていた。棚に飾られた人形のように、長い髪だけが風もなくさらさらと揺れていた。

「アキ……痛む？」

鉱石的な瞳に反射する光が、湿っぽく見えた。

「いや、しょーじき、よくわからない。全身が熱っぽくてだるいから」

もしかしたら、それが結構やばいってことなのかもしれないけど……まあ、深く考えないことにした。

失礼。と包帯とかガーゼとかを間に置いて、葵の横に腰掛ける。それから、まずハンカチで葵の手に付いた私の血をふき取って、も

う一度だけ葵が怪我していないか確認する。揺れる瞳に見つめられて、私は軽く笑って自分の手に向き直った。

ハンカチに消毒液を染み込ませ、傷に押し当てるように血を拭き取る。ガーゼをあてがいテープで固定して、上から包帯を巻いていく。

「……………」

二人の間に会話は無い。気まづさが濁りのように渦巻いていて、包帯の下で暴れる痛み以上に息詰まる。

最後に包帯の端を切ろうと思って、ハサミを持ってこなかったことに気付いた。

「あ、……………」

反射的に腰を浮かし、下手に動いたら包帯を巻きなおさなければいけない、中途半端に動きを止めた。ことごとく間が悪いな、私……………。何にいらだたしいか判らないまま、長く息を吐きながら浮かした腰を下ろす。

再び訪れる、気まづい沈黙が私と葵を包む。

「お前は悪くないよ……………」

そしてようやく出てきたのは、最悪の台詞だった。隣で葵が息を詰めるのが解った。

悪いかどうかを決めるのは自分。自分が悪いと思いきゃつに、『悪くない』は慰め以上に、責め苦に聞こえることがあることくらい、私が一番知っている。けれど、私にはそれ以外に言えることがなくて。言葉足らずに口を走らせ続けるしか私にはできなかった。

「これは私が勝手に首を突っ込んだ結果だ。だから甲の傷も、桐森の言葉も、全部私が背負うべき」

「そんな事ないっ」

痛々しく巻かれた包帯に落ちる視線を、葵の怒鳴り声が遮った。顔を上げれば、葵は目を力いっぱい顰め、歯を食いしばるように私を睨んでいた。自分の胸を、ただでさえ白い肌がより白くなるほど握り締め、それしか表情を知らないかのように必死に私を見つめ

ていた。

「そんな、事っ……な、い……。私はい、私はもう慣れて、るから。人の幸せを落とすは私の役目、あの人から幸福を奪ったのは私っ、……だから、責められるのは当然で、私は穢れてるから……けど、アキが、アキがまた傷つくのは――」

上気した声が突然途切れた。はっとなって、表情が激情のままに固まる。

「アキはもう十分傷ついた。二年前の事故の日、私なんかに遭遇してしまったから……」

実は、あの後、女子中学生が生存したというニュースを聞いて、私の学校に様子を見に行った、と。葵は時々むせながらつぶやいた。その事実には愕然となると共に、恥ずかしい気持ちでいっぱいになった。

私は？イマ”が信じられなくて、近づくすべてを拒絶していた。自分が壊してしまうことを、これから壊れてしまう幸せの中にある可能性におびえる私を葵は知ってしまった。自分のせいで私がそうなったと、また自分を戒めた。

こいつは私かそれ以上に不器用で、臆病で。私が投げた言葉は、やはり中途半端に届いていたんだ。

「ばーか、だから先に言えっの」

私は呆れたふうに分て笑って、視線を前に戻しながら続けた。

「だから、私は言っただの。私は灰色でいい、てね」

私は夕日が落ちる山々の光景を思い出しながら、曖昧に呟いた。葵の視線が頬を刺す。

「あの事故の日、葵は白い羽根を墮として、人に不幸を招くと言った。泣きそうで、けどそんな権利はないって突っぱねるようになって……だから、私は白くても、羽根に振り回されるだけの？ただの人？でもなく、灰色でいい。そうすれば、私は貴女を傷つけることもなく、貴女の肩の荷を背負えるんじゃないか、……って想ったから」
まあ、本当に？灰色？な状態になったのは想定外だったけど。そ

の分、少しは葵の背負ってるものを感じることができた。

私は白い羽根も黒い羽根も見えて、けど私にはそれらを取り除くことしか出来ない。幸福でも不運でもない不安定な状態にする、中途半端な存在だったから、私は半分だけ葵の無力さを理解したつもりだった。

私は出来るだけ明るく見えるよう笑った。

「同じだよ。少なくとも私は、ただ怖いんだ。人を傷つけて、傷つけるしかない自分を受け入れられることも、拒絶されて永遠に嫌われることも、怖いんだ。自分が触れることで関係が壊れてしまうことが、どうしようもなく怖い。見ている日常がどうしようもなく不安なんだ」

本当に怖いのは、変化が目に見えてしまうから。私には陽子がいて、姉や母さんがいて。高校に入ってからも志刀や命斗が加わって。事故以来ふさぎ込んでいた私に、じつくりと付き合ってくれる人たちがいたから、どうにかつぶされなかったに過ぎない。

なら、今度こそ私は彼女に手を伸ばす。

二年でつぶれそうになった私でも、十六年も耐え続けた彼女を支えられるか解らないけど。それでも、私は彼女を支えたいと思った。

「けど私はお前を信じるよ。お前の見ているものが私に見えなくても、お前が自分を穢れてるなんて言っても、たとえ他人がどんなにお前を非難したってさ。私は、お前が見てるものをありのまま受け止める。だから、何が見えるのか言ってほしい。何かしてほしいことがあるなら、私は力になりたい」

私は、葵に振り向いた。今度こそ真正面から、彼女を受け止める。窓の外の暗闇に、ぼうっと浮き上がる雪のようにはない彼女に、精一杯微笑みかけた。

「それとも、私じゃあ頼りないのかな？」

葵は顔を顰めたまま固まった。途端に不安が込み上げる中、葵はゆっくりと首を振る。それから、

「……………ありがとう、アキ」

はにかむように小さく笑った。氷山に閉じ込められた花が、月の光に照らされてきらきらと光の粒を散らすように。

葵の綺麗過ぎる微笑みに、私はしばらく動けなかった。

目の前で、葵が怪訝そうに小首を傾げる。私が視線を逸らすと、何か思い立ったようにベッドから勢いつけて立ち上がった。凜と背を伸ばして保健室の入り口に向かう葵を、

「あ、おい」

と呼び止める。葵が顔だけ振り返って、『何』と大きな瞳を向ける。

私は、まだ恥ずかしくて葵の顔をまともに見れなくて。右手で額を押えながら、誤魔化すように言葉をつないだ。

「あーと……そうだ、あれだあれ、今日廊下ですれ違ったやつが言ってたんだけど、お前足速いんだし、体育祭とかもっと積極的に参加しないか？ まあ、気乗りしないなら」

「うん。考えておく」

言葉の途中で葵が頷いて、目を丸めた後に安堵の溜め息をつく。私は少し気を張りすぎていたみたいだ。肩のコリが引いたように気が楽になって、私は正面から葵の顔を見た。

「あと礼なら、命斗に言ってくれ。私は、結局あの場を荒らしただけだったからな」

するとドアに手を付いた葵は、首を傾げてわずかに唇の端をあげた。

「会長には、アキから伝えて」

「な、何で私がっ」

慌てる私に向かって葵はくすぐったそうに微笑んで、さっさと歩き出した。

「それと……アキは必要。私は、アキに会えてよかった」

暗闇に浮かぶ黒羽くろはねが、からかうように上下に揺れて、すっと消えた。

一人残される私。葵の消えた入り口をぼうと見つめて、数秒位してから白い息を吐いた。そこに髪や瞳以外が真っ白な影が現れた。

「黒羽さんは……いないわよね」

「ついさっき帰ったよ。……その眼鏡はダテなのか？」

瞳を丸くした命斗は私の冗談も無視して、肉厚の唇に指を当てて首を傾げる。

「そうね、黒羽さんにしては珍しく、ずいぶんと喜色一面という感じだったわ」

「それは何か日本語がおかしくないか？ ……まあいいけど。それと、ありがと、だと」

私は呆れてた声で答えた。そうすると、長い睫を伏せて喉を鳴らすようにこころと笑う。

「あの黒羽さんが……くふっ。本当に私に向けた言葉なのかしら……ふふふ」

「さあね」

あっけらかんと言ったものの、うぐっと喉の奥が詰まりそうだった。命斗はすっかり楽しげに笑う。……どうしてこいつは、いや、こいつらは私の前だと素直に笑うんだ。しかも年相応に可愛らしく……ほんと、見てるこっちの顔が熱くなるっつの！

「……あら？ 笹本さん」

命斗が何か築いたように呟く。私は咄嗟に熱い顔を逸らした。けど命斗が指摘したのが別のところだった。

「手、怪我してたの？」

「え。あ、ああ……、『クロハネ』さんが葵に切りつけた時、引っかけたらしい」

まあ、初めに気付いたのは葵なんだけど。

「……。そう、……だから黒羽さんはあんな沈痛な顔で貴女を……納得」

命斗は疲れたような顔で一人頷いて、保健室に入ってくる。途中私の手元を一瞥したかと思えば、机の引き出しからハサミを出して

そばまで歩いてきた。

「はい、これ。必要でしょ？ ……それにしても、器用なものね。片手で包帯を巻けるなんて、どこかで習ったのかしら？」

命斗は心底不思議そうに首を傾げるので、私は適当に手を振った。「いや。ただ、小学生のころ、ハチマキを包帯みたいに巻いて遊んでたからな。この辺はなれたもんだよ」

運動会で腕に巻いた赤いハチマキを出血と間違えて、担任が気を失ってたとか懐かしく思ったのだけど、命斗は『そんな面白いことしてなかったわね』と首をひねってた。

……あー、そうですね。どうせ私は昔から感覚が人とずれてたよ……ほっとけ。

私は拗ねながら包帯を止めていると、ふふと柔らかい吐息が耳にかかった。正直、陽だまりみたいでくすぐったい。

「それで、……会長様はこんなところで油売ってていいのか？ ？」

第三？、悲惨な有様になってたけど？」

熱を吐き出すように切り出すと、命斗はあからさまに陰鬱な溜め息を漏らした。

「それは明日からやる予定よ。さすがにこんな時間に役員集めるわけにいかないし、あれを一人でやるなんて、それこそ骨が折れても終わらないわよ。だからさっきは、今後に影響するものがあるかどうか軽く確認しただけ。はあ、ただでさえ体育祭やら文化祭の調整で参ってるのに……、まったくもう……」

隣に座る命斗は本気で疲れてるらしく、陰鬱に溜め息を漏らしていた。私は丸まった背中に、棒読みで「ご愁傷さま」と声をかけた。

少し、間が空く。

「――ごめんなさい。本当は、桐森さんのこと、貴女に頼るつもりはなかったの」

いきなり命斗が謝罪してきて、私には理解できなかった。隣にあったはずの陽だまりはいつの間にか冷たい影に覆われて、命斗の顔も萎れてるように見えた。

「もともと矢島君とこのことで私がお節介を焼いたの……、桐森さんが一生懸命なのに、但馬君は素直に想いを受け取れなくて、もどかしくてつい背中を押したの。……けど、桐森さんの想いは彼女が制御しきれるキャパシティを超えていたわ。だんだんと矢島君の方が付き合うのがつらくなって、……ギクシャクして……けど多分私の羽根のせいで空回りしたまま関係は続いてしまった。だから、これは私の責任なの」

桐森をどうにかなだめようとしたが、逆効果だった。だんだんと友人にも当たるようになって、終いには関係のない生徒を襲って、生徒会として動くしかなかった。と命斗はとぼとぼと言う。

「……それで、なんで謝るんだ？」

私は話が見えなくて口を挟む。率直な疑問に、命斗は少し間をおいた。

「桐森さんが昔のあなたによく似てるような気がしたから」

白いコートの上から腕を押さえ、体の震え手に耐えるようにして唇を上げる。けどはかなさが増すばかりで、私は命斗の顔を見ないよう包帯の結び目に視線を合わせた。

命斗が思い浮かべてるのは、入学当時の私だろうか……それとももう少し前、オープンスクールで会った私だろうか。……どちらにしろ、あまり思い出したくもない光景、かな。

半年前までの私は、確かに桐森と同じ、追い詰められた眼をしていた。周囲を拒絶することしか自分が保てず、目に見える全てに

絶望したように瞳から光を消していた。

けど今更だ、と半年後の私は呆れたふう息を吐いた。

「私はてっきり、ここ最近の顛末は全部お前の差し金だと思ってたんだがな」

先日『そのうち笹本さんにもお願いするかもしれない』や、今日の呼び出し、『クロハネ』の現場に都合よく命斗がいたこと。その全てが、私には一本の線でつながっているように気がしたのだ。放課後気乗りしなかったのも、葵のことで直面したくない『クロハネ』への対処がために私に回って来たのかと思ったからだ。西貴が出てきたことさえ、命斗がけしかけたのではないかとさえ考えていた。

挑発するように上目を向けたのに、命斗は頭を振って答えた。

「ふふ、そんなに私を買いかぶらないで」

いつも妙に自信過剰なこいつが凹んでいると……かなり調子が狂う。私が二の句をためらってうちに命との独白は続いた。

「私は桐森さんを直前で止めるのが精いっぱいだったわ。本人は知らないとはいえ、私が後押しして、そのうえ最近積極的に話を聞かせてもらってたのに、彼女が見知らぬ人に逆恨みして、襲いかかるほど追い詰められていたなんて……、完全に私の想像力不足が招いた結果だわ。せめて彼女がさらに追い込まれないよう『クロハネ』って噂にして、久那^{くな}辺さん、えっと、桐森さんに襲われた子ね、……あの子にも口外しないでほしいって、お願いしたの。生徒会の方で対処するからって……その結果、黒羽さんや貴女にまで迷惑かけたわ。ごめんなさい」

自分の羽根をつけた子が、いつまでも幻想にしがみついたばかりに不運に見舞われる。命斗はそんな自業自得まで責任を持つとうとする。自分の安易な好意のせいで、桐森が、それに葵が傷つくことを快しとできない。

なるほど、誰より生徒の平穏を望む命斗らしい。私が陽子の羽根を掠め取った日、自分の無力を悔やんでいたのは命斗も同じだった

のかもしれないな。

「けど、……そうね。もしかしたら、始めから笹本さんに頼んでおけば、もっと早く、それにもっと穏便に済んでたのかもしれない」

命斗は方のコリをほぐすように背を伸ばして、そのまま倒れ込むように後ろ手をベッドに下ろした。

それでも命斗は凜と背筋を伸ばしたままで、強い意志を込めた瞳で前を見据えていた。

この話はもう終わり、と言外に伝えるように、命斗は眼鏡と髪留めを外した。

「それこそ、買いかぶりすぎだ」

だから、私もいつもみたいに溜め息を漏らした。命斗は「そうかしら？」と唇の端をあげる。

「あの時矢島君が最後の一步の踏み出したのは誰のおかげかしらね？ ……ま、あなたが謙遜するならそういうことにしようかしら。

あ、いいこと思いついたわ。とりあえずこっちは明日までに……それで笹本さん、今日の放課後言えなかったんだけど」

「何も聞いてない、何も聞こえない」

私は、いつまでも包帯の巻き目を確認しながら不穏な単語から目を逸らした。……それくらいはいいだろ。と桐森に言った言葉は早くも棚上げした。

命斗はしばらく妄想に没頭して。私に聞かせるかのようにぶつぶつ独り言を続けた後、家まで送ると立ち上がった。

「いや、お前の家の方が遠いだろ？ 私の方はいいいから、気にせず帰ればいいよ」

「あら、そう？ じゃあ駅まで行きましょうか」

……なぜか、私が送る側になった。

駅までの少しの道。

ネオンの光でにぎやかな中央通りは何となく避けて、薄暗い路地を二人並んで歩く。

冷たくなった風が、車が通るたびに頬を刺し、そのたびに命斗はコートに顔をうずめていた。それからまた、明るい声で去年の体育祭や文化祭のことを話し始める。

私は相槌を打つばかりだったけど、肌を刺す冷たさがあまり苦ではなかった。

駅の明かりが中央通まで照らし、自分の影がどこまでも後ろに長く。後ろ髪を引かれるように、帰り道を急ぐ雑踏に目をこらす私に命斗が声をかけた。

「また明日、学校で」

天照のように笑いかけられ、私の中のもやもやまで晴れた気がした。

「ああ、明日は仮病で休みます」

軽口も叩けるくらいには、わだかまりは収まっていた。

7-4 (後書き)

クロハネの一件落着
あと2回くらい続きます

翌日は、ベッドに縫いつけられた感覚で目が覚めた。

そもそも昨日は、自分の部屋に帰ってくるなりベッドに倒れ込んで、ほとんど気でつするよう眠った。朝起きたらなぜか布団の中にいて、布団から這い出るのもやっとなくらいには体全身がだるかった。……左手の痛みも、後から付随してきたって感じた。

リビングに下りて来たところで、素直に休みなさいと姉に言われ、母さんに言われて。なんか逆に反抗心が沸いてきて私は学校に行くことにした。

「おっはよー。……。アキ……？」

いつもの曲がり角で、陽子は出会うなり眉をひそめた。相当やつれてるであろう私の顔をじつくりと眺めて、数秒間悩むように首をかしげて、最後はニカッと笑った。

「なんだよ……」

「なーんでも」

端が下がった目を向けても、陽子は含むように笑って、腕を絡めながら寄り添う。

「なんか、憑き物が取れたみたいっ」

「代わりに、うつ病一步手前くらいには、精神的疲労が大きいがな」
私は呆れた溜め息について、けれど半ば陽子に寄りかかるようにして学校までの道を歩いていった。陽子のやわらかい感触とは裏腹に、体重を預けてもつぶれる事はなかった。ありがと。と呟くように言った。

校門をくぐった辺りで、なにやら黄色い歓声が聞こえた気がしたが……命斗か葵でも通ったんだろうか。隣で陽子も、照れるように笑ってるように見えた。

それから志刀や西貴と挨拶を交わし、須磨に一声かけて……全校集会に参加して。その後が記憶は実に曖昧だ。

多分二時間目くらいに限界が来て、急に意識を失った。

結局、今回の件は生徒会によるでっち上げと言うことで誤魔化された。

早朝の全校集会で、命斗は？クロハネ？の顛末として次のように語った。

学祭で『新・三獄話』なる物を企画していて、生徒会が三つの愉快で新しい怪談話を作り交付すると言うものだ。当日は、それにちなんだ衣装をまとった生徒が校内と歩いて回るといったものだという。それぞれの生徒にスタンプかシールを持たせて、スランプラリー的なものにしたいとも説明した。それで、考えていた一つが？クロハネ？で、事前に漏れたからついでにデモンストレーションにしてみましたとか何とか。

そんな他愛ごとで誤魔化されるかと顔をしかめていたら、日ごろの善良のせいとか、集まった全校生徒は拍子抜けという感じに破顔していた。今更だが、不公平だと思う。

命斗は最後に、当日まで楽しみにしていたとちゃっかり宣伝をして会を締めくくった。

若干の緊張も砕けていく帰り道、

『後二人は誰なんだ？』

『何言ってるんだ、一人だろ』

『いや無理だろ、普通。誰があのだ二人に肩並べれるんだって』

『黒歴史だな、はは。女子じゃなくてよかったあ』

『けど、今朝の子とかは、結構いい線行くんじゃないの？』

などと、意味のわからないことで盛り上がる声を聞いて、後で痛い目見るんじゃないかと溜め息を漏らした。

後日会長様に問いただしてみれば、嘘は実現しない時初めて嘘になる――らしい。だったら私を巻き込むな。とは、体育祭があけて『あなたたちの衣装よ』と葵ともども呼び出された時の私が言ったセリフ。つまり命斗がぐちぐち言っていたのは始めから私を巻き込

む気だったってことで。
全く……迷惑な話だ。

風に触れる葉の音を遠くに聞き、体が浮遊したような、夢と現実が混ざり合う中で意識が浮上した。

「お疲れ——」

ぼんやりとした意識の中に声が響く。私を労わる優しい声だ。つられるように目を開けると、口調に似た線の細い顔があった。

「——……？」

そいつを呼ぶ声はまだ曖昧で、聞き取れない。けど、声をかけられたそいつは少し驚いたように、目を大きくした。

「あ——、起こ——？」

そう言いながらわたたと手を振ったあと、収まりが悪かったのかそつと額に触れる。目を細め、らしくないほど落ち着いた声で続ける。

「西貴がたきつけたって聞いた。何があったかまでは知らねえけど、まあお疲れさん」

西貴……ああ、昨日のことか。ぼんやりとした思考の中で、前髪の手を掻き揚げる暖かさが、嬉しいような恥ずかしいような……。私は顔を背けるように寝返りを打った。

それから呟くように言う。

「私は……、結局中途半端だった」

昨日の晩、私がやったことといえば、桐森のことを自分と置き換えて、好き勝手に感情を吐き出しただけ。あの場が収まったのは、命斗が桐森の彼氏を連れてきてくれたからだ。葵はありがとうと言ったけど。私は何がしたくて、何ができただろう。……解らない。

私の気持ちたちが沈んでいくと、——は私の肩に手を置いて、その細くもたくましい手で私をあやすようにぽんぽん叩く。

「いいと思う。お前はお前で」

わずかにげた視線の先には、へらへらと笑う顔があった。

「――はさ、なんつうの、一見芯がしつかりとしてて、あといつもなんか冷めててっぽ引いた感じだけだよ。実際はずっと見てないと、俺らの知らないところでいろんなしがらみに黙って押しつぶされてる気がすんだ。お前って優しすぎるから……。優しくて、柔軟で、相手の悪いこともいいことも素直に見つけて、見つけた自分の中に押し込んでしまおう」

顔を赤らめながら、必死に視線を外さないようにしながら、――ははっきりと言葉にした。

「だから、お前は中途半端じゃない。両方持ってるんだ。だから強くふるまうことも、弱い奴の気遣いもできる。お前はさ、もっと自分に自信持っていんだ」

そいつの視線はどこまでもまっすぐで、太陽でも背負ってるんじゃないかってくらいにまぶしかった。けど目を離したくない自分もいて、目を細めて見つめていると、そいつは弾かれたように顔をそらしてしまった。

「そそそなんだから、お、俺は、魅かれたんだ。違うぞ、やましい気持ちとか浮ついたものじゃなくて、で、でっ……友人として、支えなきゃっておもったんだっ。誰かさんは一人つつぱるような難儀な性格してっから、だから、その、いいつかはっ」

急にたどたどしくなる声には好意的な、穏やかな色合いしかなかった。私まで照れくさくて笑うしかなかった。

「ふふ、じゃあ楽しみにしてるよ。――う」

視界が霞んで、また意識は遠くなる。

輪郭が滲んでいき、紅葉のように真っ赤な声が最後に響いた。

「へ、あ、え……や、いやいやいや。ち違うっつ、俺はお前が言ってくれるまで待つっつことで、それくらいしつかりとした男にっつ――て、寝ちまつてるし……はああ、ばかみてえ、一人ではしやいで……。……。まあ、ゆっくり休めよ。おやすみ、笹本」

騒がしい盛んな声が妙におかしくて、額に触れる角ばった手は暖かくて、私は布団を寄せてゆるむ口元を隠した。

ああ、おやすみ、志刀……。まどろむ意識の中に言葉は沈んでいった。

疲労が張り付いた体は、不思議と淡いまどろみの中に落ちた。布団に包まれ、内側にももったぬくもりを、私は大事に抱くようにしていた。

その時ばかりは、？イマ？に寄りかかって眠った。

「……ん、……ふぁ、……。……ここどこだっけ」

白いタイルのような天井を見上げながら呟いてみる。いや、どう考えても保健室だろうがさ……。

朝から結構フラフラで、ほとんど陽子に支えられながら登校してきて、授業は……受けた記憶がない。教室にはいた気がする——と少し額の辺りが熱かった。机か何かにぶつけたんだろうか？ ……無理だ、思い出せん……。

「ん。丁度起きたみたいだな、会長殿さんや」

ぼんやりと寝返りを打っていると、少し離れたところから保健医の低い声が聞こえた。相変わらず、デタラメな呼び方だ。

程なくしてカーテンが開いて、目鼻のくつきりとした美女が顔を出す。軽く波打つ髪が光を放つように広がり、私の顔を見て表情を花開かせる。……命斗は私を見てすぐ、物腰柔らかに微笑んで目の端を和ませた。

「笹本さん、丁度良かったわ」

「——おやすみ」

布団をかけなおして、硬い枕に横たわり、いざ夢の中へ——

「とりあえず、服を脱がせばいいんだろ？」

「何の話だ、パワハラ保健医」

私は氷河期のような冷たい視線を、瞳のにごりきった女医に向けた。切れ長の目や紅をさした口元など、蠱惑的な雰囲気をもっているが、実質は性格破綻者なのだ。

「だからな、養護教員権限で女子生徒の赤裸々なすがたを展示して、一儲け」

質問に対する回答も、当然というか命斗が引き継いだ。

「本当なら昨日呼び出した際お願いするつもりだったのだけど、今度の体育祭について少しね」

少しと前置きしながら、命斗はパンフレットの作成から配布、プログラムごとの出場者案内など、おおよそ私には何の関係のない話をつらつらとした。

「手伝えと？」

「あ、あと、こっちが本命なのだけど、今大丈夫かしら。さっきまで寝ていたみたいだし、まだ体調が悪いなら後日あらためて……」

「いや、顔色を見る限り大丈夫だろう」

「じゃあ、付いてきてくれる？ ええっと、生徒会室は……駄目ね、今真西君たちが作業してるはずだし、……家庭科室に押しかけても大丈夫かしら？ 少し確認してくるわ」

いや、その前に当人^{わたし}を無視して話を進めないでくれ。と言う間もくれず、命斗は携帯で家庭科室（多分）の誰かに連絡を取り、和やかなうちに話はまとまったらしい。

「それじゃあ、行きましよう？」

花よりも華やかに手を引く命斗に、私の拒否という概念はなかった。

抵抗は無駄だと割り切って、私は一つたずねた。状況はまったく見えてこない。

「えっと、……今何時間目だ？」

命斗はえらく機嫌がいいのか、肉厚な唇に指をあてがい、小首を傾げながらに答える。

「もう六時間目まで終わったわよ？ さっき貴女のクラスに行ったら、ええっと、河内さんだったかしら、彼女がものすごい猫かぶり声でまだ保健室って言うからこっちに来たの」

百合香はこいつのこと目の仇みたいに思ってるからなあ——ではなく。

六時間……いや、多分二時間目からだから、……四時間か。ずいぶん長く寝ていたもんだ。その割には体がだるくないが。そういえば。

「……………」

「どうかした？」

「寝すぎで脳がとろけてんだろ。これだから最近の若いのは、すぐ疲れたとか言ってる、だらしが――」

「いや……」と答えかけて、思いきって聞いてみることにした。胸にかすかに残ってる温もりの正体を、確かめてみたくなったのだ。

「そういえば、命斗、その前に私の様子見に来たりしたか？」

ぼんやりと霞む、淡く暖かい光景を思い出し首を傾げる。命斗も同じように怪訝そうな顔をして、「さあ」時のない返事。……どうやら違ったらしい。じゃあ、陽子だろうか。……うん。陽子なら休み時間になるたびに来そうな気がする。それに百合香――とそこで考えるのを止めた。

「ちなみに、私は基本ここを放棄するから、いつ誰が来たかなぞしらん」

「いい加減、あんたは職務怠慢で訴えられればいいのにな」

隣の保健医が、訊いてもないのにあっけらかんと言いつけるので、私は冷たくぼやく。辛辣な声色だったにもかかわらず、保健医はニヒルな笑みを浮かべていた。

「そっちは生徒会でも検討しておくわ。さ、手芸部にも無理言ってるんだから早く、早く！」

「わ、ちょ、ま、」

半ば引きずられるように命斗に引かれて、私は足を絡ませながら保健室を後にした。残された保健医は「これで最後か」とか、感慨深げに漏らしながらタバコを取り出していた。あんたの名残はタバコしかないのか！ と心の中で叫ぶ。

その間も命斗は一方的に私を引っ張っていた。廊下にまだ残っていた生徒たちが、命斗に気づいて挨拶したり、はしゃいだ声を上げたりして、かなり居心地が悪かった。

「さて、忙しくなるわね」

「私は……嫌な予感しかない」

一人ぼやくも、私はしっかりと握られた手を振りほどけるほど辛

辣ではなくて。容赦なく引っ張っていく命斗に追いすがらよう連れていかれる。

「それで、今度は何を――」

「貴女は中途半端じゃないわ。私と黒羽さん、二人が持つてるものを一人で抱えて、それって素直にすごいことだと思うもの」

溜め息混じりの文句は、命斗が一蹴する。故意か、意図か、その言葉はまどろみの中で聞いた言葉と同じで。……少し、違う気がした。その違いはひどくぼんやりとしたものだけど、なぜか重要なことにも思えて、また胸が温かくなる。

自分の高鳴りを不思議に思っていると、不意に命斗がこちらを見た。

「貴女が、私と葵さんをつないでくれたのだから」

くすぐったそうに笑って、すれ違う男子たちを次々に悶絶させる命斗の手を、私はそっと握り返す。胸の高まりも、命斗の熱にやられたことにして。

「そういうことにしておくよ」

久しぶりに、また素直に笑えた気がした。

8-3 (後書き)

これにて笹本秋の物語は終了です。

長い間付き合ってくださった方、誤字脱字、説明不足、盛り上がり不足

が多かったと思いますが、最後まで読んでいただいております。ありがとうございました。

感想、批評、いつでもお待ちしております。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1661v/>

灰羽

2011年7月25日03時37分発行